チート魔術師と桜の木

毬藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チート魔術師と桜の木

【Ｎコード】
Ｎ０８０７Ｒ

【作者名】
毬藻

【あらすじ】
俺【槻月　葵（きつきあおい）】は神様の手元で簡単に死んでしまった。

しかし、その死なした代価として俺が生まれたい世界に行くことと能力を持たせてそして、記憶を引き継いで生誕することが出来ると言って来た。

俺は迷わず『Ｄ．Ｃ．？　Ｐ．Ｃ』の世界に選択。
音姫や由夢や他のみんなと交えた世界でゆっくりとのんびりと過ご

す事ができるか??
そして、自作の【D．C．?&なのは　～時を越えし者の物語～】
とのクロス、世界は完全に原作ブレイクですが何か問題でも（黒笑）

プロローグ（前書き）

駄目文ですかこれからもよろしくお願いします」

プロローグ

プロローグ

俺は、槻月（きつき）　葵（あおい）で、ゲームが好きだった高校三年だったが・・・

「ここ・・・どこ？」

さっき、子猫を助けようとして、桜の木に登ってまでは良かったんだが。

「何となく予想は出来てんだが」

「その通り、と言いたかったんですが・・・本来とは違うんです」

「だけどなぁ？」

あえて、スルーしたかったんだが声が聞こえたのでその声の主に振り返った。

そこに居たのは、二枚の白い翼の女性が現れた。

「・・・で、違うって言うのは？」

「本当は、軽い脳震盪で、数時間経てば回復するはずだったんですが・・・上司の方が、書類整理が半端ない量だったみたいで、間違って【死】の方に丸をしちゃったみたいです」

その話を聞いて、俺は開いた口が塞がらなくなった。

俺の人生ってそんな終わり方かよ。

「それで、ここからが本題になります。本来なら記憶とか能力は一時的にリセットをしないといけないのですが、次の生まれる場所と

身体の能力を設定して産まれる事が出来ます」
「そんな事をしていいのか!?」
「はい。上司からも神様からも許可はもらっていますから可能です。貴方が行きたがっていたＤ．Ｃ．２　Ｐ．Ｓでも構いませんよ」
「おぉ!!　マジかよ。じゃ、そこでお願い」
「世界の設定は完了したわ。次は、身体とか魔力なんだけど・・・」
「能力とかは全てガンスト・・・魔力などの変更は自分で臨機応変に変更できるようにしたい・・・スキルは何でもＯＫ?」
「えぇ、大丈夫よ」
「リリなのの魔法と剣技一式と他の俺の知ってる作品の技術や能力一般、時間を操る魔法、どんな物や物質を治す事が出来る魔法・・・ただし、死者蘇生は除かしてほしい」
「・・・死者蘇生は当たり前に付ける事は出来ないから安心して」
「後は、九頭龍の技とか使え・・・」

すると、俺はここまで言って言いどよんだ。

「どうしたの?」
「うん、小学二年まで【どんな物や物質を治す事が出来る魔法】は一回だけ使えるようにして欲しい・・・小学二年になったらまた使えるようにして欲しい」
「・・・なるほどね、わかったわ。後は、姿だけど」
「そっちで決めても構わない、けど・・・」
「不細工な姿にしないから安心して」

その言葉に安心した。

「とりあえず、リリなのの魔法が存在するから、デバイスを設定しないといけないわね」
「デバイスはインテリジェントとアームドの二種類転換型は出来な

い？　語源は日本語で」
「可能よ。アームドの武器形態は・・・小太刀二刀で良いんだとね？」
「うん、名前は決めてある【シャルティエ】」
「はい、設定は完了したわ」
「うん、ありがとう」

小さく笑った。

「・・・・・・・・・／／／」
「どうしたの？」
「うんん、何でも無い・・・それじゃ、行くわよ」

次の瞬間、葵の下に大きな穴が発生して

「なんで、このパターン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

そして、俺（僕）はＤ．Ｃ．２　Ｐ．Ｓの世界に生まれた。

プロローグ（後書き）

毬藻「読んでで下さりありがとう御座います」

葵「これからよろしくお願いします」

主人公設定（前書き）

今回は主人公とデバイスの設定です

主人公設定

毬藻「皆さんこんにちは、毬藻っす♪」

音姫「朝倉音姫です」

毬藻「えっと、今回は主人公【槻月（きつき）　葵（あおい）】くんの設定を公開したいと思います」

音姫「毬藻さんって、あんまり設定公開ってしないですよね？」

毬藻「基本がその場での記入するタイプだしね……一番最初だって言うことで今回は初期段階と後は、オリジナルキャラが出てきた時のみ記載していこうかと考えてる」

流「今回も時間がわからなくなってそのままほったらかしにするなよ？」

毬藻「……流、何でお前が来る？」

流「何でって……今回あらすじにクロスするって言ったから、取り敢えずは俺も出ないといけないかなって思ったんだが？」

毬藻「…それでもいいんだけど……では今回の主人公の設定を公開します」

名前：槻月（きつき）　葵（あおい）
性別：男性又は女性（笑）
身長：１０６ｃｍ（５才児・変動あり）

体重：２３ｋｇ　―５才児・変動あり）
使用デバイス：シャルティエ

能力関係
魔力：Ｄ－～ＳＳＳ＋（状況に応じて変動）
魔力色：白水色

身体能力
視力：２．０（状況に応じて変動）
体力：Ｂ＋（状況に応じて変動）
瞬発力：Ｂ
握力：Ｂ＋

使用可能魔法―（現段階で）

コントロール型のフィン―（魔法球）
なのはが使っているコントロール魔法と同じ。使用に応じて形態変化が起こせる。
これは、シャルティエ無しで使用可能。

光鷹翼（こうおうよく）
物理・魔法・法則無視で防御・攻撃をすることが出来る。
敵が高次元に逃げたとしても、その次元から引きずり出すことも進入することも可能。
武器の形状は様々で剣・弓・銃など状況に応じて使うことが出来る。
剣の名前が【閃光剣】とも言っている。（オリジナル）

毬藻「次は葵が所持するデバイス紹介です」

名前：シャルティエ
種類：インテリジェンスデバイス
音声：女性
性格：まじめ

夢幻書庫の管理を行っていて、哲学者でもある。
状況に応じて、アウトフレーム（人間型）にも変化することが出来る。
主なことは、葵の魔法の使用権限の認証を受け持っている。精神が繋がっていれば別次元の能力・技能は受け渡しが可能。

《例》
葵「シャルティエ、夢幻書庫の管理者権限を発動をさせなさい！！」

シャル《権限認証します》

葵「使用作品【まもって守護月天】、使用武装【支天輪】」

シャル《使用武器転送》

流「……天明らかにして星来たれ　玄武の星は召臨を厭わず、月天は心を帰せたり。来々【羽林軍（うりんぐん）】」

その後、一つの家が崩壊したのは言うまでもなかったｗｗｗ

毬藻「……なんか拙い例だした？」

流「最初の召喚ネタと能力が【月天】かよ……」

毬藻「本棚の近くにあったのがそれだったんだから仕方ないだろうが（汗）」

音姫「……何処の家を倒壊させたんですか？」

毬藻「……巍の閨を壊してみましたｗｗｗ」

流「……どっかから苦情が来るぞ？」

毬藻「羽林軍を簡単に言うと小さな改築と分解屋さんだし？」

流「作品として１４年前だからね……（汗）」

毬藻「では、今回のキャラ設定はここまで」

音姫「能力は更新された場合はあとがきで紹介できると思います」

毬藻「今回はここまで～閲覧ありがとうございます♪」

主人公設定（後書き）

閲覧ありがとうございました

第一話：義之と流がいる世界！？（前書き）

駄目文ですが良かったら見てください

第一話：義之と流がいる世界！？

俺が、この世界に生まれて五年が経過した。
俺・・・いや、僕はと言うと・・・。

「似合うよ。葵ちゃん♪」

母親の着せ替え人形となっていた。
まぁ～、容姿が限りなく女性に近い（男の子だけど）のでこうなってしまったのだろう。
それに、赤ちゃんのときは思考が働いてしまうので、念話で天子さんとお話ししていた。
天子さんは最初に会った天使さんだから間違えないように。
誰に言ってるのかはさて置いて、俺は溜息をはいた。

「・・・なんで」

僕がいましている格好は、フリフリの着いた女性物の洋服・・・
別名が【ゴスロリ】と言われるものを着せられていた。
とりあえず、俺は反抗しないままされるがままだった。
以前に一回だけ反抗したのだが・・・。

『うふふ、私に反抗するなんていい度胸ね♪』

その後のことは・・・・・・・・・・・・言いたくありません（ガタブル）
そういえば・・・。

「お母さん、お友達のところに遊びにいていい？」
「えぇ、構わないわよ。その前に、お洋服は着替えて行きなさいね」
「は～い♪」

僕は、急いで着替えた。
取り合えず、お母さんは世間態を考える人で良かったよ。
僕は着替えが終わり外に出た。
僕の家は、結構【風見学園】から近いところに住んでる。
そのお陰で、由姫さんや純一さん、時々だけど、さくらさんに会ったりとかする。
だけど、音姫ちゃんや由夢ちゃんには合った事はないんだけど。
まだ、由姫さんに止められているかなんかだと思うけど。

「ただ単に、僕のタイミングが悪いだけかも・・・」

その要素は否定が出来ないのが痛い。
そうそう、小恋とは面識があって、お友達になってます。
この頃から柄貝があって楽しいです。

「母さんと由姫さんは仲良かったよな？」

確か、由姫さんは魔法使いを見守る人・・・だったかな。
その対象は・・・僕で間違いないかな。
それに、魔法は使ってないからこの世界は基本的には原作ブレイク寸前の状態だしな。

「確か、お母さんの話だと、由姫小母さんは今、入院してるんだったよね」

まだ、正月前・・・無理する前に何とかする事が出来る。

「この時の為に一回だけ【アノ】魔法を使うことが出来るようにしたんだから」

僕は、誰もいない裏路地に入った。
うん、誰も来る気配がない。
すると、足元から光があふれ出した。

「初めて使う魔法が移動系とはな・・・じゃ、水越病院まで瞬間跳躍【テレポート】！！」

光が僕を包んだと思うと、その場には何もいなかった。

次に出てきた時には、病院の個室・・・そして。

「葵ちゃん！？」

目の前に居たのは、病着姿の由姫さんが居た。

「うん、成功したみたい」

ぶっつけ本番で、使ったけどちゃんと目的の場所まで跳ぶ事は出来た。

「葵ちゃん・・・あなたは一体！？」
「ちょっとだけ、反則な魔法が使える魔法使い・・・です」

「えっ！？」

その言葉に、由姫さんは驚いていた。

「少しだけジッとして下さい・・・直ぐに終らせますから」

由姫さんに、手を翳すと白い光が集まってきた。
そして、ゆっくりと色が変化して青白い光に変化した。
光は、ゆっくりと由姫さんの体の中に浸透していった。

「この光・・・」
「えへへ・・・成功、したみたい」

その言葉と同時に僕は地面に膝を着いた。

「葵ちゃん！！？」

由姫さんはベッドから起き上がり、僕を抱きかかえたときに驚きの顔に変わった。

「熱い・・・葵ちゃん、熱があるんじゃ！？」
「もしかしたら、魔法の代価かもしれないです。これだけ上神様の違反に近い問題だし」

それか、プロテクト起動の効果かもしれないし。

「なんで、こんな事を！！」
「だって、音姫さんや由夢さんの悲しむ姿は見たくないんだもん」

その言葉に、由姫さんは驚いていた。

「なんで、二人の名前を知ってるの」
「知ってるから尚更・・・由姫小母さんには生きていて欲しい・・・二人の姿を見ててほしんだ」

駄目、意識が遠の・・・・・く。
そんまま意識がブラックアウトした。

次に目が覚めたのは、由姫さんとは別の病室だった。
そこには、僕の両親に純一さんにさくらさんだった。

「病院から連絡した時はびっくりしたんだからね」

本気で泣かれた為、びっくりした。
当たり前ではあるが。
その後、両親は抜けられない用事があると言ことで一度、家の方に帰っていた
その場に、純一さんとさくらさんが残った。

「本当に、ありがとう」
「うん、本当にありがとうね。由姫ちゃんの病気を治してくれて」

その言葉に僕は首を横に振った。

「僕は、音姫さんや由夢さん、義之君の悲しむ姿を見るのが嫌だから」

その言葉に、二人は驚いた顔をしていた。
まだ、合ったこと無い子の名前を言ったのだから有り得る事ではないかな?

「・・・義之君の名前は知って居るんだね」
「そうみたいだな」

今のやり取りを聞いて一つの疑問が出来た。
・・・『は』って事は、もう一人の『桜内』が存在しているって事だ。
僕は変な汗が流れた。
俺が書いていた、生前の小説のもう一人の主人公の名前。

「もしかして『桜内　流』くんも居るんですか！？」
「うん、知ってるんだね」

時間の覇者が居ました。
＼（＾ｏ＾）／オワター
いや～、何か凄い話が聞けたけど気のせいでありたい。
多分、この時間は確定してるし大丈夫だな・・・。
そう自分に納得するしかなかった。

第一話：義之と流がいる世界！？（後書き）

毬藻「カノン様、感想ありがとうございます」

葵「閲覧ありがとうございました」

第二話：四人に会いに行こう（前書き）

小さい時の四人です。
もう少しＴｏ　ｙｏｕをプレイしておけば良かった

第二話：四人に会いに行こう

今日は何故か、三家族の食事会になった。
何処の家族・・・もう解り切ってるだろう。
朝倉家・芳乃家・槻月家だ！！！
けど、家族って言っても槻月家は僕一人だけ、両親は本土の方に行っている。
今日一日は、芳乃家で過ごすことになった。
僕は辞退したいんだけど、朝倉家と芳乃家が強行的に行ったらしい。
前回のお礼がしたい為と言っていたけど。
・・・余計な心配はしない方がいいな、うん。
今回の食事会は近くのお寿司屋さんで行うことになった。

「それじゃ、みんな自己紹介しようか？」

さくらさんの一言で、全員が自己紹介していった。
そして、子供たちの自己紹介になった。

「朝倉由夢です」
「・・・朝倉音姫」
「桜内義之です」
「桜内流です」
「槻月　葵です。よ、よろしく」

なんか、音姫さんの幼児期ってあんな感じだったか？
確か、しっかりした部分で頑張ろうとしていたからな。
そう言えば、ここに純粋な魔法使いってあんまり居ないよな？
子供だけで言うなら、朝倉姉妹だけだし。

義之と流は桜から生まれた魔法使いだし。

「どうしたの？」

「うん、なんでも無いです」

そして、この事はさくらさんと純一さんそして、由姫さんの三人しか知らない。

もしかすると、由夢ちゃんが『夢見』で知ってるかもしれないけど。

余計なことを考えないほうがいいな。

「何か嫌いな物とかあるの？」

「・・・お寿司屋さん来ることなかったから・・・ちょっと、躊躇い中かな」

ただ、店に行った事ないだけで握りは食べたことある。

・・・お母さんが、握るんだけど。

「そうなんだ・・・今日は遠慮しないで食べてね」

「はい」

僕は、四人と色々な話しをした。

流石に魔法の話しはしなかったが。

「さて、五人は甘いものは好きかな？」

由姫さんは、自分の席を座りながらそんな事を聴いてきた。

「うん♪」

「皆に良い物を上げるね♪」

一枚のハンカチを取り出して、右手に覆いかぶした。
確かあれって、由姫さんの魔法で。
すると、ここにいる分のキャラメルが出てきた。

「うわぁ～」

やっぱり本物のキャラにでしてもらうと凄さは違うな。
実は、こっそりと僕もチャレンジしたて、使えるようになってはいるのだ。
しかし、この行為におどろいて居る人がいる。
それは紛れもない、音姫さんその人だ。
よくよく考えれば、ここにいる全員は魔法が使える人達なのだ。

「何で・・・・・・」

そろそろ、僕もアウトした方がいいのかもしれないな。
僕は、右手を軽く握って、掌を広げると、小さな金平糖が何個かあった。
一瞬、葛きりを作ろうとしたが流石にやばいと思い、こっちに切り替えしたのだ。

「まだ、これしか使えないけど僕も魔法が使えるんだ」

嘘はついていない。
この前に使った魔法はプロテクトが掛かっており、使用不可能な状態だ。

「もらっていい？」
「うん」

由夢が近づいて来て聞いてきたので、一つあげた。
そのまま、口の中に入れた。

「あま～い♪」
「音姫さんもどうぞ」

手に乗った、金平糖を差し出した。
一回、音姫は由姫さんのほうを見た。
由姫さんは一回頷いて見せた。
そして、意を決したように一粒とり口に方に入れた。

「あ・・・おいしい」
「うん、良かった」

流石に不味いと言われたら、僕は一生立ち直れないかもしれない。
その後は、みんな心を開いてくれた。
お開きになり、僕は家に帰ろうとした瞬間、ポケットに入っていた携帯が鳴った。
携帯といっても、子機・・・親としか通話が出来ないやつだ。

「はい、もしもし」
『葵ちゃん、ごめんね。今日は、帰って来れないかもしれない』
「帰ってこれないの!?」
『仕事のほうでトラブルがあってね・・・ちゃんと、戸締りして寝なさいね』
「うん・・・わかった」

流石に仕事から離れられないか。

「うにゃ、どうしたの？」
「さくらさん・・・今日はお母さんが仕事で帰って来れないって」
「・・・お家は一人なの！？」
「うん、お仕事でトラブルって言ってました」

その子と場を聞いた大人三人は・・・

「なら、今日は私の家に来る？」
「えっ！？」

由姫さんの言葉に、声に驚きを隠せなかった。
そう言えば、この時は義之も朝倉の家で生活していたんだったね。
設定では、流も同じにしていたし。
ドキッ！女の子たちだけのお泊り会にならなくって。

「・・・なら、お家に帰って、着替え持ってきて良い？」
「えぇ、いいわよ」
「なら、途中まで僕が送っていくよ・・・葵くんと行く方向に用事があるから」
「・・・解りました。二人とも気をつけてね」
「「うん（はい）」」

僕とさくらさんは他の人と別れた。
どうみても、さくらさんは純一さんと同じ年には見えないんだけどね。
魔法で老化を防いでるしか考えられないし。

「今日はどうだった？」
「料理も美味しかったし・・・楽しかったです」

そう言えば、まだ魔法の木のバグが治ってなかったんだよね。

「・・・さくらさん」
「うん、何かな？」
「あと二年、待ってもらって良いですか？」
「・・・何を待つのかな？」
「桜の木の暴走・・・桜の木の暴走は僕が誕生日に消す事を約束します」

その言葉と同時に驚いていた。

「・・・出来るの？」
「うん、今は、由姫さんの病気を治したから、今はプロテクトで起動出来ませんが・・・僕が七歳になる日に魔法のプロテクトが消えて、桜の木のバグを直すことができます」
「そんなこと・・・」
「神様から貰った力・・・ちゃんと有効利用しないと罰が当たりますから・・・・・・だから、待ってください」

僕は、さくらさんの手を握った。

「・・・リフレッシュ」

小さな光が、僕が握った場所からゆっくりとさくらさんの体に広がった。

「なにこれ・・・凄い・・・」
「まだ頼りないかもしれないですけど、僕を頼って下さい。出来る限り、助けたいと思いますから」
「うん・・・うん・・・ありがとう、葵くん」

そう言って抱きついてきた。
その後は、朝倉さんの家に泊ったのだが・・・その内容については後日に話したいと思う。
だって、僕にとっては、カオスだったんだもん！！

第二話：四人に会いに行こう（後書き）

うん、俺原作あまり壊すって事をあまりしていないから原作に忠実になってる気がする。

葵「けど、主人公核の作品を二つ書いてよくぶれないな？」

葵と流の作品にある程度の境界線引いてるからぶれない様にする意識をしているんだよ。

葵「また面倒ですね」

んでもって、後書きに書いてる【葵】は分校3年生バージョン♪

葵「ホント、分別が出来てると言うか」

書きやすいのよね。
この時代の作品内の【葵】はまだ身に付けていない魔法が何個か存在してるし。
そろそろ、修行分岐ともう一つの分岐を作らないといけないしね♪

葵「本当にめんどくさい奴だね」

あんたの今の地位が何か凄い事になるんだけど……そこはあの作品出したことで勘弁して。

葵「……あの家族は大羅万象を簡単に無視してる人だし……何名かは人じゃないような？」

その話しは、もう少し先だな。
観想を楽しみにしてます♪

ではでは、次回もお楽しみに。

第三話：デバイスと誕生日（前書き）

やっと、三話を更新できました。
皆様には感謝感謝です。

第三話：デバイスと誕生日

０：０１・・・日が変わってまだ一分しか変わってない。

「日が変わったから言っておくね。お誕生日おめでとう、あおくん」

「あはは・・・ありがとうです」

僕は、大きな桜の木の前にさくらさんと居た。

本当は由姫さんとか純一さんとか来たいといっていたが、流石に大人が全員が家を空けるのは出来ないのでさくらさんが代表でここに来たのだ。

「・・・バグを直したとしても、魔法の桜としては代わりありません・・・昔あった『桜の木』と同じになります。それは平等にそして、真撃な思いで合ったら力を貸す、魔法の木になります」

「そっか・・・」

「それじゃ、行きますね」

僕は、手を幹に当てた。

幹は温かく、生きている鼓動が聞こえた。

「・・・アクセスコード選択・・・解除確認！！」

僕は、体の魔力を全力で通した。

「コード選択・・・改正改正改正改正！！！！！！」

次の瞬間、さくらが一気に花を枯らした。

ここから勝負！！

「正常コードを繋ぎ開始・・・１００％書き換え終了」

すると、さくらの花が一気に咲き始めた。
それが確認できたと同時に僕は地べたに座り込んだ。

「・・・終ったの？」
「うん、全部終ったよ・・・バグも何もかんも」

さくらさんにそう言うと、急いで電話をしていた。
そして、電話が終ると、涙目になっていた。

「・・・義之は？」
「うん、平気だって・・・これで本当に大丈夫なんだね？」
「はい、桜の木の事故は今後は起きないですし・・・発動もしませんから安心して」

僕の目線になっていたさくらさんをぎゅって抱いた。
これで、さくらさんが苦渋の選択をすることは無くなった。
ここからは、殆どオリジナルの中身になるのは間違いないかな。
それにしても、かなり眠い・・・全力で魔力使ったからだろうか、体がだるい。

「さて、お家に帰りましょう・・・皆が心配しますよ」

僕達は、家に帰った。

誕生日だけど、まだ寝足りないのが本音。
今日は誕生会と・・・もう一つ今日のメインイベントが存在する。
僕は、桜の木の前に居た。

「うふふ、お久しぶりです」

その声に振り返ると、一人の女性が居た。
その背中には、二枚の翼を身につけた。

「はい、お久しぶりです」
「生まれる前に言っていた、デバイスだよ」
『初めまして・・・』

蒼い宝石が小さく光った。

「うん、初めまして『シャルティエ』・・・これから大変なことや楽しい事もあるかもしれないけど、私に力を貸してね」
『我が使命に変えて貴女を全力でサポートします』
「うん、後、僕は男の子だからそこの所は間違えないようにね♪（黒笑）」
『わ、解りました』
「ありがとうございます・・・」
「うん。これから大変なことや悲しいことがあるけど、頑張って乗り越えて」

そう言って、僕に抱きついてきた。
そのとき何となくだが解った。
僕の身近なところで不幸なことが起こる。
しかも、それは回避が出来ないことだということだ。

「・・・はい、ありがとうございます」
「私は、戻るね・・・見守ってるから」

そして、天子の体はゆっくりと消えていった。
さて、はやく朝倉家に行かないと皆が心配しちゃうな。
俺は足早にその場を後にした。

「あ、きたきた」

外には、義之と流が居た。
義之は、大丈夫みたいだな。

「ねぇ、葵ちゃん。僕と魔法勝負をしてくれない」
「魔法勝負？」
そういった瞬間、流は操作系のスフィアを展開した。
「一回だけ、訓練がてら・・・お願い！！」
僕が作った、半チート魔術師だから結構いいところまで勝負できそうだし。
「うん、いいよ。場所はどうするの？」
「そこは平気だよ。フィーナお姉さん、特殊フィールドを展開して下さい」
『了解しました』
女性の声が・・・って待った！！
何で、フィーナがここに存在してるんだ！？
彼女は、もう少し経たないと、契約が出来ないはずなんだが。
どっかで、狂ったとしか考えが出来ないな。
「今、ここから半径５ｋｍは特殊結界で誰も侵入は不可能にしたよ・・・それじゃ、始めるよ！！」
義之の合図で、僕と流は誘導弾を形成した。
大きさは同じくらいで、僕が水色、流が蒼色だ。
「スタート！！」
振り落とした瞬間、誘導弾は天高く撃ち上がった。
そして、二つの弾は激しくぶつかり合った。

本来なら、魔力弾はぶつかったら消滅をするのだが、今回二人が使ってるのは違うものだ。
魔力供給で、完全消滅しない限り半永久的に再生する代物だ。

「くっ・・・つぅ・・・」

何回もぶつかり合い、そして瞬時に回復する。
しかし、よく考えてみた。
僕、不利じぇねぇか？
フィーナがこの世界にもう既に誕生しているということ・・・つまり・・・・・・

『魔力炉が既に完成しているって事・・・どう考えても不利なんじゃ（汗）』

けど、真剣に挑まれて勝負だし・・・無碍には出来ない。
しょうがないけど、今回は負けを認めよう。
というか、既に僕の魔力がきつくなってるのだから。

「終わりだよ！！」

一瞬の油断がいけなかった。
流の誘導弾が行きよい良く突っ込んできて砕けた。
再結成させようとした瞬間、流の誘導弾が俺の魔力弾を吸収した。
って、そんなこと有りかよ。

「やった～、勝った～♪」
「うわぁ～、吸収は反則だろう」
「技の指定は無いから、大丈夫なんだよ」

よし、今後は問答無用で潰してあげよう。
僕は心の中でそう呟いた。

「う、何か嫌な予感が・・・」

流は、顔を真っ青にそう呟いたが僕は無視した。
結界は解除させた。

「葵ちゃん、そろそろ始めようか」
「・・・何をするの？」
「うふふ、それは始まってからのお楽しみだよ・・・二人はさくらさんを呼んできてくれる？」

由姫さんの言葉に頷いて、芳乃邸の方に入って行った。
て、由姫さんなんで僕の後ろで笑顔なんですか。
その眩しい笑顔が直視できないのですが。

「それじゃ、葵ちゃんはお仕置きと準備をしようか♪」
「・・・えっ？」

直視出来たその笑顔は天使だったが、口元は笑ってなかった。

「魔法・・・無闇に使わないって約束したよね？」

そう、僕の魔法はあの最初の魔法でみんな心配しているのだ。
その心配はもう無いのだが・・・。
あのぶっ倒れかたしたのだから、心配性なのだ。
今日の誕生日で、それも殆ど解消しているのだが。

数分後・・・

「・・・・・・（ニコニコ）」
「・・・・・・（シクシク）」

今日の主役なのに・・・。

「・・・・・童顔だし顔立ちが女性みたいに顔の肌理（キメ）が細やかだから薄いお化粧だけで出来たんだね」
「さくらさん、どうですか♪」
「うん、バッチリだよ」

年齢不詳のさくらさんには言われたら終わりなのは気のせいだろうか？
それにしても、この服は一体何処から仕入れてきたんだろうか。
そこが謎なんですけど。」

「それ、葵くんのお母さんから借りてきたんだよ」
「心の声を答えないでください！！」
「自分の口から言っていたんだけど―（汗）」

そう呆れながら、さくらさんが答えてくれた。

「・・・・・さくらさん、お仕事の方は今日はいいんですか！？」
「うん、もう問題は解消したよ。これからは、学園長として頑張っていけばいいって言われたから」

いやいや、言ってませんから。

「・・・・・さくらの修正は大丈夫なんですか！？」

「そこは、葵ちゃんがしてくれたよ」
「・・・・・・やるな」

けど、こんな事を話して良いのだろうか？
周りには、うちの両親がいないし。魔法使いとしては全員召集してるし。

「・・・・・・さくらさん、後でちゃんとお話を聞かせてくださいね♪」
「由姫ちゃん、顔とオーラが全然違うから・・・・・・」
「うふふ・・・・・・」

このときの全員の言葉が。

【葵ちゃんに魔法使わせるときは由姫さんに話してからの方がいいな】

全員の感想でした。

《私からも、お誕生日おめでとうございます。主様（マスター）》

次の瞬間、全員が驚いた顔をしながら僕の方を見た。

「・・・・・・今喋ったのって？」

俺はそのとき、しまったって思った。
シャルティエを不音声モードにして待機をしてもらうことを。
俺は、仕方なくペンダントを取り出した。

「シャルティエ、挨拶して」

《初めまして、私は【シャルティエ】と言います。以後お見知りおきを》
「わぁ～、すご～い」
「・・・・・・・・・」

由夢は感激の声を上げていた。
音姫は、デバイスを驚いて様に見ていた。

「真撃な願い？」
「あはは・・・違う人からです」

流石に人外とは言えないな。

「その事は後にして、では改めておめでとう～～～」

そして、皆かあら祝福され幕を閉じた。

第三話：デバイスと誕生日（後書き）

毬藻「悠久の時さん、感想ありがとうございます」

葵「時間到達が早いな？」

毬藻「実は、少しサクサク書かないと、二人の時間クロスが出来そうでないからな」

葵「時間クロス？」

毬藻「時間軸の離れた話を書くことにしたんだよ……中身は、少し厄介だけど（笑）」

葵「厄介ってどんなことだよ？」

毬藻「それに関しては企業秘密……そこに行くまでは葵でコラボしたいなとは思ってるからね」

葵「取り合えず頑張ります」

毬藻「ではでは、次回もよろしくお願いします」

第四話：悲しい結末（前書き）

毬藻「ふ～～ダメージ量が半端じゃなかったです（汗）」

輝羽「確かにあんまり書かないタイプですからね」

毬藻「執筆中、どう表現するか悩んでしまったからな」

輝羽「そう言えば、クロス作品にするって言っていたよね？」

毬藻「まだ小さいからね……葵と流がね。それに、こっちも独自クロスと言うか、物語を構築してるから別物としてもらえればいいかな？」

輝羽「ではでは、見てください」

第四話：悲しい結末

そして、季節が巡り一年が経過した。
僕は、小学三年になり、流や義之たちとは同じ学校そして同じ学級になった。。
何となく作意みたいなのが合ったが気のせいですよね？
さくらさん・・・
そしてもう直ぐ僕の誕生日だ。
この頃、僕の母さんと朝倉さんちの由姫小母さんがこの頃会っているのがとても気になる。
変な事にならなければ良いんだけど。

「あおちゃん、戸締りの方はちゃんとしておくんだよ」

誕生日前日、お父さんとお母さんが慌しくしている。

「何処かに行くの？」
「あぁ、お母さんの実家に少し用事でな」
「確か、お母さんのお家って岡山だったよね？」
「そうだ、そこで少し……早めに帰ってくるからちゃんと待っているんだぞ」

すると、おれは二人の服装に気なった。
凄く動きやすそうな服。
普通は、両親の実家に帰るときとか少しでもお化粧とかするんだけど、それが無い。
そう言えば、お母さんの実家の名前って何だっけ。

【柾木】って聞いた事があるんだけど。
あれ、どっかで聞いたことあるんだけど。
う～ん、何か引っかかるんだけど・・・・・駄目だ、全然思い出せない。
引っかかるものまではあるんだけど。
誰かに拒まれている気がする。

それが、今朝の話。
今はお昼前。
今は朝倉さんのところに来てお料理のお手伝いをしている。
生前は親父と二人暮らしだし、料理はおれが担当していた。
料理の腕前は、ちょっと自信があったりする。
まぁ、お母さんの手伝いしていたりするから覚えて行ったんだよね。

「それにしても、美津那(みつな)さん、急にどうしたんだろう」

美津那さん・・・僕のお母さんの名前だ
旧姓が【柾木(まさき)　美津那(みつな)】で柾木天地さんの親戚、遙照(ようしょう)さんの孫さんじゃなかったっけ？

「・・・・・・・・・まさき　てんち！？」

その言葉で、もやもやが一気に晴れた。

「天地無用！魎皇鬼」

しかも母親の旧姓が柾木家一族の血。
僕はエプロンをはずし外に出た。

「えっ！？　あおちゃん！！」
「シャルティエ、飛行能力！！」
《飛行モード》

俺は天高く飛び上がった。

『間に合ってくれ！！』

俺は、音速飛行で僕はお母さんたちの力を感知する方に向かった。
何で今までお母さんたちの力を感知することが出来なかったんだ！？

そこで、考えれることが二つ。
一つは、産まれて間も無く両親によって封印されたか。
もう一つが、神様の力によって封印されたかって言うことだ。
最悪の場合は、その両方によって力を完全に無くなったかだ。
一番最後のが一番しっくりするんだが。
そして目的の場所に着いた時絶句した。

「・・・・・なんだ、てめぇは？」

ゴツイの男が一人の女性を殺めていた。

女性の人は力なく手をダラーンと垂らしていた。

その女性の人は知っていた。
僕の・・・大切な・・・・・・お母さんだった。

「お母・・・・・・さん？」
「ふん、こんな奴をやっても楽しくないな・・・・・・もっと強い奴はいねぇかな？」

そう言って、お母さんをこっちに放り投げた。
僕はよろよろと近寄った。
嘘だ。
嘘だ嘘だ
嘘だ嘘だ嘘だ！！！！！！！！！！！
嫌だよ、僕を一人にしないでよ。

『これから大変なことや悲しいことがあるけど、頑張って乗り越えて』

デバイスを渡すときに言った天子さんの声が頭の中に響いた。

「（これが、悲しい出来事なんだね）」

転生しても肉親なんて守れないなんて、意味が無いよ。
神様は残酷すぎるよ。
けど、決まった。
今から僕がすることは・・・・・・・・・・・・あいつを本気でブッ飛ばすこと！！！
僕は、お母さんの開いていた目を閉じた。
そして、お母さんの動かない体に強く抱きしめた。
もう冷たくなっている体、もうその温もりも感じることは出来ない。

僕は、もう一度周りを見渡すとお父さんも居た。
お母さんと同様、生気を感じることは出来ない。

「シャル・・・・・アームドデバイス『小太刀二刀』に変換」

《解ったわ》

ペンダントが白水色に輝きだし、光が収まると葵の手には二本の小太刀が握られていた。

「ほぉ～、お前がやるって事かい！？」
「うん、相手してあげる。貴方に、後悔と死ぬ事の辛さを存分に味合わせて上げるから♪」

次の瞬間、僕は加速した。
通常の加速ではない。
永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術・・・・・その移動術

【神速】

そして、そこから発生する攻撃術

【小太刀二刀御神流・裏　奥義その参　射抜】

「チビが、舐めるなーーーーーーーーーーー！！！！」

人体に当たる寸前で障壁に阻まれた。

発展技法【寸勁（すんけい）】

この技は防御が高いほど、内部に与えるダメージはデカイ。

そして、男は後ろに吹き飛んだ。

「がっ！？」

「夢幻書庫の管理者権限を発動許可」

《権限許可します》

「作品名『ラグナロクオンライン』能力『アサシンクロス』」
《起動能力発動します》
ラグナロクの上位職、姿に変化した。
「喰らえ！！　メテオアサルト！！！」
男に強打の一撃、防御を上回る攻撃を叩き込んで吹き飛ばした。
「作品『魔法先生ネギま！』能力技能者付属『神楽坂　明日菜』」
そして、剣をしまった。
「右手に魔力、左手に気・・・・・・」
実質、元々は違う物だが、それを混ぜ合わせる。
「咸卦法（かんかほう）」
相乗効果が生まれる。
「・・・・・懺悔の時間だ。あんたの犯した罪を考えながら滅びな」
次の瞬間、頭上に魔法陣が生まれた。
それはとても大きかった。
「作品名『Ｐｒｉｍａｒｙ～Ｍａｇｉｃａｌ★Ｔｒｏｕｂｌｅ★Ｓｃｒａｍｂｌｅ～』使用キャラ能力『ライム・ルナ・オクレイン』武装召喚『リュカオン』」

すると、鎌のような魔法具が召喚された。
一呼吸おいた。

「復讐の女神、ネメシスよ我と我が祈りを聞き天蓋を揺らせ！」

咸卦法の力も上乗せされ、さらに魔力が上回った。

「天に満ちる幾千の星よ。我が求めに応じて来たれ、天蓋の欠片っ！　流星召喚、メテオフォール！！」

そして、その一体が大爆発に見舞われ。
その戦いに幕が落ちた。

僕は、背中にお母さんとお父さんを抱え込んだ。

「・・・・・・お、重い」

ここら辺は、確か柾木神社が存在していたはず。
お寺じゃないけど供養ぐらいはしてくれるだろうし。
死体を引きずりながら山の獣道を歩いていくと走ってくる一人の男の人がこっちに来た。

「君!!　大丈夫かい!?」

そこには、髪を後ろに束ねた男性が近づいてきた。

「お母さんとお父さんの・・・供養を・・・・・・」

僕はそのまま意識を失った。

第四話：悲しい結末（後書き）

雑談部屋♪

毬藻「物語で、次に誰が出てくるかが大体予想できるだろうな？」

鷲羽「そうね。もう少しインパクトが欲しいかな」

毬藻「鷲羽ちゃん！？」

砂沙美「砂沙美も居るよ～～」

毬藻「よ、良かった……阿重霞さん魍呼さんが着たら、後書き自体が崩壊するかと思った（汗）」

砂沙美「毬藻おにいちゃんは二人は苦手なの？」

毬藻「苦手じゃないんだけど、物語の説明と雑談が喧嘩で終了する」

鷲羽「あはは、確かにそれは嫌だな」

毬藻「取り合えず、ここで自己紹介しましょうか？」

鷲羽「では、私から……白眉　鷲羽ちゃんで～～～す♪　私を呼ぶときは『ちゃん』を付けてね」

毬藻「年上ですけど、名前にちゃんを付けて下さい。付けなかったら、変な改造とかされるので用心を」

鷲羽「毬藻殿は後で私のラボ送り決定ね♪」

毬藻「……ｏｒｚ」

鷲羽「次は、砂沙美殿の番だな」

砂沙美「えっと、柾木砂沙美樹雷です。特技は料理で好きなものは『魎ちゃん』です♪」

毬藻「そして、始祖の樹【津名魅（つなみ）】のマスターキーでもあります。どうやって契約したのかは知ってますが、ここでは秘密です♪」

砂沙美「な、何で知ってるんですか！！」

毬藻「作者特権……次回は話がかなり変わります。場所はこの二人の世界って言えば大体の方はわかりますね♪」

輝羽「悠久の時間さん、感想ありがとうございました」

砂沙美「次回も見てくださいね」

鷲羽「感想も待ってるわよ♪」

第五話：別れと出会い　（前書き）

毬藻「書いてる途中でデータが破損していた」

葵「それは乙～～」

毬藻「それでは見てください」

第五話：別れと出会い

僕は意識を取り戻した。
疲れたのか、未だに意識が混濁している。
すると、引き戸が開く音が聞こえた。

「目・・・・・覚めましたか？」

緑色のショートカットの女性が桶を持ってこちらに来た。
僕は、この人のことを良く知ってる。
【神木　ノイケ】さん、転地無用！魎皇鬼の人で樹雷の鬼姫【神木・瀬戸・樹雷】の娘さんじゃなかったけ？
と言うことは、ここは柾木天地さんの家って事になるんだ。

「・・・・・お母さん達のこと、勝仁さんが供養するってました」
「うん、ありがとうございます」

そう言った、瞬間、ノイケさんの顔が暗かった。

「私たちがもう少し早く気が付いていれば、このような・・・・・・」
「運命の系譜」

僕は、辛そうな表情のノイケさんに言った。

「多分これだけは変えられない未来だったんです。僕も記憶操作がなければ早く駆けつける事が出来たかもしれないです」

僕は、泣けない・・・・・だって、これからが大変だもん。

そう言えば、僕が倒れて何日経ってるんだろう。

「えっと・・・名前？　何て言うんですか？？」

流石に知ってるけど、変な詮索されたらたまったものじゃない品。

「私は、神木ノイケよ。君は？」

「槻月　葵です」

「・・・・・目元は美津那姉さんにそっくりね」

「お母さんと知り合い？」

「えぇ」

「そう言えば、僕何日ぐらい寝てたんですか？」

「・・・・・一日よ」

何か、悲しい誕生日だな。

誕生日に悲しい思い出を増やすなって突っ込みたいよ。

血が付いた服は使え物にならなくなり、天地さんの御下がりを着さして貰ってる。

外に行くと、神服を着ている遥照さんがいた。

その隣には、天地さんが居た。

その後ろには、砂沙美、阿重霞、魎呼、鷲羽、ノイエが並んでいた。

砂沙美の頭上には、魎皇鬼が見ていた。

「・・・・・では、始めるぞ」

その言葉に頷いた。

そして、最後に差し掛かった所で。

「最後は君の力で送ってあげなさい」

「えっ！？」

その言葉に、僕は驚いていた。

「・・・・・君のあの宝玉にはその力があるんだろ？」

「ごめんね。勝手かなって思ったんだけど、少し調べてもらわしたわ」

そう言って、鷲羽さんはポケットからシャルティエを取り出して渡してくれた。

「僕がしても構わないんですか？」

その言葉に全員が頷いた。

「シャル、夢幻書庫の管理者権限発動」

《認証します》

「作品名【とらいあんぐるハート3】使用キャラ能力【神咲　那美】」

僕の知ってる作品の中で唯一霊魂を沈めることが出来るキャラなのだ。

マイナーなのを言えばまだまだ居るかもしれないが。

ぬ～べ～とかでも構わなかったんだけど。

「神気・・・・・母さん、父さん、僕は、頑張って生きるよ・・・だから、向こうで見守ってて・・・強く生きるから」

すると、光が二つ浮かび上がり、そして天にあがった。

「終わったな」

「はい、僕のこと見てくれると思います」

絶対、頑張るから。

・・・・・ん、何か凄く忘れてることがあるんだけど。

そう言えばあの事件から一日経ってるん・・・・・・だよ・・・ね？

その瞬間、背中に凄く冷たい汗が流れた。

人はそれを冷や汗と言う。

ってそんな事を言ってるんじゃなかった。

「ノイケさん、電話を貸して下さい！！」

その後電話で由姫さんとさくらさんにこっ酷く怒られたのは言うまでもない。

そして、今の状況を説明すると直ぐにこっち来るって事になった。

「友達の方と連絡は付きました？」

電話が終わると同時に阿重霞さんが声をかけてきた。

「はい、自分の誕生日をすっぽかしてこっちにいるんですから・・・・・かなりです」

「えっ！？　お誕生日だったんですか！！？」

「この状況ですから、楽しいって感情にはなれないですから」

苦笑いしながら、居間の方に向かった。

「・・・・・・何とかしてあげたいですね」

数時間後、芳乃家、朝倉家の両名が来た。
そして、音夢さんも後から到着した。

「ごめんね」

そう言って、さくらさんは抱きついてきた。

「もう起こった事ですから・・・今後の事を考えましょうよ」

母さんの事だから、遺産相続の事はまだ考えていないと思うけど。

「そうそう、これを美津那さんから預かってたんだったわ」

由姫さんが鞄から小さな箱を取り出した。
それを、葵に渡す。
その箱を開けると、一握りぐらい大きさの物というか植物の種？
あれ、これどっかで見たことがあるんだけど？
しかもこれって天地無用の重要なキーだったような。

「どうかしたんですか？」

奥から、砂沙美さんにノイケさん、阿重霞さんが出てきた。

「お母さんの形見なんですけど・・・・・」

そして、それを覗いた瞬間。

「・・・・・・・・・・皇家の樹の種！！」

「えぇーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

津名魅（つなみ）様の方も驚いているってことは。

「始祖の樹とはまた別のやつ・・・・・・ですよね？」

そう考えるのだ思いっきり妥当。

《私の声が聞こえる》

「えっ？」

すると、幼生の種が淡く光った。

《私のマスター・・・・・名前聞いていい？》

「・・・・・槻月　葵」

「えっ、誰と話してるの！？」

さくらさんも状況についていけてなかった。

《私の名前は輝羽（きう）貴方の皇家の船》

そして、光は消えた。

「・・・・・どうしよう。マスターになってしまったんですけど？？」

「嘘！？　貴方に王位継承権が付いたって事！？」

確か、王位継承って、一位が遥照さん、二位が天地さん、三位が西南さんだから・・・・・・。

「王位継承権第四位??」

「間違いなく、皇家継承権第四位です」

その言葉で、上から下までてんやわんやになったのは言うまでもなかった。

第五話：別れと出会い　（後書き）

毬藻「今回は天地無用！魎皇鬼の世界になりました」

音姫「神咲さんの能力が出ましたね」

毬藻「とらハ３の神咲　那美さんの能力……この方は神咲家に養子として入ったんですけどね、双子の弟と一緒に」

音姫「この人の能力って？」

毬藻「この方の能力は対魔としての能力は低い代わりにお払いや祈祷としての能力はある方なの……除霊は主に久遠が担当していたはず（交渉とかはして無理なら）。祟りの力でだけど（本編での話し）」

由夢「後書きコラボ始めたら？」

毬藻「解説終わったらいきなり凄い企画立ち上げるな（汗）」

音姫「何でそんな事を？」

由夢「え…だって、毬藻さんの文章力上昇させる特訓で他の方を使えば間違えたらバッシングの嵐で弱らせて強くしようかと思って」

音姫「……文章力を付けさせるのはいいと思うけど……毬藻さんが死なない（精神的な意味で）」

毬藻「多分死ぬよ（肉体的な意味も込めて）」

由夢「と、言う訳で募集します♪」

音姫＆amp;琺藻「強行突破しちゃったよ（汗）」

杏「悠久の時間のお兄ちゃん、感想ありがとうございます（年下の妹風）」

琺藻「……杏が何でココに!?」

杏「私達も出番がないからここに来たのよ…駄目だったかしら?」

琺藻「もう、どうにでも良くなれ（汗）」

小恋「では、自壊も見てくださいね～～」

三人「って、漢字違うから～～!!」

第六話：樹雷（前書き）

輝羽「睡眠、ちゃんと取ったんですか？」

毬藻「三時間は取ったから問題ないよ」

輝羽「その取った時間も問題なような気もしないではないですが・・・・」

毬藻「第六話『樹雷』始まります♪」

第六話：樹雷

何か、お母さん達の騒動よりか僕の騒動の方が遥に上になった気がするんだけど。

「皇家の樹の儀式をすっ飛ばして、もう一つの始祖のマスターキーに生るなんて」

鷲羽さ・・・・・・

「鷲羽ちゃんよ」

人の心を読まないでください。

「これで親族がこの事を知ったら醜い争奪戦になりかねないね」

親族に皇家の継承権第四位の子が手に入れば権力が使い放題だしね。

それが普通の子供ならね。

「多分、今の家は物件に掛けることになるのほぼ確定ですし」

「それは無いと思うよ」

そう言ってさくらさんが割り込んできた。

「美津那さん、今回のことをわかってたみたいだし」

そう言ってさくらさんが取り出したのが三通の銀行の通帳だった。

その中を開けるとびっくり。
全てガンストですよ。

「あそこの土地だけを見ても数万も行かないと思うし」
「流石に車や税がかかるものは売り飛ばした方がいいと思うし」

流石に7年以上動かせない物を保持していても意味ないしな。

「けど、本当に行くの？」

由姫さんは心配そうに聞いて来た。

「母さんたちの４９日が終わったら行きます・・・・・・輝羽がちゃんと成長するよう似の、そして水も取りに行かないといけないし」
「そっか、あおちゃんが決めたことだから、ボク達は何も言えなね」
「そうね。けど、これだけはちゃんと護って・・・・・・ちゃんと元気な顔で戻ってきなさいね」
「由姫さん、もう少し先のことなんですから・・・・・・ちゃんと帰ってきます」

そして、両親の四十九日は無事に終わり、俺は天地さんの家で過

ごすことになった。
けど、これは宇宙に出るためのカモフラージュでもある。
樹雷星系には、ＧＰ（ギャラクシーポリス）が担当してもらうことになった。
因みに、護衛は守陀怪だそうだ。
天地無用！ＧＸＰまで入ってくるとは思わなかったけど。
天地無用の作品は好きだから別に良いし。
ネージュさんも居るから半分ドキドキだし♪
ネージュさんの声優？
奈々さんですが何か問題でも？

「俺はブリッジに居ても大丈夫なんですか？」
「大丈夫よ。少し長旅になるから気を楽に・・・・・・ね」

そして、出発した。
何回か超空間航行を繰り返して目的地に着くそうだ。
そう言えば、守陀怪は魎皇鬼の後継機なんだよね。
鷲羽ちゃんが生んだ子供だし。

「みゃ～～～♪」

すると、この制御の福ちゃんが膝の上に乗ってきた。

「・・・・・・鷲羽ちゃんの匂いが付いちゃったかな？」

軽く頭をなでると、目を細めていた。

「（確か、魎皇鬼のベースって確か兎だった気がするのは気のせい）」

いえ、魎皇鬼のベースは兎です　ｂｙ．毬藻

「間違っては無かったんだ」
「どうしたの？」
「あはは、何でもないです」

変な電波を拾ってしまった。
失敗失敗♪
・・・・・あれ、良く考えたんだけど。
この船って『囮艦』じゃ無かったっけ？
その疑問が答えのように、続々と海賊船が集まってきた。

「・・・・・はぁ～」

簡単な予測は出来ていたけど。
アニメで見ていたけど、よう飽きないと言うか。
この子（守陀怪）に執着すると言うか。
数分後・・・・・敵艦が粉々になりましたが何か問題でも？
その後、俺はネージュさんにお部屋に案内された。

「ここが貴方の部屋ね」
「あ、ありがとうございます」

そう言えば、まだ結婚してないって言っていたっけ？
天地無用！ＧＸＰであってまた違う天地無用！ＧＸＰって事なんだろうと思う。

「・・・・・凄いし広い」

僕の住んでいた家の部屋よりかまだ広いし。

「変な質問していいかな？」
「僕で答えられることなら」
「あなた・・・・・・何者？」

その声は真剣で強い瞳で僕を捕らえていた。
一回は回避させないとややこしい事になるしな。

「・・・・・僕は普通の人間でしたよ。ついこの間まで樹雷とか知りませんでしたし。ましてや、母親に記憶の封印かけられていてましたし」
「・・・・・・五歳のときに魔法が使えるのか、そこを聞きたいんだよね」
「えっ！！？」

そのとき、僕はびっくりした。
何でその事を知ってるの！？

「簡単なことよ。私は、集団催眠（Ｇｒｏｕｐ　ｈｙｐｎｏｓｉｓ）を使えるわ。そして、あなたの事も少しは調べてもらったし」

鷲羽ちゃん、何がしたかったんですか！！

≪（能力開放して切り抜けたほうが良いのではないかな）≫
「（切り抜けるとしてそんな能力の作品知らないんだけど）」
≪（同タイトル）≫

あっ！？
その事をすっかり忘れていた。
確かにここは天地無用！ＧＸＰの中だけど俺の知ってるストーリーとまたは別の物。

「その一端を見せます。ジャル、夢幻書庫の管理権限発動」
《発動認証します》
「作品名【天地無用！ＧＸＰ】能力キャラ【ネージュ・ナ・メルマス】！！」
次の瞬間、空間が凍った。
そして、ネージュの動きも止まった。
「（嘘！？私と同じ力・・・・・・・！？）」
「書庫に存在する・・・・・・俺が前世で知っている作品なら自分に付属させて自分能力として使用が出来ます」
「（あなたはもしかして転生者（ｒｅｉｎｃａｒｎａｔｉｏｎ）なの！？）」
輪廻転生（りんねてんしょう）、強ち間違ってないけどね。
「けど、僕は無闇に使わない・・・・・・解除」
すると、凍っていた空間が一気に解けた。
「けど、この能力は鷲羽ちゃんに聞けば教えてくれると思うよ」
「・・・・・・あなたの言葉を信じるわ」
「ありがとうございます」
俺は頭を下げた。
そして、三日後無事に樹雷星に着いた。
僕は、現樹雷皇の場所に通された。
そこには瀬戸様、樹雷皇、砂沙美の第二皇女と阿重霞の第一皇女がそこに居た。
樹雷星は一夫多妻制だったな。

吼太とかのなのはやフェイト、ライトの華琳に教えたら・・・・・・
・いや無理か、僕にまだ二人の接点が存在してないし。

「君が、美津那の子か」

貫禄がある。
けど、樹雷って元々海賊が作った星じゃなかったっけ？

「うん、顔は時哉さん、目元は美津那ちゃんにそっくりね」
「確かにそうね♪」

確か、第一皇女の『柾木　船穂　樹雷（まさき　ふなほ　じゅらい）』でももう一人が第二皇女の『柾木　美砂樹　樹雷（まさき　みさき　じゅらい）』であってるね？
本当に皇族の継承権持ってるんだね。

「・・・・・・・・・・・・・」

しかし、樹雷皇の【柾木　阿主沙　樹雷（まさき　あずさ　じゅらい　）】は睨んでいた。

「時哉の倅（やから）が何のようじゃ！！」

・・・・・思いっきり、憎悪が滲み出てるのですが。

「実は、美津那ちゃん、時哉さんと駆け落ちしちゃったんだよね♪」

・・・・・・はい！？

「不良娘の子供・・・・・良い気持ちはしないでしょうね」

この意味は、なんと無く解るんだけど。

「どうしたら？」

「ねえ、君は剣術とかは出来るのかな？」

「えっと、出来ると思います」

取り合えず、武術の鍛錬は行ってるけど。

「なら、ワシと勝負してもらおう」

そう言うと、玉座から立ち上がった。

そして、右手にはマスターキー（船の鍵）を持っていた。

《ヤルしかないと思います》

「みんな肉体系なんだから！！」

《ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ》

「シャルティエ、セットアップ！！　モード、ファースト！！」

双剣を召喚した瞬間、阿主沙が一気に踏み込んできた。

その太刀筋を持ち堪えた。

「あ、危ない・・・・・」

《召喚が間に合わなかったら終わってましたよ》

「ほぉ、その剣は喋るのか」

「僕の大切なお守り役ですから！！」

その言葉と同時に、後ろに吹き飛ばした。

「なっ！？　あんな小さな子供が吹き飛ばしただと！！」

「シャルティエ、モード・セカンド【玄武の籠手】」
《解りました》
双剣が消えて、手を保護するグローブになった。
永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術・・・・・・移動術【神速】
それは、肉体が限界以上に動く。
一瞬にして、阿主沙の目の前に踏み込んでいた。
「気功術」
両手に気が集まりだした。
「龍翔(りゅうしょう)・迫撃衝(はくきしょう)」
腹部に当てた瞬間、ズドンと大きな音が響いた。
その音と同時に、後ろに吹き飛ばした。
「・・・・・・・はぁ、はぁ・・・・・・・」
魔力と身体のバランスが取れてない。
今の二つだけ使っても息切れがする。
「す、すごい・・・・・・」
「ちょっと、無理しちゃったかな?」
僕は倒れこみ、意識を失った。

第六話：樹雷（後書き）

輝羽「着いたそうそう戦闘ですか（汗）」

毬藻「元々は海賊から始まった人達だから問題ないのでは？」

？「そういうものか？」

輝羽「・・・・・・誰ですか？」

鏡「神代（かみしろ）　鏡（きょう）だ。よろしく頼む」

輝羽「神代さんって・・・・・・悠久の時間さんのキャラじゃないでしたっけ！？」

毬藻「そうだよ。【真（しん）に神に愛されし者の人生】の主人公さんで、ちなみに美由希さんの・・・・・・高町家に居候しているんだっけ？」

輝羽「美由希さん達は料理上手だからうらやましいな？」

鏡「・・・・・・・orz」

輝羽「・・・・・・・あれ？」

毬藻「輝羽、地雷踏んでる（汗）」

輝羽「あ・・・・・・」

鏡「き、気にするな（汗）」

毬藻&輝羽「「（そこまでダメージ食らうと気になりますから）」」

シャイ《そういえば、ここには人・・・・・・鏡さん以外はいませんよね？》

鏡「そう言えば居ないな？　他の人たちは？」

毬藻「・・・・・・聞くな。抑え込むのに疲れたんだから（汗）」

三人（毬藻以外）「「《一体何があったっていうんだ（でしょうか）！？》」」

毬藻「気にするな。それでは、感想コーナーです」

輝羽「悠久の時間お兄様、感想ありがとうございました♪」

毬藻「次回も睡眠不足と闘いながら頑張ります！！」

三人「「「《睡眠はちゃんと取ってくれ！！（ください！！）》」」」

第七話：新しい絆（前書き）

毬藻「うーん（汗）」

鷹羽「毬藻殿、なにを悩んでるの？」

毬藻「……葵のコスプレ衣装のネタが早くもなくなった（汗）」

鷹羽「おいおい（汗）」

毬藻「ではでは、第七話が始まります」

第七話：新しい絆

「う、う～～ん」

船穂はベッドに寝ている葵の額にタオルを当てる。

「葵くんの具合はどう？」

「まだ、目は覚ましてないわ。初めての宇宙に出てここに着いて、直ぐに決闘・・・・・・なに考えてるのかしらね」

その悪態については聞かなかったことにして。

「この子の状況も考えるべきだったわね。二人が死んで、悲しむ時間が無かったんだから」

状況が状況だったみたいだし。

「あなたはどう考えてるのかしら・・・・・・シャルティエさん」

《知っていたんですか？》

「えぇ、鷲羽ちゃんから話しを少しね。この子は？」

《マスターは、何も考えてないと思います。今の現状が終わってからだと思います》

「この子の里親・・・・・・って事よね？」

《それについては目を覚ました時に伝えて下さい・・・体の疲労が抜けていませんから》

次の日、僕は再度、阿主沙に会う事になった。

「この前はすまんかったな」

「僕は気にしてはいないんですかど・・・・・・何があったんですか？」

僕に近づき。

「二人とクソババァと遙照と娘たちに・・・・・・な」

層々たるメンバーの罵声がきたんだな。

「その話しは置いときましょうか？」

その後ろに居た女性。
年齢からして５０代後半位なんだけど。
樹雷の年齢が一般常識の年齢に当て嵌まらないし。
砂沙美さんも、見た目年齢と実年齢は大きく違うし。
って後ろの人って、【神木　瀬戸　樹雷（かみき　せと　じゅらい）さん】！？
樹雷の鬼姫さんですか！！？

「・・・・・・・貴女が？」

その表現、言葉・・・・・・女性と思ってるのか？

「・・・・・・・・・僕は男なんですけど？」

その言葉で、その場に居た全員が驚いていた。
・・・・・・樹雷を塵も残さず破壊しましょうか？

「・・・・・話しは戻して、あなた私の養子にならない？」
「は、はいぃ！！！？」

何でいきなりそんな事を言い出すんだ。

「あなたが行う【皇家の樹の儀式】はその血筋の名前を受け継がないといけないの」
「俺が旧姓に戻してもいいんじゃないのですか？」
「その後の、ことはどうするの？」

た、確かにそうなんだけど。

「・・・・・それは、地球に戻ったとしてもですか？」
「どういう事かしら？」
「地球に戻ったら、僕を養子に貰いたいって人が居たんです」
その人は言わずもなんだけど。
「そうね・・・・・ちゃんと、里親が居るなら宇宙にいる時限定で樹雷の名前を使っていいわ」
「・・・・・解りｍ」
「まって、瀬戸様、葵ちゃんの養子は私がしますわ」
「いえ、私がなります」
その声を上げたのが船穂さんと美沙樹さんの両名だった。
瀬戸様も驚いていたけど、実は言うと僕が一番、驚いていた。
けど、良く考えよう。
船穂さんや美沙樹さんが養子に向かい入れたとしても、僕の本名が柾木になるのは変わりないような気がするが？
「・・・・・良いのか？　ここまでくれば引き返せないぞ？」
阿主沙が真剣な目で僕を見ていた。
「はい、僕は構いません」
阿主沙にそう言って、二人を見た。
「喧嘩はやめて下さい。船穂お母さん、美沙樹お母さん！！」
その一言で、二人は喧嘩をやめた。
それどころか驚いた顔になっていた。

「・・・・・これから、宜しくお願いします。お母さん」

その後のこと?

言いたくありません!!

あ、あんな恥ずかしいことになるとは思わなかったんだもん!!

騒動が終わり、僕は部屋で臥せっていた。

「みんな酷いよ~、着せ替え人形じゃないんだから」

なんで、あそこにウエディングドレスや12単があるの。

絶対におかしいだろ!?

トントン・・・・・

扉を叩く音が聞こえた。

「はい」
「失礼するね」

そこに入ってきたのは、船穂お母さんだった。

「大丈夫かしら？」
「みんな元気ありすぎだよ」

そう答えると、ベッドに座りなおした。

「あなたが家族になって、みんな喜んでいるのよ」
「そうかな？」

そう言った瞬間、船穂お母さんが近づいてきて、僕をやさしく包んだ。

「もう、強がりは終わっても良いんじゃないかな？」
「えっ？」

その言葉に、僕は驚いた。

「目の前で両親を失って。けど、泣く事はしなかった・・・けど、全部終わったんだから泣いて良いのよ」

その時、目頭から熱いのが頬を通るのが解った。

「もう、全部吐き出していいのよ」
「う、あ・・・・・・」
「だから、もう終わったのよ？」

「あ・・・う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

僕は、泣いた。

あの日から溜まったものを全部、涙と一緒に吐き出した。

「身体能力とか高くても中身は8才の子供」

『そうですね。それでも我慢して泣かないようにしていたんだと思います』

そこには、瀬戸様と画面にはノイケさんが映っていた。

「さて、あの子を宇宙全域に知らし目ないといけないのね？」

『はい、あの子は一年弱で全て身につくと思いますよ・・・・・・』

と鷲羽さんが言ってました』

「本当に無茶なこと・・・・・・」
『あの子なら大丈夫よ。それに、瀬戸様もいらっしゃるんですから』
その隣に居た鷲羽ちゃんが付け加えて言った。
「何とかするわ。戻ってきたら、後は宜しくね」
『了解したわ』
そして、通信を切った。
「・・・・・・さて、これからが忙しくなるわね」

次の日、樹雷の樹との儀式をすることになった。
とは言っても、何でか普段着なんだけど
「・・・・・・正装じゃないんですか？」
「あなたは既に皇家の樹・・・始祖の樹との契約をしてるから形だ

けということよ」

数時間後、儀式は無事に終わり、船の発着場に着いた。

「シャルティエ、輝羽とのリンクはどうかな？」

《正常です。違和感なく馴染んでますよ》

《私も、全然平気だよ♪》

二人の相性がよくって良かったよ。

「これが、柾木　葵　樹雷（まさき　あおい　じゅらい）様の船になります」

そこには、円柱型・・・・・・昔のＵＦＯが一番近いかな？

「外部ユニット（外装）はないの？」

「あれは、成長していくものです・・・・・・徐々に形付いていきます」

そうなんだ。

「終わったみたいね」

その声に振り向くと、瀬戸様、美沙樹お母さん、船穂お母さんが居た。

「瀬戸様に美沙樹様、船穂様！！」

「普通に読んでいいわよ」

「・・・・・・船穂お母さん、美沙樹お母さん」

次の瞬間、美沙樹お母さんに抱きつかれました。

「あ～、やっぱ可愛いわ♪」
「おめでとう、これで私たちと同じね」
「うにゅ、く、苦しいよ～～」

暫くして、離してくれた。

「さて、これからが大変よ」
「あおくんには、これから色々なことを覚えていかないといけないよ」
「頑張ってね」
「はい！！」

その返事は、空天高くまで響いた。

第七話：新しい絆（後書き）

毬藻「宇宙限定で『柾木　葵　樹雷』として、活動することになりました（笑）」

輝羽「凄いことをしましたね？」

毬藻「樹雷の名前がないと正式に皇家の船として認められないし、ましてや、宇宙限定だから地球では名前は変わっちゃうし」

輝羽「この事を知ってるのは？」

毬藻「確か、天皇ぐらいじゃないかな？」

輝羽「またピンポイントを（汗）」

毬藻「では、感想コーナー♪」

輝羽「悠久なる時間さん、感想ありがとうございます♪」

毬藻「では、このあたりで失礼します♪」

第八話：光鷹翼（こうおうよく）（前書き）

少しグダグダですが読んで下さい

第八話：光鷹翼（こうおうよく）

「あう～、疲れました～～」

皆さん血気盛んなのはいいと思うんですけど。
こっちのペース配分考えて下さい。

「最初は僕の鍛錬のはずだったんだけど、何で僕が剣術を教えないといけないんだろう」

当初は、僕の為の剣術だったんだけど、数週間で僕が教える立場になっていたんだけど。

「哲学も・・・何か間違ってるだろう」

トントン

「葵様、食事の準備が出来ましたので」
「解りました。直ぐに伺います」

僕は、服の乱れを整え、食事の方に向かった。

「遅くなりました」
「うむ、では頂こうとするか」

この頃の食事スタイルが全員揃って食べることが多くなった。

「今日の剣稽古はどうだった?」
「う～ん、剣稽古って言うか、反対に教えていたんだけど・・・・・

・」

この前は、複数人に取り囲まれた時の対応をして、瞬時に倒しちゃったからな。

そこから、逆に僕が教える立場になっていった気もするんだけど。

「他の皇族も結構、気にってるみたいだし上々じゃないかな♪」

まぁ、剣豪相手くらいなら目を瞑って、両手と両足で縛って、コンクリで胴体を固定しても瞬殺でいけるんだけど。

それを言ったら、元もこうも無いしな。

「白兵戦の能力は葵に勝てる奴はいないだろうな」

阿主沙は大笑いしながら答えていた。

「鷲羽さんの言っていた言葉より全然早く皆さんを納得させれたしね」

「そうね。もう、立派な樹雷の皇族よ」

とは言っても、ここにいる期限は1年なんだけど。

4ヶ月で全ての皇族のスキルをマスターしちゃったんだよね。

あと8ヶ月、どうやって過ごそう。

「そうね。あと8ヶ月もあるのよね・・・・・・のんびりするのも良いかもしれないわよ」

そうなんだけど、僕的には物凄く遊びたいんだけど。

「って、心の言葉を読まないでください！！」

「あらあら、ごめんなさいね～」
絶対わざとでしょ、美沙樹お母さん。
「残りの時間は、地球で過ごしたらどうかしら？」
「けど、どうやって帰るの？　まだ、外装が出来ていないのよ？」
「その部分は・・・・・・もう解決してるのよね♪」
船穂お母さんが嬉しそうに僕を見ていた。
なんで、ばれてるんだろう？
「多分、大丈夫ですよ。出航が明日ぐらいになりますけどね」
「解ったわ」
食事が終わった後、僕は輝羽の停泊している港に向かった。
「輝羽、聞こえる？」
《うん、ちゃんと聞こえてるよ》
「今から外装を作る様に時間魔法を使うね」
《時間魔法？》
少しびっくりしたような声で聞いて来た。
「僕が使える特殊な魔法の一つ、特殊結界を輝羽の中の時間だけ数百倍の速さで時間を駆ける魔法」
《うん、分かった。ここじゃ巻き込むから外に出るね》
すると、固定座を切り離して、外に出た。
本来なら、出来ないんだが輝羽と精神リンクが出来ているために

遠距離の操作を行うことが出来る。
僕もそこから離れて輝羽との合流ポイントに着いた。

《それじゃ、お願いね。私は、葵の事信じているから♪》
「うん！！　シャル・・・・・インテリジェンスデバイス変換」
《ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ》
「ｓｅｔ　ｕｐ！！」

すると、流の背丈よりはるかに大きい杖が生まれた。

「行くよ・・・悠久なる時間よ。時の神【クロノス】、時間の女神【タイム】よ。遥かなる時間を通し、我と我が力を受け継ぎし者の時間を進め！！」
《Ｔｉｍｅ　ｃｌｏｃｋ　ｕｐ》

すると、輝羽の機体が輝き始めた。
数秒後、結界を解除すると歪な形の外装が出来た。

《外装を転送します》

すると、空間が歪み、輝羽の機体を包んだ。

《形状を構成開始。完了時間５分２１秒》

そして、歪な枝に上手くなじんで行き、外装が出来上がった。

「輝羽、どうかな？　何か違和感ある？」
《うんん、全然ないよ。これって一体何？》
「ナノマシンだよ。上手くいってよかったよ」
《ありがとう。葵》

本来ならこう言うのは嫌う傾向で適応しないのだが、上手いように適応してよかったよ。

《そうだ。葵は光鷹翼何枚出来るか試してなかったね》

そう言えば、いろいろあってするの忘れていた。

《それじゃ、手を翳して意識を手中して》

右手を前に翳して、意識を集中する。

すると、１０枚の薄い羽みたいなのが目の前に形成できた。

《う、嘘!?　僕まだ力の供給してないよ》

「えぇ!?　じゃ、これって・・・・・・・」

《うん、葵が出した光鷹翼・・・・・・十枚出せるなんて、それが出来るのは始祖の樹の【津名魅】と私ぐらいしかないはずだよ》

取り合えず、輝羽を発着場に戻して僕は寝室の方に戻った。

「では、船穂お母さん、美沙樹お母さん、阿主沙お父さん、行って来ます」
「気をつけてね」
「はい！！」

僕は、輝羽に乗り込んだ。

《では、宇宙に出るよ》

浮かび上がり、発着場を出ると宇宙に出た。

《地球に向かえばいいんだよね？》

「うん、それじゃ、超空間ドライブに入るよ」

次の瞬間、景色が一気に変わった。
そして、目の前に地球が見えた。

《・・・・・・・・・・・・・・あれ？》

「・・・・・・・・・・・・超空間ドライブは？」

輝羽と葵は驚いていたように見ていた。

Gも殆どないで瞬時で地球に戻ってきたのだから。

《マスター、多分・・・マスターの能力だと思います》

「もしかして、儀式で契約して輝羽が僕の能力の一部が使役出来る様になったからがと言う事？」

《その可能性が濃厚ね》

「チート能力を受け継いだ船」

俺は、船をどうしようか考えているとき。

『帰ってきたみたいだね』

突然通信が入り、強制的に繋がれた。

こんな事できる人はこの地球上に一人しかいらっしゃらないし。

「帰ってきましたよ。それより、これどうしましょうか？」

『迷彩モードに切り替えて、降下しなさい。そうすれば、こっちで何とかするから』

「分かりました」

通信を切った。

「迷彩モードを展開した後、地球に降下しなす」

《《了解（しました）》》

範囲縮小後、僕は天地さんの家に向かった。

「ただ今戻りました」
「あ、あおちゃんおかえり～～」
「お帰りなさい、葵」

そこに居たのは、砂沙美と阿重霞だった。

「ただいまです。砂沙美姉さん、阿重霞姉さん」

そして、そのまま抱きつかれた。
砂沙美姉さんに・・・・・・・

「あ、かえって・・・・・・何してるの？」

偶然通りかかった天地が唖然と見ていた。

「た、だいまです。天地兄さん」
「かわいいよ～」

完全に、惚けている。
特に、砂沙美姉さんは。
俺は何処の宇宙船ですか！？

「帰ってきたところ悪いんだけど、葵くんの力（光鷹翼）を見せて貰って良いかな？」
「分かりました」

砂沙美姉さんを何とか引き離して、湖の場所に一緒に向かった。

「最初は俺の力に干渉して」
「はい！！」

すると、天地さんは光鷹翼を三枚展開した。

「行きます！！」

俺は、天地さんに向かって手を翳すと三枚の光鷹翼を展開して、力の干渉をして消滅した。

「そのまま、光鷹翼展開は出来る？」

その言葉に、僕は頷いて、七枚の光鷹翼を展開させた。

「え！？」

「う、嘘！？　十枚の光鷹翼を展開させるなんて」

「・・・・・・光鷹翼の展開を解除して」

七枚の光鷹翼を解除して、小さく溜息を吐いた。

「葵くん、今のはどっちの力？」

「自分の力です」

「そっか・・・・・・」

そういうと、僕の頭に手を置いた。

「これからも宜しくね。葵くん」

「はい！！」

これから、しばらく生活が始まるんだ。

第八話：光鷹翼（こうおうよく）（後書き）

後書きだよ～～

毬藻「今回、このタイトルだけど・・・・・・とんでもない力つけたよな・・・」

久遠「葵・・・・・・すごい・・・・・・」

毬藻「・・・・・・誰だ。ここにキャス狐を連れ込んだのは??」

久遠「キャス・・・狐・・・・・・ちがう」

毬藻「もしかして【久遠】なの!?」

久遠「・・・（こくこく）」

毬藻「確かに、今後のフェイトの後ｇ（ｒｙ」

フェイト「プラスマバレッド!!」

毬藻「無数の雷撃・・・・・・ぎゃーーーーーーーーーーー!!!!!」

久遠「まりも・・・へいき?」

毬藻「な、何とか・・・・・・で、何の話をするんだっけ??」

久遠「こうごうよくについて・・・だよ」

毬藻「葵は二十枚の光鷹翼を所持してることになるんだよな」

フェイト「普通に対話してるし・・・そんなに凄いの？」

毬藻「未知のエネルギーとも言われていたりする。防御にすると物理・エネルギー系の物を完全に遮断、魔法も同じ」

フェイト「凄いんだね（汗）」

毬藻「まだ話しが先になるんだけど、A' sのなのは達と一緒に撃っただろ【トリプルブレイカー】を、あれも光鷹翼を一枚展開で完全に防げるほどだし」

フェイト「何処まで凄いの・・・・・・」

毬藻「攻撃なら【異世界の聖機師物語】の最終話の敵キャラの聖機神の【ガイア】をも紙みたいに切り裂くからなｗｗｗ」

久遠「杏さんの【風雅】と能力は同じ？」

毬藻「それよりかまだ上だね」

久遠「そうなんだ♪」

毬藻「感想コーナー」

フェイト「悠久なる時間さん、リオン・マグナスさん・・・ありがとう♪」

～1万アクセス突破記念～

輝羽「皆さんおはようございます、今回パーソナリティーの『輝羽』だよ」

シャル「同じく、シャルティエ・K・柾木と」

葵「槻月　葵です。そして」

毬藻「毬藻の二人と一個と一本でお送りｓ（ｒｙ」

シャル「ライトニング・アックス（雷光の斧）」

輝羽「光鷹翼!!　ソード形態!!」

毬藻「うぎゃーーーーーーーー!!!!!!!!」

葵「・・・・・三人と無機物一つでお送りしたいと思います」

輝羽「それにしても、いきなりアクセス回数が多くなったね?」

葵「そこは、作者さんが試行錯誤していたみたいだけど・・・・・・何をしたかは分からないんだよね??」

シャイ「そうなんですか!?」

葵「なんかね、『ふふふ、色々進んでるんだよ』とか奇妙な笑い方をしていたよ」

輝羽「それもなんだか怖いんですけど・・・・・・話しは戻しまして、今回1万アクセス記念は何をするんですか??」

葵「作者が考えていたのは・・・・・・」

毬藻「二つあるよ。一つは輝羽のアンドロイドの時の設定&シャルティエのアウトフレームの設定を記載」

輝羽「あれ、シャルティエさんの設定は・・・・・・」

毬藻「アウトフレームの時のみ、輝羽もアンド状態の時の設定しか上げないからね」

葵「それじゃ、輝羽からね」

名前：輝羽
年齢：１５歳（アンドロイドの状態時）
容姿：ライトグリーンのロング、瞳は深緑の身長１５４？
能力：船の全システムの掌握
趣味：草花の手入れ
嫌いな人：花を大切にしない人

船【輝羽】の意思。プロフェッサー鷲羽の技術により、ホロプログラムで会話することが可能で、物に触れたりする事は出来る。
葵に淡い恋心を抱いている。
また、船の把握が全て出来ており、敵が乗っ取ろうとしたとしても簡単に排除できる。
船の能力としては魍皇鬼（能力制限なし）と互角に戦えるほどの艦対戦が可能。

葵「なんか聞いてるだけ、凄いと思うんだけど？」

毬藻「まぁ。型月のＯＲＴ（オルト）とタメ張りそうな性能を出せるけど？」

葵「どんな性能なんだそれ（汗）」

毬藻「けど、基本は喧嘩等は嫌いだからね。心優しいこだよ（なでなで）」

輝羽「あう・・・／／／」

毬藻「次はシャルだね」

名前：シャルティエ
年齢（外見）：１８歳
容姿：黒髪で腰まで伸びている。瞳はライトブルー、身長１８７？
能力：夢幻書庫の管理者
職務：風見学園初等部の副担任兼分校・本校の数学教師（現段階）

個人権限で夢幻書庫の能力が発動可能になった。
また、二重の権限発動で【上乗効果】が発動も可能。
戦闘スタイルは、補助・遠距離が得意である。

葵「上乗効果？」

毬藻「通常の攻撃の効果付加させた物と考えれば良いかな？」

葵「そうなのか・・・・・・シャル」

シャル「はい。準備万端です♪」

葵「夢幻書庫アクセス。作品名【タユタマ】能力キャラ【泉戸　ましろ】」

毬藻「はっ！？（。＿。＜）ユメジャマイ・・・」

シャル「夢幻書庫にアクセスします。上乗効果発動権限。作品名【ＭＵＧＥＮ】使用キャラ【ましろファング】」

※マシロふぁんぐ能力（１Ｐ能力）

即死技はトムキラー（＋大ダメージ）しか使えない
トムキラー（＋大ダメージ）を使うには５ゲージ必要
相手の速度が速いと即死技でも潰される
速度耐性弱め
攻撃力減少
割合ダメージ（スイッチ制）
超必殺技消費ゲージ１追加
ただのプレイヤー消去には興味がありません

１Ｐ覚醒追加能力（敗北ｏｒ引き分け時、敵のライフが７．５割以上）
攻撃力通常通り
ステート奪われない
高速移動時パワーオート増加
混線以外の超必殺技、即死技の制限外す

毬藻「うがーーーーーーーーーー！！！

葵「うん、使えるな♪」

輝羽「え、えーっと・・・・・・生きてる？（汗」

毬藻「ま、マシロふぁんぐは本気で酷いぞ・・・」

葵「幻月でも良かったんだけど？」

毬藻「旧キャラ本気で反則状態だ！！」

シャイ「型月の【ＯＲＴ（オルト）】でも良かったのですが？」

毬藻「攻性生物は世界破滅します！！」

葵「え～～～～！！！」

毬藻「はぁ～～、話は戻して・・・・・・もう一つは葵の能力追加なんだけど・・・・・・実はもう一つの方のコラボで話は出てるんだよね」

葵「どんなの？」

毬藻「絶対命令（ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｉｎｓｔｒｕｃｔｉｏｎ）と言う能力、これは王様の命令の絶対版、否定すれば全ての物や法則を否定できるし、許可すれば、さっきの事と反対の事が出来る」

葵「凄く便利な言葉だね」

毬藻「この能力はもう少し成長をしてから使える様になるか」

葵「はーい」

毬藻「それに、この能力はゆきのんから来たんだよねｗｗｗ」

輝羽「ゆきのん？」

毬藻「作品名が【幼なじみは大統領】と言うゲームね♪」

輝羽「誰が好きでした？」

毬藻「エゼキヱル♪」

三人「・・・・・・・・・・・・・」

毬藻「いやいや、そこで無言になるのはやめて」

葵「では次回から本編です」

毬藻「無視わやめてくれ～～～～～～～～～～！！！！！！！！！！」

第九話：いざ戻らん、初音島へ（前書き）

なんか慌しい気がしてならなくなったが？
では、始まります。

第九話：いざ戻らん、初音島へ

「はぁっ！！」
「くっ！？」

木刀がぶつかり合う。
天地が横に薙ぎ払うが僕はさらに低い体制に入り、懐に入り込む。

「なっ！？！？」
「蒼天（そうてん）、昊天（こうてん）、旻天（びんてん）、上天（じょうてん）よ。大地に芽吹く力よ。我に打ち抜く力を！！【四天（してん）・轟雷撃（ごうらいげき）】」

突きの攻撃が、天地さんの腹部を捕らえた。
次の瞬間、森の方まで一気に吹き飛ばした。

「あ・・・・・大丈夫でしょうか？」

最後の攻撃、少し本気で討っちゃった。

「あれぐらいなら大丈夫だろう。ギリギリでガードが間に合ったみたいだしな」

勝仁さんはそう良いながらお茶を啜っていた。

「それなら、良かったんですけど」
「フォフォ、葵よりか年はとってるからな」
「勝仁兄さん、それはフォローになってないですけど？」

と、言いながら待ってると天地さんが瞬間移動（テレポート）で戻ってきた。

「大丈夫でしたか？」
「うん、平気だ・・・！？」

バシャーーーン
次の瞬間、葵の頭上から大量の水が降って来た。
いや、『降らされた』が一番いい表現だな。

「だ、大じょ・・・・・・（ヴワッ）」

次の瞬間、助けに入った阿重霞さんが庭先に出てきたと思った瞬間、大量に噴いた。
・・・・・鼻血を。

「あ、阿重霞お姉ちゃん！！？」

何で、僕の濡れた姿を見て鼻血を出すのかな・・・・・・
天地さんと稽古する時は、白生地のTシャツに短パンだけど、何で耐性が付かないのかな。

「葵の姿は、色々反則気味だと思うんじゃが」
「知らない人が見たら、完全に【女の子】と思うよ」

確かに、髪を解いたら女の子になるって言われるけど。
以前に天地兄さんと町の銭湯に行ったときに番台のおばちゃんが『お譲ちゃんは女風呂の方だよ』と言われたし。
たまたま、髪を束ねていたのを外していたからだし。
その帰り道に天地さんが誘拐犯と思われていたし。

「ロリコン・・・・・ショタコンって言えばいいのかな？」

「過保護も入るんじゃないかな？」

明らかに天地さんも呆れているけど。

「見た目は『女の子』だからね」

「僕は『男の子』です！！」

身長は去年から５？しか伸びていないし。

顔は童顔だし。

身長欲しいよ・・・・・・・

「無理じゃな。樹雷の水は延命効果と老化を遅くする効果があるんじゃ」

・・・・・確か、阿重霞姉さんは５００位じゃなかったっけ。

「その前に、僕の心の中を読まないでください！！」

「いや、読んではおらんが、表情に出ておる」

今後の課題は、表情を読まれない特訓だな。

ノイケさんもタオルを持ってくるとき顔が赤かったのですけど。

もう、気にしたら駄目なのかな？

その日の昼食、勝仁兄さんは社務所のほうでお昼を取ることで母屋には来ていない。
テーブルに料理を並べて、食事を開始した。

「葵くんは、もう戻る準備は出来てるの？」
「そっか、ここに来て一年が経つんだな」
「何か実感がわかないんですよね・・・・・本当は八ヶ月しか居なかったんですけど、僕の中ではまだ短く感じていました」

毎日が実践の稽古で、その後は剣士の相手とか手伝い。
居ない時は、鷲羽ちゃんの実験台とか、女装とか女装とか・・・・・
あれ、実験台よりか女装の確立の方が高くないか？

「まぁ、いっか・・・・・それだけ充実した時間だったって事です」
「それじゃ、私からプレゼントをあげよう。入っておいで」
『はい』

すると、一人の女性が入ってきた。
服装は、黒いスーツなんだが、顔立ちがモデル並みだった。
髪は、腰まで長いブロンズ色で瞳の色は深蒼色だった。

『マスター・・・・・似合いませんか？』

え、マスター？？

僕の事を、そう言う風に呼ぶのは一人・・・・・いや、一体しか居ない。

「シ、シャルティエ！？」

『はい。やはり、似合いませんでしたか？』

「似合う、似合わないと言われたら、物凄く似合ってると言うか・・・・・どういう事？」

『アウトフレームをプロフェッサー鷲羽様に作っていただきました』

な、なるほど。

鷲羽ちゃんなら朝飯前だな。

「それともう一つ」

次は通信が入り・・・・・って、まさか・・・・・

【葵～、私も人間の姿に出来たよ～～♪】

画面には、緑のセミロングの髪に、同じく緑色の瞳の１５歳ぐらいの女性が居た。

因みに、シャルティエは外見年齢は１７歳前後だそうだ。（鷲羽ちゃん談）

【どうどう、似合うかな～♪】

そして何で巫女服を着ているのかははげしなく疑問だったんだが。

この質問に、鷲羽ちゃんは黙秘権を使われ追求をすることが出来なかった。

「・・・・・・根回しが良すぎですよ」

「あはは。けど、これで悲しい一人暮らしからは開放できるよ」

・・・・・・良かった。まだ、二次成長期が来る前で。

「因みに、名前はシャルティエ・K・柾木で、風見学園の数学教師として登録してるから」

因みに、教員免許は八ヶ月でパスできたそうだ。

※通常はそんな事は出来ません。　by. 毬藻

「通常なら、英語教師じゃないの？　その名前からしたら？」

「ハーフの日本育ちと説明したら大丈夫と思うよ」

本当に根回しが早いです。

「そう言えば、朝ぐらいに由姫さんから連絡あって、一度顔見せなさいだって」

夏休みは、力の制御とかでここにずっと居たんだった。

その半分が、山の中でサバイバル生活だったけど。

そのお陰で山菜や食べられる野草とか覚えられたから結果オーラ

イなんだけど。
取り合えず、明日ぐらいに初音島に戻ったほうがいいな。

「では、明日には初音島に戻って生活する準備をします」
「そっか。気を付けて行くんだよ 」
「シャルも確りしなさいよ」
『マスターの件は確り頑張ってきます』
「うん、お願いね」

そして、次の日ボストンバックを持って、玄関前に立った。
横には、シャルが小さな荷物を持っていた。

「葵、何かあったら連絡しなさい」

「風邪を引かないようにね」
「はい！」
砂沙美は一回目を瞑り、そして・・・・・・・

「頑張ってね。葵くん」
「行ってきます、砂沙美姉さん」

一礼して、僕は柾木家を後にした。

「・・・・・・もう直ぐ、逢えるんだね。葵ちゃん」

第九話：いざ戻らん、初音島へ（後書き）

輝羽「そう言えば、四つの天はどういう事ですか？？」

毬藻「春夏秋冬の意味を天に表したらああなるんだ」

輝羽「ふえ～、そうなんだ」

毬藻「天地さんはあんまりダメージ無いからね？」

輝羽「葵さんがまだ弱いんですか？」

毬藻「う～ん、弱くは無いはず。天地さんが光鷹翼で身体機能を極限まで高めて打ち合っているから天地さんはがちだったりする」

輝羽「まぁ、阿重霞さんと砂沙美さんが違う意味で壊れているけどね」

毬藻「確かにあそこまで壊れるとは正直計算外ｗｗｗ」

輝羽「何も考えずに書いている証拠ですね」

毬藻「ではえは、感想コーナーです」

輝羽「悠久なる時間さん、生存確認のメールと感想ありがとうございます」

毬藻「俺の住んでいる場所は鹿児島なので、地震は震度１の津波は１ｍ．しかありませんでした」

輝羽「その地震の時間は寝ていましたよね??」

毬藻「完全に爆睡……親の電話で事態を知りました（汗」

輝羽「しかも、家のテレビがなかなか点かないで携帯のワンセぐで見ていたからね」

毬藻「いや、パソコンのワンセぐで見た」

輝羽「繋げていないから繋ぐのに時間掛かったよね??」

毬藻「全てのＵＳＢ端子が埋まっていて何処を外せば良いか分からなかった」

輝羽「おいおい……」

毬藻「取り合えず、知り合いの同人作家さんには連絡付いたから大丈夫だった」

輝羽「今現在、テレビを見ながら記載してるんだけどＭ９（マグニチュード）．０になってるし（１５時現在）」

毬藻「これ以上書くとなんか幻滅（自分が）するのでここで閉じます」

第十話：再開（前書き）

毬藻「やっと初音島に戻ってきた気がする（汗」

輝羽「この頃、能力改変の為にネットゲームしてるよね？」

毬藻「うん、かなりはまってる♪」

輝羽「その能力ってどんなの？」

毬藻「秘密～では、始まります」

第十話：再開

とうとう帰ってきました、初音島。
右を見て、そして左を見た。
ピンク色の花弁が舞っていた。
季節外れの桜開花。
普通の世界なら、これは異常な事なんだけど。
この島の中では正常な事なのだ。

『・・・葵さん、さくら様や由姫様達にご連絡を入れた方が良いのでは？』
「今回のがサプライズで帰ってくるんだから、脅かせないと」
『・・・・・・葵さんの身長で皆さんが驚くのは目に見えてますが？』
「シャラップ！！　自分自身に時間魔法は使えないし。ましてや、天子さんの追加項目は僕はそっちが一番驚いた」

フェリーの中で天子さんが居たのだ。
他の人には見えないようにだが。
その追加項目が二つ。

？夢幻書庫の独自管理下出来ると言う事。

？携帯端末転送システムが使用可能だと言う事。

？については見ての通りの事。
シャルティエの管理下での認証が無くっても能力が起動する。
因みに、追加能力もあるみたいだがそこはまだ未設定みたいなので今後に期待かな。

？はそのまんまの意味だ。
通話が出来る全ての次元に物質を転送・召喚をする事が出来ると言う事だ。
質量は関係無くと言う事だ。

「この実験は後ほどって言う事で・・・・・・取り合えず、家の方に向かおうか」
『そうですね』

僕は、フェリー乗り場から桜並木の方を通り、公園を経由してゆっくり目的の場所に向かう。

「変わってないね。風見学園」
『一年そこらで変わったらびっくりしませんか？』
「それはそうだね」

そして、家の前に行くと一人の少女が竹箒で玄関の前をはわいていた。
頭には、大きなリボンが特徴でなんかそれが微笑ましい感じがした。

「あ・・・・・・！？」

僕に気が付くかちょっと遊んでみるか。

「こんにちは～、ここの家の人ですか？」
「あ、違います。私はお母さんに頼まれてここを掃除しているだけです」

すると、急いで塵取りでゴミを入れ、片付けるといそいそと帰ろ

うとした。

「・・・・・もう、覚えてないのかな？」

『一年前の両親の事件から時間が経ってるのですから【葵さん】の事は分からなくなってるんじゃないのですか？』

「えっ！？」

シャルティエの言葉に驚いて、女の子は振り向いた。

「まったく、ただ今帰りました」

「葵ちゃん・・・・・なの？」

その言葉に、僕は頷いた。

「嘘よ！！」

「って、えぇ～～！！」

いやいや、ここは感動の再開をする所じゃないの！？

「だって、一年前と全然変わってないんよ！？」

「あ～～成長期が終わったんだよね」

「それに、葵ちゃんは女の子じゃない！！」

・・・・・・・・・・はい？

『そう言えば、今日は髪を結でいないんですね？』

「さっき天子さんに・・・・・あっ」

天子さんが取ったんだ。

その事を忘れて、ここまで来て気が付いた。

「音姫ちゃんどうしたの、騒がし・・・・・・い？」

さくらさんが家から出てきた。

そして、僕と目が合った。

そして、そのまま無言で近づいてきて。

「君は何処の子なの？　見ない顔だけど」

さくらさん、あなたも気が付かないのですか！？

「さくらさん、本気で怒りますよ♪」

顔は笑顔、目は笑ってない表情でさくらさんを見た。

「・・・・・・どっかであったことあるのかな？？」

本気だこの人は。

「お姉ちゃん、どうした・・・・・・の？」

次は、由夢が僕の家から出てきた。

僕の家の中から出てきたと言うことは、家の掃除をしていたと言うことかな。

まぁ、分かったら本当にびっく・・・・・・・

「あおいちゃん？」

キョトンとした表情で僕の方を見た。

あっ、夢見！！

由夢には夢見の力があったんだ。
夢で見た事が現実になる能力。

「あおいちゃんだ～♪」

そして、そのまま僕に抱きついてきた。
その後ろは・・・

「「えぇーーーーーーーー！！！！！」」

大声を上げて驚いていた。

そして、朝倉家のリビングではニコニコ顔の由夢と反対に肩を落としている音姫とさくらがいた。
気が付かなかったのショックだったのだろう。

「嘘、見破れなかったなんて・・・・・・」
「うぅ～～～～」

下を見て、愕然としていた。

「ほらほら、二人とも落ち着いて」

ティーカップで紅茶を由姫さんが持ってきてくれた。

「だって、髪を結でない状態で見分けるなんて無理だよ！！」

「やっぱり、髪は切った方が良いのかな？」

『それは駄目ですよ。お母様が生前から約束して切らないようにって言う約束でしたから』

けど、肩まで掛かっているまで伸びたし、動くときは本当にウザったいんだもん。

「お母さんの約束なら、そのままのほうが良いかな」

「そうね。それより、隣の方はどなた？」

『自己紹介が遅れました。シャルティエ・K・柾木と申します』

暫くの沈黙、そして・・・・・・

「もしかして、ペンダントの結晶の？」

「はい、そうです」

そして、部屋で声も出ないほどの驚きがあったのはこの部屋の住人しか知らない。

「もしかして、今度来る新人の数学教師って！？」

『はい、分校の方を担当します。宜しくお願いします』

そう言って、頭を下げた。

「こちらこそ宜しくね」
『こちらこそ、ご教授をお願いします』
「・・・・・何で、シャルはすぐにわかって、僕の方は分からないなんて理不尽だよ」

由姫が入れた紅茶を一気飲みした。

「家のほうはどうするの？」
「これ以上空き家にするのも嫌なので僕が住みますよ」
「大丈夫なの？」
「何かあったら言いますから」

そして、夜は朝倉家で宴会になったのは言うまでも無かった。
コスプレ会もあったのは言うまでもなかった。

第十話：再開（後書き）

後書きコーナー♪

砂沙美「わーい♪」

阿重霞「今回は、私と砂沙美で話したいと思います」

砂沙美「それで作者さん、今回の二つの能力は何なんですか？」

毬藻「ひとつは、シャルティエの能力の一つ『夢幻書庫』を葵が単独で出来るようにしたんだよ」

阿重霞「何でそんな事をしたんですか？」

毬藻「ひとつは、シャルティエが先生になった事がある。これにより、自由に動きが出来なくなるからね……緊急的な処置としてこうなった」

砂沙美「二つ目は？」

毬藻「携帯端末転送システムは言うとおり、携帯端末（携帯電話）を転送出来るようにしました。特定のコードで自身を転送したり、物資を転送する事が可能になる」

砂沙美「ほえー凄いんだね～」

毬藻「これを作る切っ掛けが次の話しで分かるんだけどね……今は秘密という事でお願いします♪」

阿重霞「けど、葵さんも自分で『瞬間移動（テレポート）』出来ますよね？」

毬藻「あれは、同空間内のみで可能。今回のは、多次元や空間に転移可能とするもの」

砂沙美「葵くんがどんどん凄くなってる～」

毬藻「ま～、この子は『魔王』とか『破壊者』とか変な風に言われるしｗｗ」

砂沙美「へっ！？」

毬藻「余計な事を言い過ぎた……では、ここら辺で失礼します♪」

木間話：小さな世界の女の子（前書き）

毬藻「ちょうど、キリがいい場所なので少し木間話を居れたいと思います」

葵「思ったんだが、プラムと被らないか？」

毬藻「そこは大丈夫だ。この子の年季が凄く違うから」

葵「何か違う気がするが・・・・・では、始まります」

木間話：小さな世界の女の子

皆さんこんにちわ～　槻月　葵です。
僕は只今戦闘中です。
えっ、相手ですか？

「消し飛びなさい！！　氷炎の槍！！！」

異形を綺麗さっぱり消し飛ばした。

《葵様、こちらも終わりました》
《こっちも確認、異形の姿形は見当たらないよ～》

監視をしていた輝羽が通信を入れてきた。

《時空管理局の違法施設・・・・・・まだまだ、有りますからね・・・・・・》
「これを作った理由が物凄くなげがわしいんだよね」

自分の肥やしとか肥やしとか肥やしとか・・・・・・・

「それじゃ輝羽、転送お願いね」
《は～い、チャチャとしますね》

通信が切れて、シャイと二人になった。

「この資料どうすんですか？」

シャイがアウトフレームに変わり聞いて来た。

「・・・・・もし、アースラが初音島（第９７管理外世界）に来た場合の脅し話としてしてやるよ」

二年前のあの時も本来のなのはの世界の時空震（フェイトとなのはが戦った時）よりもでかい規模が起こったがそれでも時空管理局は出てこなかった。

もし、なのはの介入で時空管理局が出て来た場合、多分僕は怒るだろう。

いや、絶対な。

「言いたい事を言うさ・・・・・・それより、輝羽遅いな？」

その時、空間が震えた。

「クロノ・クウェイク！？」

次の瞬間、僕の足の下がパックリと割れた。

そして、その下は・・・・・・

「きょ、虚数空間！！？」

俺はそこから離れようとしたが・・・・・・。

「葵様！！！」

僕は、奈落の底に落ちた時と同時に意識を失った。

「くうかん・・・・・・ひらく?」

少女は何を感じ取ったか、小さな部屋に小さな風を作った。
そして、次の瞬間に女の子が落ちてきた。

「・・・・・・・・・」

すると少女は、小さく願った。
介抱する物を。
すると、少女の横に水が入った桶とタオルが出て来た。
少女の力で、その子を浮かばせてベッドに寝かせ、汗を拭い、額にタオルを置いた。

「・・・・・・・・・・・・」

少女は無言で、その子の表情を見つめていた。
早く目覚めるようにと。

「う、う～ん・・・・・・」

意識を取り戻すとそこは、ピンクの天井だった。
そして、球体がいくつも並んでいた。

「ここは、ぷららのお部屋だよ～」

すると、横を見ると、ピンクの髪にウサギの耳・・・・・・王冠をかぶって、淡いピンクのドレスを着ていた。
手には、ウサギのぬいぐるみをもっていた。
年齢からして五・六歳ぐらいだと思うんだけど。
僕は起き上がり、回りを見た。
女の子の部屋、だけど僕は不思議に思った。

「窓や扉が無い？」
「お姉ちゃん、大丈夫？」

女の子をもう一度良く見た。
数秒後、ようやく思い出した。

「うん、大丈夫・・・・・・それに僕は男だよ」
「みえないよ～」

そう言われたときに頭に手を伸ばした。

「あ、結い紐が解けてる」

僕は、予備の結い紐をポケットから取り出して、髪を束ねた。

「もう一度聞くけど、ここって何処なの？」

「ぷららの部屋だよ」

そう、この子は『ぷらら』って答えた。

そして、今いる空間の場所も特定が出来た。

【ぷららの世界】

この小部屋がぷららが存在する世界。

まぁ、虚数空間は時間や空間は構わないからな。

「僕は、槻月（きつき）　葵（あおい）だよ。介抱してくれてありがとうね」

そう言って、ぷららの頭をなでた。

次の瞬間、小さな頬が小さく染まった。

「ねぇねぇ、何かお話しして」

「お話？」

しばらく如何する事も出来ないし、お話をするか。

「それじゃ、どんな話が良い？」
「葵の世界のこと～」
「うん、構わないよ」

それから、二人で色々な話をした。
俺の事や近所の事、初音島の事やら色々。

「そこの桜の公園に出ているクレープ屋さんのバナナクレープがすっごくおいしんだよ」
「ぷららも・・・・・・あっ！！？」

次の瞬間、ぷららはしょんぼりとしていた。
そっか、『普通』ならこの世界から出る事は実質不可能なんだ。
しょんぼりとしていたぷららの頭をなでた。

「それなら、食べに行こうか？　バナナクレープを」
「ここから出れるの！？」
「ぷららがそれを望むなら・・・僕は、ぷららをここから外の世界に出せるよ」

すると、次の瞬間地面が揺れた。
いや、宇宙が揺れたのだ。

「敵が来たとしたらここじゃ、狭すぎる・・・・・・」

ポケットから携帯を取り出した。

「外に出るけど、良いかな？」
「うん！！」

携帯を開いて、番号を押して、通信を押した。

《こちら輝羽、空間端末転送システムを起動開始・・・・・・空間パルス正常値、転送!!》

そして、宇宙が消えたと同時に僕達もその空間から脱出した。

「ふぃ～、間一髪・・・・・・」

けど、まだ終わってない。

目の前には、一匹の大きな異形が睨んでいた。

「あんたには、この子の世界を消した事の償いをその身で償いなさい!!!」

シャルティエをデバイスに変換させて、長距離砲を展開した。

「夢幻書庫アクセス。作品名【鋼炎のソレイユ】能力【フレイヤ】」

魔力を臨界ギリギリまで膨れ上がらせた。

「創造と破壊の女神よ。争う敵に忘却の炎を与えよ!!!」

次の瞬間、敵は業火の炎に焼かれ、消滅していった。

「ぷらら、おいしい？」
「うん」

無事に帰ってこれった僕達は、約束通りに桜公園のクレープ屋さんに連れてきた。
にこにこ顔でお勧めのバナナクレープを頬張っていた。

「そっか、良かった～」

僕も、自分で買ったカスタードのトッピングしたクレープを頬張った。
ここのカスタード、甘さ控えめだから好きなんだよな。

「じ～～～～」

目線に気がつき、横を見てみるとぷららが見ていた。

「・・・・・食べる？」
「うん！！」

嬉しそうに、笑った後に一口食べた。

「こっちもおいしい～」

取り合えず、あの後の事を少し話そう。

「葵くん、その子は一体どうしたの？」
「輝羽の仕事の手伝いしていたら・・・・・・なんですよ」
説明は色々省きすぎだ！！
【面倒くさい！！】
と、作者放棄も入りながら何とか説明をした。
「その子の親代わりは誰がするの？」
「私が、里親として身元引受人になります」
その言葉に、シャルティエが割って入った。
「ぷららも葵と一緒が良い・・・・・・」
その真剣な瞳に、さくらさんや由姫さん、純一さんは折れてくれた。
そして、晴れてぷららは『槻月　ぷらら』として俺の家族になったのだ。

「葵、考え事？」

考えていた事を中断して、ぷららの方を向いた。
不思議そうな顔をしながら、僕を見ていた。

「うん、なんでもないよ」
「ぷららね、目標見つかったよ」
「目標？」
「うん！！　大きくなったら、ぷらら、葵のお嫁さんになる！」
「「だ、だめーーーーー！！！！！」」

次の瞬間、草むらから二人の少女・・・・・・
音姫と由夢がいきなり出てきて口論になった。

「・・・・・・・・・こんな世界も良いでしょ・・・・・・・・ぷらら

？」

そして、今日も初音島は平和だと感じた。

木間話：小さな世界の女の子（後書き）

ぷらら「よろしくお願いします♪」

毬藻「そのまま後書き座談会～♪」

葵「ぷららの事をちゃんと説明した方がいいんじゃないか？」

毬藻「だね。簡単に言えばぷららは作品名『鋼炎のソレイユ』のキャラです」

葵「白銀のソレイユの番外編ですね。それのキーキャラですね」

毬藻「因みにキャスティングボイスはまきいずみ様です♪」

葵「・・・・・・プラムと被ってるしｗｗｗ」

毬藻「言っておくけど、ぷらら幼児体系だけど１０万歳は行ってるからね？」

ぷらら「本当は逆なんだよ～」

毬藻「話は戻して、さっき書いたように葵が飛ばされた部屋がぷららの世界」

葵「確か、外の世界に吸収されてあそこまで小さくなったんだよね？」

毬藻「そうだ。ぷららの場合は今後は出てくるけど、戦闘要因じゃ

ないからな」

葵「癒し系かｗｗｗ」

毬藻「もう一つ要因があるんだけどね・・・・・そこは、今後でがんばるよ～」

葵「では、感想コーナー」

プラム「悠久なる時間さん、感想ありがとうなの～」

ぷらら「じかいもおたのしみにぴょん♪／／／」

第十一話：リリカル？（前書き）

さてさて、どうにか新章に突入です。
タイトルで何が入るか分かると思いがｗｗｗ
それでは、始まります。

第十一話：リリカル？

無事に家のほうの片付けも終わった。
そうは言っても、運んできた荷物はそんなに多くは無かった。

『流さん、晩御飯ができましたよ』
「うん、今行くよ」

キッチンに行くと、シャルティエが料理をしていた。
取り合えず、砂沙美さんから料理スキルを盗んで来てるから味の問題はなし。
因みに、あんまり不安が取れないのもあったので味覚ルーチンをインストールしてもらった。
味見をしながら、料理をするスタイルを取る様にもしてもらった。
うん、これで某観〇処分〇と同じ末路になることは無いだろう。
あの人は、あれで普通に生きてるから問題ないだろうし。
今日は、魚の塩焼きに胡瓜のもろ味和え、葱の味噌汁そして、ご飯だ。

「鮭なんだ」
「今回は大変でした。ピンクの熊と戦う破目になるとは思いませんでした」

その一言で、箸が止まった。
・・・・・この御所帯にいる訳無いですよね。
紫　和泉子お姉さん・・・・・・

『それに葱も買うのに大変でした』

シャルティエは小さく溜息を吐いた。

『緑髪のツインテールの女の子のロボットがお店の葱を大人買いしようとしていたんですよ』

・・・・・・なんでこの世界に○音○クが存在しているんだよ！！

『・・・・・・大丈夫ですか？？』

「だ、大丈夫・・・・・・身体じゃなくって、精神的な痛みだから」

うぅ、この年で胃がキリキリさせるとは思わなかった。

その行為をシャルティエは不安そうに見ていた。

その後、俺はテレビを見ていると。

『そう言えば、明日ですね』

「明日って何が？」

ソファーに寄りかかり、シャルティエを見た。

『島外からの二ヶ月の交換生徒です』

そう言えばそんなのが一昨年にあったな。

『今回は三名とも女性と言うことですよ』

湯飲みにお茶を入れて持ってきてくれた。

それを、葵の前に置いた。

「ありがとう・・・学校と生徒の名前は知ってるの？」

『はい。確か聖祥大付属でした』

その言葉を聞いた瞬間、一気にお茶を噴いた。

「げほっ、げほっ！！」

『だ、大丈夫ですか！？』

「へ、平気……生徒の名前は？」

『あ、はい』

もう予想は出来てる。

予想じゃないな、確定的な未来だ。

『生徒は、【高町なのは】さん、【月村すずか】さん【アリサ・バニングス】さんの以上三名です』

完全に原作崩壊してるし。

ましてや、他作品をこっちに引きずり込むか？

そんな事を言っても、確定事項だしもう止める事は出来ないな。

「取り合えず、【リリなの】がこの世界に介入してきた。これから、本当の大変だと思うぞ」

『分かりました』

「おおきな事件がお・・・・・・」

そっか、原作ブレイクしていると言うことは、助ける事が可能だな・・・・・・あれは。

「無駄な死は絶対回避させるしかないな」

シャルティエは葵の目が真剣な事が分かった。

『私は、貴方の言葉に従います』
「交換学生会は2ヶ月・・・・・ここからは時間と情報が勝負・・・シャル、まずは三つを調べて【時の庭園】と【プレシア・テスタロッサ】そして、【Fの遺産】・・・お願い」
『分かりました。夢幻の管理者の名にかけて』

さて、ここから始まる物語。
本気でやってやろうじゃないか♪

「う～ん、なのは緊張しすぎ」
「ほら、深呼吸して」

女の子三人は固まっていた。
一人の女の子がガチガチになってるのを解しているのだ。
それも風見学園の正門の前で。

「にゃはは、ごめんね」
「それじゃ、行こうか。結構時間が押してるよ？」
「あ、ホントだ。なのは行くよ」
「あっ、まってなの～」

私たちは、学園の中に入った。
職員室に行き、一人の生徒が居た。

「ねぇねぇ、あの子は女の子だよね？」
「けど、男子制服着てるよ？」
「家の事情じゃないのかな？」

三人は、担任の先生が来るまでそこに立っていた生徒を見ていた。

「ごめんね～。新人の先生と生徒の引継ぎしていたから・・・・・・
三人ともこれから担任の芳乃さくらです。よろしくね」

金髪のツインテール・・・・・しかも年齢が私達とあんまり変わらないんだけど。

「それより学園長のさくら先生が何で僕たちの担任なんですか！？」
「今回は職員の方が少ないんだよね。その特別処置中なんだよ」

男子生徒は半分呆れながら小さく溜息をついた。

『すいません。挨拶をしてましたら遅れました』
「シャルティエ先生、挨拶を」
『はい。あなた達の副担任を勤めます【シャルティエ・K・柾木】と言います。分校の数学も教えていますが、基本はあなた達の副担任を勤めます。何かあったら仰ってくださいね』

「「「はい」」」
「槻月さんは、休学復旧手続きは終わってるから大丈夫よね？」
「僕は大丈夫です」
そして、教室の方に向かった。
「槻月　葵です」
「月村　すずかです。宜しくお願いします」
「アリサ・バニングス。よろしくね」
「た、高町　なのはです。よ、よろしくおねがいします」
『今日から副担任を務めます。シャルティエ・K・柾木です。呼びにくいと思いますので、略称で【シャル先生】と呼んでください』
僕達は、一人ずつ挨拶していった。
シャルティエの挨拶・・・・・最後の略称に一文字入れたら別の人になるよ。
保健室の変態に・・・・・
そして、昼休みとか休憩時間は葵やなのは達の席に人が殺到した

のは言うまでも無かった。
今日は半校な為、僕は鞄に教科書を詰め込んだ。

「葵、今日は帰るのか？」

流と義之が近寄ってきた。

「取り合えず、お部屋の片付けがもう少しで終わるか」

そう言えば、なのはからレイジングハートの気配が無かったな。
と言うことは、まさか・・・・・・ね？
有り得ると言えば有り得るな。
やはり、初音島で【リリなの】の世界を行えって言うのか！？

「はぁ～」
「どうした、葵？」
「なんでもないよ」

ピーンポーンパーンポーン

『三年の槻月葵くん、月村すずかさん、アリサ・バニングスさん、
高町なのはさんは至急職員室まで来てください。繰り返します・・・
・・・』

このタイミングで呼び出しって、一体どういう事だ？
僕と三人と、職員室まで行くことになった。

そして、職員室の前には音姫が居た。

「あれ、葵ちゃん・・・・・・さっきの呼び出し？」
「そうみたい・・・・・・音姫さんは？」
「私は、さくらさんから個人的な呼び出しだよ」
「・・・・・・ここにいてもしょうがないから入ろうか？」
「そうだね」

五人は職員室に入り、呼び出した本人・・・さくらさんの場所まで向かった。

「四人ともごめんね、呼び出したりして」
「それでさくらさん、用件って言うのは？」

そう言うとさくらさんの表情は気難しいかった。

「三人の宿と言うか、ホームステイ場所なんだけど、葵くんの家で良いかな？」

・・・・・・・・はい！？

「さくら先生、お外で少しＯＨＡＮＡＳＩをしましょうか♪」

顔は凄く笑顔、だが目は完全に笑っていなかった。

「あ、葵ちゃん、顔が怖いよ・・・・・・」

そんな事を言うからです。

「何も考えて言ってる訳じゃないんだよ・・・シャルティエ先生も

いるし大丈夫だと思うし。晩御飯は由姫ちゃんかボクが作ればいいと思うし」

そう言えば、さくらさんも和食が得意だし大丈夫と思うし。

「流石に少し危ないのではと思いますが？」

そこですかさず音姫が話に入ってきた。

「女の子に見えるけど男の子ですよ。何かあった場合どうするんですか！？」

流石にそうなんだけど。

「なら、音姫ちゃんのところにしようか？」

「そのほうが無難です！！」

・・・・・さくらさん、この流れ最初から作ろうとしていたな。

その行為にまんまと嵌められたと言う訳か。

その夜、僕は朝倉の家に向かった。
今日は、新人の先生の親睦会があるというわけだ。
シャルティエはそれに強制的に出席と言う形になっていた。
さくらさんの差し金なんだけど。
と言ってもこっちはこっちで三人の親睦会をしていた。
あちらと違ってジュースだけだが。

「飲み物が来たわね？」
「では、三人の親睦を深める機会として、かんぱーーい♪」

由姫さん、何だかんだでノリが良いんですけど・・・・・・
そして、その宴会は、深夜近くまで行われた。
次の日が休みでホント良かったよ。

第十一話：リリカル？（後書き）

琵藻「恒例のあとがき雑談会です」

葵「って、僕が出てきていいのかな？」

琵藻「そう言えば、後書きとかには出てこないよな？」

葵「えっと、そこは作者が出さないのが問題があると思うんだけど？」

琵藻「基本的に本編出してるから大丈夫だろうと思うんだが？」

葵「それにしても・・・・・・口調が大人びてる感じが否定できないんだけど」

琵藻「転生して、記憶の引継ぎがあるからそうなるんだと思うよ」

輝羽「もし記憶の引き継ぎ無かったらどうなっていたの？」

琵藻「それ相応の口調になっていたと思うが？」

葵「・・・・・・それより輝羽、その手にもってる威容に生地の無駄遣いな物は何だ？」

輝羽「・・・（にやり）」

琵藻「輝羽、ゴー♪」

葵「に、逃げ・・・設置型バインド！？」

～暫くお待ち下さい～

葵「う～、何でメイド服？」

毬藻「では、このカンペを見ながらお願い～」

葵「・・・／／／　か、感想コーナーです。悠久なる時間お兄様、どうもありがとうございます／／／」

毬藻「では、次回もお楽しみに～」

第十二話：魔法少女誕生？

『・・・・・・か・・・・・・・て』

夢の中で、誰か呼んでいる。
見たことのないフェレット。

『聞こえたら、僕に・・・・・・・』

プツン

遮断、遮断・・・それは、なのはに声をかけなさい。
二度寝に入りたかったが、そうも行かず俺はベッドから起き上がった。

「・・・・・・取りあえず、ネボスケさんを越さないと」

僕は、二階に行き扉を叩いた。

「高町さーん、起きて下さい。遅刻しますよ～」

しかし反応無し。

「起きないですね・・・・・・どうしましょうか？」
「どうしましょうか・・・って、起こさない事には遅刻させちゃうし」
「これ、使いましょうか？」

そして、取り出したのは【国語辞典】だった。

・・・・・あれよりか威力は低いから大丈夫か。
そして、その部屋から奇妙な声が聞こえたとか何とか・・・・・・
気のせいだな。

「気のせいじゃないの！！」
「朝食は静かに・・・・・・それと、人の心の声を読み取らない・・・」
「それにしても、何で今日は目覚めが悪かったのですか？」
「う～ん、何か変な夢を見たの」
「変な夢・・・ですか？」
「うん、誰かに呼ばれてるんだけど・・・・・・上手く思い出せないの」

その言葉に、俺とシャルティエは顔を見合わせた。
ユーノ・スクライヤ・・・・・・魔法少女はこの子で大丈夫なんだろうか？
すっごい不安なんだが。

放課後、すずかたちと別々に帰った。

とは言っても、僕は不可視魔法でなのはが向かった方向に先回りしているだけなのだが。

《居ました。前方３００ヤードです》

確か、あそこは桜の森になってるんだよな。

「っと、いた・・・・・ユーノ・スクライヤとその片割れには【レイジングハート】の形も発見」

３００ヤード離れている場所から見えてるのはなぜかって。簡単な事、輝羽の情報をリンクして映像を頭の中に送ってもらっているのだ。

「さて、フェレットさんを飼う事になるんだけど・・・・・どうしよっか？」

《私は別に構いません。分は弁えていると思いますので》

「分かった。それじゃ、先に帰ってるか」

そして、夜間になのはが家を飛び出した。
それは、物語の始まりを告げる行動だ。

「さて、動物病院に行きますか」

病院の近くまで飛行魔法で着たときに強い光が見えた。

「始まった。作品名【鋼炎のソレイユ】」

次の瞬間、手には奇妙な仮面が召喚された。
それを装着して。

「シャルティエ、インテリジェントに変換・・・・・・」

すると、葵の手には大きな杖が握られていた
なのはに迫り来る敵の間に入った。

「ガードプロテクション!!」
《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

迫り来る敵に間一髪で止めれた。

「き、きみは!?」
「話している時間は無い!!　急いで、魔導師の服と杖を変換しろ!!」

俺は、空気中の水分を水に変換させ、凍られた。

「凍て付く、氷の刃!!」

《Ｍｙｒｉａｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｉｐ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｉｃｅ》

無数に展開し、一気に襲い掛かる。

「相手を包み込め！！　氷結結界」

《Ｉｃｅ　Ｂａｒｒｉｅｒ》

次の瞬間、氷の檻が出来上がり完全に封じ込めた。

「す、凄い・・・・・・」

「服と杖はこれなの！！」

聖祥付属に近い魔導師の服そして、基礎の杖・・・・・・魔導師の杖『レイジングハート』

ドーーーン

その音に我に返り、その音の方に振り返ると異形が逃走を計ろうとしていた。

俺は長距離魔導砲を放とうとした瞬間、上のほうから光が見えた。

そう、上空に飛び立ったなのはが発射態勢に入っていたのだ。

「ディバイィィィン！！」

《ｂａｓｔａｒｄ》

「シューーーーート！！」

ズドンと大きな音が聞こえた瞬間、特大の砲撃が異形を飲み込んだ。
うわぁ～、こんな砲撃、俺はくらいたくはないぞ。

「リリカル・マジカル・・・・・・」

そして、何がともあれジュエルシードは回収できた。

「あ、あの！！」
「話はまた今度・・・・・・警察が来る前にここから逃げないとね」
《空間接続開始。回収しますよ～》

すると、輝羽の声が響いたと同時に俺はその場から消えた。

「お願いします。ちゃんと面倒見ますから」

当初の予想通りに、フェレット形態の『ユーノ』を連れてきた。

「・・・・・シャルティエ先生、どうしますか？」
「私は構わないです。お世話ちゃんとしてくださいね？」
「あ、ありがとうございます」
そう言って、深々と頭を下げた。
「気にしないでください。それより、先ほど鷲羽さんより連絡がありました」
鷲羽ちゃんから？
一体なんだろう・・・・・。
「明日、葵くんのパーソナルデータと私の経過を見たいと言う事で明日の夕方から一日こちらに伺うそうですよ」
明日は、五時間目で学校が終わるから大丈夫だな。
「大丈夫って連絡入れておくよ」
「お腹空いた～」
部屋の奥から、ぷららが出てきた。
小さく欠伸を噛み締めながら、洗面台の方に向かった。
「ぷららちゃん、凄く眠そうだね？」
「しかたないと思うよ。成長期だし」
葵くんの成長期は既に終わってるからね♪　ｂｙ毬藻
うるさい、作者！！

「それじゃ、明日も早いので休みましょうか？」

それぞれの部屋に入った。

そして、これが始まり物語である。

第十二話：魔法少女誕生？（後書き）

今回は雑談と説明は次回で行います＾＾；

第十三話：家族と繋がり（前書き）

毬藻「さて、第十三話ですね（笑）」

輝羽「かなり、更新が落ちましたね（汗）」

毬藻「大体、一週間に一話を配信するかどうかになりかけてますね（汗）」

輝羽「では、第十三話：家族と繋がりです」

第十三話：家族と繋がり

「やっほ～、葵殿」

学校が終わり、家に帰ると、鷲羽さんが家の前に居た。

「お久しぶりです。プロフェッサー鷲羽さん」

アウトフレームになり、シャルティエが出てくる。

「シャルティエ殿も元気だね・・・・・・取り合えず、二人のパーソナルのチェックしたいから入れてもらって良いかな？」

「そうですね」

僕達は、家の中には入りリビングの方に案内した。

「そうそう、砂沙美殿たちから土産を預かってる」

小さい鞄を取り出して、そこから色々なものが出てくる。

主に人参なのだが。

嫌いじゃないから良いんだけど。

「そう言えば、他の人は来なかったんですね。てっきり付いてくると思っていたのですけど」

「樹雷の方に行ってるよ。少し、トラブルがあるんだってさ」

すると、奇妙な機械を頭の上に乗せるとコンソールを叩き始めた。

「気分を楽にしていてね」

「そう言えば僕、勝仁兄さんの奥さんに会った事無いんだけど？」
「アイリ殿だね。ＧＰの養成学校の理事長だからあんまりこっちに帰ってくること無いよ」

最後のキーを押して、完了したといって頭から外した。
同じように、シャルティエの頭に同じように機械を置いた。

「今日は同棲している女の子は帰ってこないの？」
「なのはさんたちですか？　今日は、家族が来てるみたいなので少し遅くなるって事でした」

本当は、ここに泊まるんだけど。

「私は、気にしないよ～。賑やかなのはなれてるからね」
「・・・・・どうして、僕の知人はなんで心の声が分かるんだ？」

本人には永遠に分からない事だろう。

「ユーノ様はどうしたんですか？」
「【散歩】に出かけたみたい・・・・・ジュエルシード絡みではないから安心して」

今頃は、桃子さんや美由希さんに撫で回されてるだろうな。

「シャルティエ殿も終わったよ」
「ありがとうございます」
「問題は無し。いたって良好」

道具をしまって、大きく背伸びをした。

「今日は僕が作りますね。晩御飯」
「おっ、葵殿のか!?　こりゃ、楽しみだ。葵殿の料理は絶品だからな」

その言葉を聞いて、シャルティエは驚いていた。

「そうなのですか!?」
「そっか、シャルティエが生まれる前に砂沙美姉さんやノイケ姉さんに料理を教えてもらってたんだよ」

そういって、台所に立った。

「・・・・・葵殿の母上殿も料理は凄く上手だったよ」
「そっか、お母さんも・・・・・・」

この料理の腕は母さん譲りなんだ。

「美津那殿は、昔は宮廷料理人をしていたほどの実力の持ち主だよ」

・・・・・母さん、本当に何者なんですか？

「どうやって、僕のお父さんに出会ったのか著しく疑問に思うんだけど」
「そこで、ＳＰの仕事で知り合ったんだとさ」

あ～、お父さんの元の名前が【御神】だったね。
失念していた。
一時間後、料理が出来たと同時にぷららが帰ってきた。

「ただいま～」

「ぷららちゃん、お帰り」
「葵、ただいま～。シャルもただいま～」
「はい、お帰りなさい」
「ねぇねぇ、そっちの人は誰？」
「白眉　鷲羽ちゃんで～す。宜しくね」
鷲羽は、ぷららの頭をなでた。
「槻月　ぷららです」
その言葉で、鷲羽さんが驚いた顔をしていた。
「葵殿、この子がこの前話していた・・・・・・」
その言葉に頷いた。
「孤独な世界・・・・・小さな世界の住人だった子です」
外部からの吸収で小部屋ほどまで縮小された世界で生きていた女の子。
僕と同じ孤独を与えたくなかったので保護したのだ。
「今日の晩御飯は何？」
「今日は、ご飯と若布と豆腐の味噌汁、ごった煮と紅白膾だよ」
僕が作れるのは純和風が多い、平行世界にいるライト達とかみたいに洋食とかあまり作らない。
そっちの分野はシャルティエに任してある。
本当は、マスターしようと頑張ってるのだが。

「醤油とか味噌の方が使いやすい・・・・・・」
「けど、葵のは美味しいから大好き♪」

ぷららは優しい笑顔でそう答えてくれた。

「うん、ありがとう」

そういって、頭を撫でてあげた。

「ただいまです～」

その言葉と同時に団体さんの足が聞こえた。

「お帰りなさい、なのはさん」
「おかえり～」

その後ろには、なのはとその家族が居た。

「お邪魔するね」
「君が【槻月　葵】くんで間違いないみたいだね」
「え、えぇ・・・・・・間違いないですけど？」

そう言った瞬間、その隣に居た女性・・・桃子さんが抱き付いてきた。

「美津那ちゃんと時哉君の子供なのね？」
「・・・・・えっと、お母さんとお父さんの事知ってるんですか？」
「二人とは昔からの付き合いよ」

・・・・・母さん、父さん、あなたは一体何処まで友達がいるんですか？

「けど、貴女と会うのは初めてだね？」
「そうだな。こんな可愛い【女の子】とは思わなかった」

・・・女の子？

僕は、髪に手を伸ばすと結んでいる紐がなかった。
その後ろで、鷲羽さんがリボンをひらひらとしていた。

「い、いつの間に・・・・・・」

次の瞬間、僕は神速を発動して桃子さんからの抱擁を掻い潜り、鷲羽ちゃんから奪われたリボンを掴んでいた。

「およ？」
「ほぉ～」

鷲羽ちゃんは少し驚きの声。
恭也さんと士郎さんが感心の声を上げていた。
僕は、髪を結いなおした。

「鷲羽ちゃん、ふざけが過ぎます！！」
「うっ・・・・・すいません」

今回はすんなりと謝った。

「その年で【神速】を使えるとは」
「父さんから教えてもらいました」
「そっか・・・・・時哉は良い子供に巡り合えたね」

その後、全員で晩御飯を食べた。
久しぶりの大人数での食事、僕にとって物凄く嬉しかった。

第十三話：家族と繋がり（後書き）

毬藻「今日も楽しくキャラクター雑談会です（笑）」

鷹羽「みんなの鷹羽ちゃんで～す♪」

毬藻「あの姿でアイドルは無理だから（汗）」

鷹羽「なら、この姿ではどうかしら♪」（モデルフォーム）

毬藻「んで、何で初音島に来たんですか？」

鷹羽「……まぁ、いいけど。以前のパーソナルの時に葵殿のデータの中にブラックボックスがあったのよねぇ～」

毬藻「ふぅ～ん、それで？」（お菓子を食べてます（笑））

鷹羽「気になるじゃない。一人の科学者として！」

毬藻「そんなものは溝か下水処理場かに流し捨ててくれるとありがたいです♪」

鷹羽「何故、消したがるんの？」

毬藻「後から分かることだし、忘れても良いと思うんですよ～♪」
（↑ブラックボックスを付けた張本人ｗｗｗ）

鷹羽「まぁ、分かっている事は、ブラックボックスの解除は無理矢理には出来ないことと、時間差でボックスの能力が解除するという

事ね」

毬藻「……そこまで、解析は出来たんですか（汗）」

鷹羽「天才科学者の鷹羽ちゃんを嘗めないでね♪」

毬藻「……（まぁ、そろそろ一段階のチート能力を解除するしかないな（汗））」

輝羽「とは言うものの、一段階目の解除は何処でするんですか？」

毬藻「さぁ、いまだに検討が付きません。ましてや、葵の位置が一番微妙なんだからどうこう出来ないからね（汗）」

鷹羽「そこは、毬藻殿の手腕に掛かると言う事ね（笑）」

毬藻「すっごいプレッシャーを与えないで下さい！」

輝羽「感想コーナーです」

ぷらら「悠久の時間さん、ジュエルシードさん、感想と誤字指摘ありがとうございます♪」

鷹羽「誤字指摘って、何かしたの？」

毬藻「表記ミス……光鷹翼（こうおうよく）なのに『こうごうよく』と記載していたのを指摘されました（汗）」

鷹羽「あらら、それは痛かったわね（汗）」

毬藻「なので次回のあとがきは葵をコスプレをさせます（笑）　なので、着せたい衣装がありましたら感想で言っちゃって下さい（笑）」

葵「って、待て！　何でそうなるんだ！！」

毬藻「葵ちゃんのサービスタイムだからだ♪」

輝羽「ではでは、次回予告です♪」

毬藻「嫁ワンがいよいよ登場♪」

輝羽「次回『雷と金髪とツインテール！』」

葵「いやいや、そんな題名じゃなかったぞ！！」

ぷらら「じかいも、がんばりますひょん♪」

第十四話：巡りあわせ（前書き）

毬藻「今回は、場面に悩まされた」

ぷらら「どうして？」

毬藻「猫がどこにもいなかった」

第十四話：巡りあわせ

次の日に高町家の面々は帰っていった。
土日はこっちに来て家族団欒をするそうだ。
今日は、久々に来た。

「何で猫公園に？」
「すずかちゃんが猫と遊べる場所がないですかって聞いてきたから」

今日は保護者として音姫と流が一緒に来ている。
猫公園・・・これは、僕らの付けた場所の名前。
正式な場所は【胡ノ宮神社】なのだが。
その裏は、猫が結構集まる場所なのだ。
・・・・・時たまにうたまるが出てきたりするんだが。
今日は、見受けられない。
良かったといえばいいのか何と言えばいいのか。

「ん？」

僕は、一匹の子猫を見ると、何かで戯れていた。
青いクリスタル・・・・・・ナンバーが？と書かれていた。

「猫とクリスタル・・・・・・発生条件充たしてるし」

僕は、皆にばれないように小さく溜息を吐いたとき、猫がクリスタルを咥えて森の奥に走っていった。

「音姫さん、少し【お仕事】してきます」
「うん、頑張ってね」

そう言って、了承してくれた。
魔法関連の仕事は由姫さんも了承してくれた。
条件が何個か出てるけど、無茶という範疇のものではないから大丈夫だった。

《（葵様、プレシア・テスタロッサの件に関して重要機密が出てきました）》

同時に森に入った時、シャルティエから通信が入った。

『（重要機密？）』

《（はい、プレシアはある研究をしていたのは知ってますよね？）》

確か駆動炉・・・・・だったかな？
魔道で動かす動力だったはず。

《（二人のお子さんで長女のアリシア・テスタロッサ様がその事故の被爆者になり植物状態、次女のフェイト・テスタロッサ様は病院の方にて入院していた為、無事みたいです）》

って、ちょっと待て！！

『（フェイト・テスタロッサがプレシアの実の娘！？）』

『（間違いありません。時空管理局の無限書庫から引き出した情報なので）』

シャルティエ、あんた何処で何してるんですか！！？

≪（足は付かない様にしましたから）≫

物凄く、物騒な仕事をつけましたね、鷲羽ちゃん。

ドーーーーン

大きな音が響き、周りの風景が変わっていた。

≪（ユーノ様の結界魔法です。魔力数3です!!）≫

ビンゴ!!

なのはが対峙している相手は間違いなく・・・・・・・

「はぁぁぁぁぁ!!!」

「きゃーーー!!」

草むらから、出てきた時になのはが吹き飛ばされた。

来る途中で、お面をつけた。

「貴女も、邪魔しに来たの??」

「・・・・・そんな事はしない。貴女は、それを集めてどうしたいのかって聞きたい」

さっきのシャルティエの話で考えると多分あっていると思う答えがある。

「アリシア・テスタロッサの植物状態を解除する事か？」
「そう・・・・・私は、アシリア姉さんを助けたいんだ！！！」

あらら、簡単に目的を吐いちゃったよ。
けど、何で不安定なジュエルシードを使ってなんだ？

「ジュエルシードは確かに願いをかなえてくれるけど・・・・・・
不安定で危険なんだよ！！！」
「知ってる。だから、アルハザードの門を開いて、姉さんを安全に
目を覚ます方法を見つけるんだ！！！」

あ～、確かにその方が安全な方法なんだけどね。
時空震は物凄い事になりそうだけど。

《（葵様の治癒魔法で起こした方が一番安全な気がするんですか
？）》
『（取り合えず、なのはとフェイトのお友達イベントは作らないと）
』

後々が大変になりそうだ。
特に、【闇の書事件】がなんだけど。
手加減で一度戦うか。

「シャル、全方位！！」
《変換属性『雷』と判断、対属性で攻撃を開始します》
「セカンドモード『グローブ』」
《属性変換を『地』へ変換》
「未来視！！」

僕は、瞳の色を深紅に染めた。

「サンダーレイシ！！」

無数の雷撃が葵を襲ったがそれを掠る事無く回避して一歩手前まで来た。

《夢幻書庫アクセス。作品名【ラグナロクオンライン】使用キャラ【モンク】》

そして、周りに気功を五つ作り出した。

次の瞬間、フェイトの腹部に手を添えた。

【発頸】

五つの気功一気に消費して、叩き込んだ。

「あ、がっ！？！？」

後ろに吹き飛ばした。

「（フェイトちゃんは、スピードタイプだからあんまりダメージ無かったかも・・・・・・）」

《（人なんですから、内部ダメージは存在しますよ？）》

「な、何て言う攻撃方法なんだ・・・・・・」

技自体が中国拳法なので魔法は使っていない。

未来視を使ってるから一応は魔法は使ってるか。

「あ、あの・・・・・・」

気絶から回復したなのはが話しかけてきた。

「あなたは一体？」

「時空管理局とまた違う組織【魔術師協会ラクト】の一人【三上智也】」

とっさに言った嘘、実はこの世界に存在はしてる。

流が今後参加する組織の名前である。

「さて、そろそろ出ないとそれじゃ、失礼！！」

輝羽の転送でその場から消えた。

「フェイト、大丈夫かい？」
「うん、私は平気」

ビルの一室で、ソファーに寄り掛かってるとアルフが心配そうに顔を覗かせてきた。
あの子が放った一撃は痛くなく、ただ単に吹き飛ばしただけの攻撃だった。

「あの子に完全に手加減されていたのね」

それが悔しかった。

私は、今まで集めた【ジュエルシード】を眺めた。

「まだ足りない・・・・・・けど、集めるんだ」

母さんの願いは私と同じ願い。

「アリシア姉さんを絶対目を覚まさせるんだから」

その瞳には力強い光が宿っていた。

「ご飯にしようか？」
「わ～い♪」

子供のようにはしゃいでいるアルフを見て、フェイトは小さく笑っていた。

『（待っててね、アリシア姉さん。ジュエルシードを集めて目を覚まさせるから！！）』

小さな決意を胸に秘めて、フェイトはアルフの所に向かった。

第十四話：巡りあわせ（後書き）

輝羽「雑談室だよ～」

毬藻「やっと、フェイトが出て来たｗｗｗ」

輝羽「場面が難産でしたね？」

毬藻「初音島に猫が集まる場所なんて無かったから、胡ノ宮神社の裏を急遽猫の集会場に仕立てましたｗｗｗ」

輝羽「しかも今回は文章がおかしくない？」

毬藻「気がついたんだけど・・・・・あれがどうしても崩す事が出来ないくって、どうしようも無かった；；」

葵「なんでこんな格好になってるんだ！！！」

毬藻「現在の葵の格好は、『ハンモック』です」

葵「ど、どう考えてもマニアックすぎだろ／／／」

毬藻「意見が無かったから思いっきり犯罪級の洋服にしてみたｗｗ」

葵「は、犯罪以上の問題だ／／／」

毬藻「では、感想コーナーに入ろうか」

葵「・・・・・悠久なる時間お、お兄ちゃん、か、かかかか感想をあ、ありが、とう／／／」

毬藻「（スルー）次回は、葵の能力が変化！？」

ぷらら「じかいもおたのしみにしてください♪」

葵「もう、いやだ～～～～～！」

第十五話：レアスキル（前書き）

毬藻「ふむ、ストック無いから間隔が空いてしまうので申し訳ないです」

第十五話：レアスキル

「ただいま～、ってあれ？」
「お帰り、葵♪」

そこに出てきたのはぷららだった。

「僕よりか先になのはちゃんが帰ってきていたはずなのに？」
「うん、帰ってきたけどまた出かけたよ～」

そう言えば、ユーノの気配がないけど。

「輝羽！！」
『聞こえてるよ～。胡ノ宮神社の裏山に結界反応あるからただいま練習中かな？』

・・・・・やっぱり、温泉に行った時のアレがホントに堪えたんだと思う。

『後もう一つがジュエルシードの件だけど、住宅街で反応あり・・・・・魔力は物凄く微量だけど、今晩には活動しそうだよ』

その答えに僕は確信した。
今夜が、時空震が発生する。

その答えは的中した。

「あいつらバカだろう！！！」

なのはとフェイトがジュエルシードの目の前で戦闘していたのだ。

《魔力数値増大！！》

ヤバい！！！

すると、空気が震えた。

いや、次元が震えだした。

次元内にも振動確認という言葉という前に僕は体を動かした。

《マスター！！　危険です》

「危険の前にこれ以上は結界崩壊して外まで被害が広まる」

そして、僕はジュエルシードを素手で掴んだ。

「うをぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

魔力を開放ししようと凄い熱量が手の中で暴れる。

「三上君！！！」

「来るな！！」

僕は、大声で二人が来ないように叫んだ。

「う、ぐっ！！」

ヤバいな・・・・・・意識が。

ドクン・・・ドクン・・・

《葵様！！》

すると。

【力が欲しいか？】

頭の中に広がる声が聞こえた。

男の声か女の声かは定かではなかった。

「欲しい・・・・・・この力を抑え込む力が」

【なら、そなたに新しい力を授けよう】

すると、頭の中にパズルが生まれ、簡単に組み込まれていった。

「・・・・・・ドレイン」

小さな言葉で呟くと、ジュエルシードの力が一瞬にして消え去った。

違う、ジュエルシードの魔力が。

「僕の中にある!?」

こんな事は有り得る訳はない。

本来なら、杖で回収して媒体で魔術師の能力を上げていく。

それを杖の回収無しでジュエルシードの魔力を止めたのだ。

《取り合えず、マスターの魔力を別の物に変換しますね》

「・・・・・確かに危険かもしれないな」

杖を持つとジュエルシードから取り出した魔力をカートリッジとして作ってもらった。

そして、手の中にあるジュエルシードは発動はしなかった。

「・・・・・僕のレアスキル?」

なんて言ったかな、こんなスキルの事を。

《ゴッドハンドですか？》

何か微妙に違う気がする。

《鬼手？》

どこのぬ～べ～ですか？

ジュエルシードをフェイトに渡した。

「魔力は直ぐに復活するはず、早く封印しなさい！」

「えっ、はい」

結界を解除と同時に僕は家の方に転送してもらった。

シャルティエに晩ご飯の事を頼んで僕はベッドに倒れこんだ。

「き、キツイ」

『多分、初期魔法は体に負担が大きかったんだと思うよ』

通信で輝羽が話しをしてきた。

『今、鷲羽さんに話しをしたら明日の朝に着くからパーソナルチェックをさせてだって』

してもらった方が一番無難だと思う。

「あ～、駄目だ。物凄く眠い」

次の瞬間、僕は意識を手放し、暗い闇の中に潜り込んだ。

「・・・・・・の、・・・・・・お・・・殿！！」

意識を何とか浮上させて、目を開けると一人の少女の顔があった。

「・・・・・・かに頭？」

スパーーーン！！

スリッパで軽快な音が聞こえた。

「～～～～！！！」

「はぁ、目が覚めた？」

「・・・・・・鷲羽ちゃん？」

今ので、意識がはっきりした。

あれ、鷲羽ちゃんが来るのは明日じゃなかったっけ？

「・・・・・・今日は何日の何時ですか」

「あの事件からつぎの日の夕方よ」

その言葉に俺は唖然とした。

あの時間から丸一日経っているって事だ。

「とりあえず、葵殿が寝てる間にパーソナルの方は調べさせてもらったよ」

「そっか・・・結果は？」

「葵殿の能力が三つ分かった」

三つ？

「一つは『全ての能力を別の物に変換する能力』だ」

「別の物・・・・・錬金術とかそんな物ですか？」
「それよりか上ね。空気中の窒素とか微粒子程度のものを金塊とか船を作り出すことが可能」
あれ、なんかおかしくないか？
「そ、簡単に言えば大きさとかの物理法則を無視してその物を造り出すというのもよ。大小とわずね」
おいおい、一般常識を覆してないか？
「葵殿が持っている『光鷹翼』も既に一般常識の枠を越えてるんだがねぇ」
確かに、一般常識に当てはまらないな。
「んで、二つ目が吸収変換能力」
そのままの読み方であってるんだよな。
「魔力やその他諸々の力を別な物に換える力よ」
魔力を他にも色々な事に繋げることが可能。
確かに、使い勝手は良いな。
「最後の一つは、たぶんだけど物凄いおかしかな」
そう言いながら、鷹羽は苦笑いしていた。
「観るより慣れろかな。葵殿、私たちに命令をして欲しい。命令後

に『否定する』を加えて欲しい」
「え?!　う〜ん、動くことを『否定します』とか」
「えっ!!」

二人の動きがピタリと止まった。

「葵様、動くことを出来ないです」
「あはは、葵殿。私も動けない」

鷹羽は、苦笑いしながら葵に答えた。

「……動くことを『許可する』」

すると、何かの呪縛から放たれたように二人の身体が動いた。

「これって……」
「皇家の命令の絶対版……『絶対命令』と言った方が良いかな」
「絶対……命令」

僕の体……一体どうなっていくんだろう。

「キーワードの『拒否』と『許可』を使わないと発動できないんだけど、多分だけと、機械通信や念話などでも有効範囲と考えて良いと思うよ」
「と、とんでもないレアスキルだよ」

僕は呆れるしかないよ。

「もう一つ、これは用事なんだけど……明日は休みだよね」
「今日は土曜日だから、うん、休みだよ」

「明日は美津那殿達の命日だから」

もうそんな日なんだね。
僕が決めた決定事項。
毎年、母さん達の命日にお墓参りをするって決めた。

「ただいま戻りました」
「こんばんは」

そう言えば、今日は土曜日だったっけ。
士郎さんや桃子さんが来る日だったんだ。
僕は、下に降りて皆に挨拶した。

「あ、あおい・・・くん？」

余所行きの服を来ているのに、なのはが気がついた。

「どっかに行くの？」
「うん、少し用事に・・・・・・部屋は好きなように使ってください」
「美津那さんと時哉くんの墓参りかな？」

その言葉にハッとした。
何でそんな事を知ってるのかと。

「・・・・・やっぱりか。俺達が来るときは二人の顔が見えなかったから何となくそんな感じはしていたんだ」

あぁ、やはり士郎さんだ。
何でもお見通しなんですね。

「はい。二年前に護衛中に敵の攻撃を受けて・・・・・・亡くなりました」

そう言うと、桃子さんが抱きしめてきた。

「今まで頑張ってきたんだね」

「あの時の、僕には何も出来ませんでしたから」

記憶も封印され、それを知ったのは事件後・・・つまり、お母さんが事を切れた時なんだったから。

それにブチ切れて、流星召喚『メテオフォール』をぶちかまして時空震を発生させたのは内緒にしておこう。

「私達も二人に手を合わせたい」

その言葉で、僕は頷いた。

僕達は、士郎さんが運転する車で一路岡山まで向かうのだった

第十五話：レアスキル（後書き）

毬藻「あとがき雑談会～」

葵「仕事行く前の数分前に投稿ですか？」

毬藻「中身はさっき仕上げた・・・で、今回は何となく葵に三つほどスキルを付け加えていただきました」

葵「吸収能力、絶対命令、全ての能力を別の物に変換する能力の三つか？」

毬藻「吸収能力は別名『ドレイン能力』って言うからね」

葵「・・・・・ちょっと待った。もしかしてこの能力は？」

毬藻「鬼畜王とか色々言われ始める切っ掛けになった能力の前進だ」

葵「あぁ～、やっぱりか・・・」

ぷらら「鬼畜能力？？」

毬藻「まだ先の話しただ・・・さて、次回は岡山で葵と天地が久々に光鷹翼でバトルでもするかな？」

葵「それは絶対にありません！！」

毬藻「それでは、次回もお楽しみ下さい」

番外編：休日はゆっくりとしたいものです（前書き）

今回は九浄　夕先生の魔法戦記リリカルなのはＲｅｆｒａｉｎとコラボです。
シナリオ形式ですのでご了承ください。

番外編：休日はゆっくりとしたいものです

葵「はふぅ～、久々にのんびり出来るよ」

シャル『そうですね。なのはちゃんたちは連休で鳴海市に戻ってますからね』

ぷらら「けど、退屈だよ～」

シャル『静かになったって言っても、静かすぎですね』

葵「ユーノもなのはちゃんたちと一緒に帰ったから仕方ないしな」

シャル『そういえば、御薙様より伝言を預かってました』

伝言？

一体なんだろう。

シャル『えーっと。【今日の2時にはやての子供と俺と娘の三人で遊びに来るから】との事です』

葵「……シャル、わざと言わなかっただろ？」

シャル『……てへっ☆』

葵「かわいく言うな！！」

ぷらら「うにゅ～、どうするの？」

葵「『簡単に』出来る物を『出す』しかないだろ？」

シャル『それが一番妥当かも知れないですね』

葵「では、作業開始と行きますか？」

二人「『お～♪』」

シャルティエとぷららは天高く拳を突き上げた。

僕は、その行動をただただ見守るしかなかった。

～冬矢ｓｉｄｅ　ｉｎ～

冬矢「初音島まで来たのは良いんだが……」

リア「道に迷ったの？」

ことは「ここは、そんなん広くなかけどなぁ？」

冬矢「この前、こっちに呼んだときは簡単に来れたみたいだし」

？？「あの、どうかなさったんですか？」

それは、小さな女の子で頭に大きなリボンを付けていた。

冬矢「えっと、この島に『槻月』って名前の人って居る？」

？？「はい、葵ちゃんの知り合いなんですか？」

～冬矢ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

葵「もう何も口に入れたくない……」

シャル『これだけ作れば大丈夫だと思いますよ♪』

ぐぅ～

葵「……ちゃんとカロリーは消費しているんだね」

溜め息混じりでテーブルの大皿盛りつけてある和菓子や洋菓子やらを眺めた。

そう、このお菓子類は全部葵が作り出した物なのだ。

作り出した分、その代価はちゃんと発生はする。

このお菓子に使った代価は『葵の摂取したカロリー』からなる物である。

葵「カレーを食べながら和菓子や洋菓子を創るなんて……どれか一つはハズレはありそうな気がするよ」

シャル『その可能性は……否定できませんね（汗）』

シャルティエの表情もある意味で肯定と言っていた。

ピンポーン♪

「ごめんくださーい！」

「こんにちわ～」

「どなたかいらっしゃいますか～」

音姫「葵ちゃーん、お客さんがきたよー！」

あれ？

音姫さんと一緒に着たんだ。

僕は玄関に行くと。

冬矢「こんにちは、約束通りに遊びに来たぞ」

リア「こんにちは～」

ことは「よろしゅうな♪」

うん、いろんな意味で小さいフェイトとはやてが来た様な気分なんだけど。

そんな考えは吹き飛ばして、僕は三人を家の中に案内した。
とは言っても、はやてはまだ面識は無いんだけど。

葵「お茶菓子持ってくるからちょっと待っててね」

僕は席を立ち、台所に向かった。
台所に置いてあった二種類のお菓子を持ち、三人の所に向かった。

葵「おまちどうさまです」

シャイ「こちらにおいて置きますね」

ユーリ「うわぁ～、すご～い」

冬矢「これはまた凄いな・・・・・・葵くんが作ったのか？」

葵「えぇ、頑張って『作り』ました～」

さっきのあれを作ったのを思い出し、小さく溜息を吐いた。

冬矢「・・・・・・不思議な力があるんだな」

ありゃ、冬矢さん見抜いちゃってるし。
このお菓子を『魔法』で作った事を。

リア「え、どう言う事なの」

冬矢「話して良いのか？」

葵「別に構いません」

冬矢「これは、普通に作ったものではなく『力』で作ったって言った方が良いかな？」

ことは「それって・・・・・・つまり？」

葵「これが僕の魔法『手からお菓子を作り出す』魔法だよ」

ユーリ「すごーい」

ことは「ほんまやな～」

二人は、感心したように声を合わせていった。

ブウォン

急にテレビの画面が点いた。

外部から接続ができるやつ・・・あいつしか居ないか。

輝羽『あう～、良かったよ～無事に繋がったよ』

半分涙目で画面に現れた輝羽が居た。

葵「輝羽、取り合えず自己紹介」

輝羽「あう、はいはい。輝羽といいます。船のシステムコンピュータと言えば良いかな？」

リア「こちらこそ宜しくです。私はリア・T・H・ミナギです」

ことは「八神ことはや。よろしゅうな♪」

冬矢「御薙　冬矢だ。宜しく」

輝羽「はい～。って寛いで挨拶してる場合では無かったです！！」

葵「・・・・・どうしたんだ？」

輝羽「鷲羽お姉ちゃんからの要請だよ。ポイントＴＹＡ－７８０で『不正入国者』で魔力ランクは『ＡＡ＋』」

シャル『それはまたあれですね？』

葵「はぁ、せっかく遊びに来てくれたのに無粋な人たちだね」

半分苦笑いしながら僕は席を立った。

輝羽『敵の数は３人だよ』

葵「その方々には早々、お国帰りをして頂きましょうか」

シャル『その意見には私も賛成します』

ぷらら「いってらっしゃい、葵」

リア「待って！！　私たちも行く」

冬矢「そうだな。俺達で何か手伝えることがあるかもしれないし」

ことは「そうやな」

葵「いやいや、客人を戦闘に・・・」

冬矢「俺も機動六課の人間、その理由がわかるだろ？」

葵「しょうないっか。輝羽！！　転送をお願い」

輝羽「了解！！　緊急転送いきます」

そして、五人は輝羽が転送された場所は天地家の山の中だった。
その目の前には、情報通りに三人がいた。

「おい、なんだお前らは」

葵「貴方達に名乗る名前はありません。この世界は未開拓の為にこの星へのコンタクトは禁止になっている筈です！！」

男は、ナイフを持ち葵に切り掛かろうとした。

葵「僕に攻撃する事を『拒否』します」

すると、男の体は不自然に固まった。

「あ、がっ・・・」

葵「一言いいます。僕は今物凄く不機嫌ですので手加減が出来ない時は・・・」

そう言って、手には『光鷹翼』が握られていた。

葵「ごめんなさい！！」

ブオン！！

物凄い風の音が聞こえた瞬間、葵に切りかかった男は吹き飛ばされていた。

「な、嘗めるな！！！！！！！！」

その後ろにいた男は、魔法球を数十個展開した。

葵「そんだけですか？」

葵はそれだけ言い残すと同じように魔法球を作り出した。

しかし、葵の作った魔法球は桁が遥かに越えていた。

葵「２３，４８９個展開完了。これで、力比べしましょうか？」

「ば、化物か！！」

輝羽『鷲羽ちゃんから伝言だよ。好き放題していいって』

葵「その連絡待ってました！！」

「うわぁ！！！！！」

男は、全ての魔法球を撃ち出したが。

葵「温いです」

一言だけ言い放つと、魔法球は葵の目の前につくと消えた。

シャイ《魔力吸収完了しました》

リア「シャルティエさん！？」

さっきまで居たシャルティエはユーリの横には居なかった。

シャル『ては、時間がもったいないので、サクサクと片付けましょう♪』

葵「管理者権限。タイトル『蒼穹のソレイユ』アイテム『機械眼』」

コアを作り出し、それをシャルティエにはめ込んだ。

葵「ミョルニル！！」

雷撃を男に食らわせ後ろに吹き飛ばした。

「う、うわぁぁぁぁ！！！！」

男は魔法陣を作り出し、最大砲撃を放とうとしていた。

その狙いは葵てはなく・・・

リア「えっ！？」

葵「！！！！　贈り物のルーンよ！」

リアのいた場所は土煙がたった。

冬矢「貴様！！！」

冬矢は男に鉄拳を食らわして気絶させた。

葵「ふぅ、間一髪ってところかな？」

リア「葵くん・・・・・・左手・・・」

ことは「うん、あぁ。今の砲撃で吹き飛んじゃいました（笑）」

冬矢「いやいや、笑ってる場合じゃない！！」

ことは「そ、そうやで。はよ、治療せんと・・・」

葵「止血と治癒はしてますから。少し違和感はあるけど」

リア「わたし、わたし・・・」

僕は右手でユーリの頭をなでた。

葵「命があるだけ儲けもんだよ。こうやって生きてるんだから良いんじゃないかな？」

輝羽『えっと、お話のところごめんね。不法入国者はお里帰りしてもらったから安心して良いよ～』

シャル『今は違う意味で取り込み中みたいですよ？』

輝羽『そうみたいだね』

とりあえず、一度家に戻った。

冬矢「色々、迷惑をかけたな？」

葵「気にしないで、また遊びに来てください」

冬矢「あぁ、そうする」

リア「また、来ます。だから、無理はしないでください」

葵「あ～、泣かない泣かない。可愛い顔が台無しだよ？」

リア「あ、あぅ／／／」

葵「リアの笑顔が好きなんだから、それに無理はしないと約束するから」

リア「うん！」

輝羽「では、転送します♪」

ことは「では、またな～」

冬矢「今回はこれで」

リア「ま、また来ます！」

光に包まれて三人は元の世界に戻った。

番外編：休日はゆっくりとしたいものです（後書き）

毬藻「……何故にフラグ立てようとしてるんだ？」

葵「…あれは普通じゃないのか？」

毬藻「……（あんな設定入れた記憶無いんだけど（汗））」

輝羽「そういえば、腕が治ってる！？」

鷲羽「私が治したわよ？」

毬藻「流石、鷲羽ちゃんです（汗）」

葵「では、次回は？」

毬藻「コラボ第二部作目です」

葵「一体いくつ頼みに行ったんだよ（汗）」

ぷらら「次回もお楽しみにです♪」

番外編？：お昼ご飯はこれじゃ邪道ですか？（前書き）

同じく、岡山行き前の話です。
悠久なる時間さんの作品『真（しん）に神に愛されし者の人生』とのコラボです。
鏡くんなんか性格が違う気がするｗ
頑張ってトレースしたんだけどｗｗｗ
シナリオ形式なので、お願いします。

番外編？：お昼ご飯はこれじゃ邪道ですか？

鏡「なぁ、着いたは良いが、俺は地図を持たされていないんだが？」

葵「神様代行みたいなもんだろ？　場所はわかるはずだし」

鏡「それ、何か違う気がするが？」

葵「まぁ、良いんじゃないかな？」

鏡「それがあったとしても地図ぐらいは渡してくれ」

葵「今度くる時は渡すよ」

鏡「その時は要らないと思うぞ？」

お茶菓子の水羊羹を食べながらマッタリしてると。

鏡「おまえが使っている『希少能力』の３つだが、制約とかあるのか？」

葵「絶対命令とかの能力？」

鏡はその言葉に頷いた。

葵「う～ん、絶対命令は制約はないけど、他の二つは『簡要封印』はしてるよ」

鏡「簡要封印？」

葵「ドレインと気質変換はね。シャルティエが簡要封印をしてくれてるんだよ。解除しないと使えないようにね」

鏡「葵の封印だから簡要と言っても強力なのか？」

シャル「いぇ、本当に簡単な封印です。必要なスペルを言うと使えるようになりますから」

鏡「そういえば、シャルティエさんもチートでしたね（汗）」

シャル「いぇ、私は普通の『デバイス』ですよ？」

その言葉に、二人は『絶対に有り得ない』と心の中で答えた。

鏡「ま、なんだ。葵の後ろにいる神は一体なんだろうな？」

葵「そこは判らないんだよね。天子さんも『ふっふっふっ、そこはまだ秘密なのですよ♪』と不適な笑みを浮かべて答えたし」

鏡「・・・・・その天子、ある意味危険だな（汗）」

葵「敵っていう感じは今はないから大丈夫だよ～」

鏡「クロノスかと考えたんだけど、何か違うんだよなぁ～」

葵「クロノス&タイムの守護を持っているのは流だし、また違うものだよ～」

鏡「守護霊はおまえの両親みたいだがな」

葵「そっか。ありがとう♪」

鏡「まぁ、当初は複数のかと考えたんだがそれも何か違ったからな。しばらくしたら判るから楽しみにしておくよ」

葵「うぃうぃ、了解～」

そうこう話してる内にお茶が冷めたな。
時計を見てみると１２時を過ぎていた。

葵「お昼だね。何か簡単なものでも作るよ」

鏡「葵は料理できるのか？」

葵「シャルが帰りが遅いときとかは僕が作ってるよ」

シャル「本当に心苦しいのですが・・・」

葵「良いんだよ。そうしないと、僕の腕が錆びちゃうからね（笑）」

そう言って、葵が台所に入った。

葵「おまたせ～」

ごはんと吸物と野菜がやけに多い焼きそばだった。
しかもやたら人参がたくさん入っていた。

鏡「人参の量が凄いな」

葵「僕の義兄さんの家が人参を栽培してるからね。時々、送ってくれるんだよ♪」

そう言いながら二人は食べ始める。

鏡「おっ！　美味い！」

近くにあったぬか漬けを食べた。

鏡「ぬか漬けも美味いな

葵「それ、自家製だよ～」

鏡「って、マジか！！？」

葵「臭いが付かないようにはしているけどね（笑）」

鏡「・・・（１０歳で漬け物を作るって一体何だろうな（汗））」

その時、玄関が開く音がした。

「こんにちわ～、葵くん、いるかな～」

鏡「！！！　この声は『管理局の白い魔王』の声・・・だと」

葵「違う違う。この声はさくらさんですよ」

※中の人が同じなので仕方ありません。ｂｙ．毬藻

※裏表、人が違いますが、同一人物です（笑）

鏡「そ、そうなのか？」

さくら「あれ？　お客さんが来ていたんだ」

葵「少し前にお世話になったんですよ～」

鏡「神代　鏡です。よろしく」

さくら「ボクは芳乃さくらだよ。葵くんの第一の保護者だよ♪」

鏡「・・・保護者？」

葵「まぁ～、僕の家族構成って物凄く複雑すぎるからね（汗）」

そう言いながら胡瓜の浅漬けを口に入れた。

鏡「あぁ、皇族なんだよな・・・しかも、第四位の地位」

さくら「うにゃ、それ本当なの？」

鏡「そうでｒ「許可しない」うぐっ！！！」

次の瞬間、鏡の口から言葉が出なくなった。

葵「そんな訳ないですよ～《あの時に聞いていたけど、鷲羽さんの方で記憶を弄って貰ったんです》」

鏡《な、なるほど。状況は理解したからコレを解いてくれ、俺の解術も受け付けないから》

葵「許可。ところで、さくらさんはどうしてここに？」

さくら「そうだった。ご飯食べてなかったら一緒に食べようって誘いに来たんだけど、もう食べちゃってたね」

葵「そうですね～」

シャル「それでしたら、夜はさくらさんの家でご相伴に預かりましょう♪」

ぷらら「わ～い♪　さくらさんのご飯、葵や由姫さんと同じぐらい好き♪」

ぷらら、貴女一体今までどこにいたの？

それぐらい、自然に溶け込んでいた。

さくら「いいよ～。それじゃ、今日はパーティーだよ♪」

その夜は、芳乃家の庭先でバーベキュー大会になったのであった。

番外編？：お昼ご飯はこれじゃ邪道ですか？（後書き）

毬藻「今回二回目です・・・・・・後一回ありますｗ」

葵「何回あるんだよ」

毬藻「三回・・・次回は霊亀先生となっぺ先生のコラボですｗ」

葵「プラムか！！？」

毬藻「プラムは出てこないよ。そもそも作品が違います！！！」

葵「共通点が見えないのだが？」

毬藻「・・・・・・普通に判ると思うが？　ではでは、次回もお楽しみに～」

番外編？：これが癖になったらどうしよう（前書き）

今回はなっぺ先生と霊亀先生のツインコンボｗ
そして、表現力低くて申し訳ございません；；

番外編？：これが癖になったらどうしよう

それは、深夜のとある部屋。
葵と吼太がなにやら話をしていた。

吼太「凄い事を思いついたな・・・」

葵「ん？　まぁ、これで目覚めたら本当にどうしようとかも考えたんだけど」

吼太「これって一応『魔法薬』の分類なのか？」

葵「魔法薬だよ。ちゃんと『時間制限』もあるからね」

すると、小さな小瓶を取り出した。
中身の色が見え、薄い青色の液体だった。

葵「こう言うのは、無限書庫にもあるみたいだし。作り方だけど」

吼太「ある意味、感心するんだけど」

葵「普通に吼太だって作れるだろ。デバイスとかその他色々」

吼太「それはそうだかな」

葵「明日は『奴』が来るんだから、仕込みは万全♪」

吼太「制限時間は？」

葵「解除用の薬品は作ってるけど、現状では3時間が一杯かな？」

吼太「ふむ、そうか？」

つぎの日の朝、１２時頃

ライト「たく、地図を渡せって」

今回は、ライト一人で初音島の方に来た。
空間転送で飛ばしても良かったのだが、プラムが居る世界とは次元が違うので仕方がない。

ライト「・・・っと、ここでいいんだよな？」

この前に来た時の魔力が同じだし、間違いは無いみたいだな。
ライトは呼び鈴を押して数秒後。

？？？「は～い♪」

そして出てきた女も子は小さかった。

？？？「・・・・・・おじちゃん、誰？」

ピキッ・・・（ライトの心のガラスに皹が入った音）

しょうがないと思う。

小さい子から見たら、大人は皆小父さんだと思う（遠い目）

葵「ぷらら、どうした？」

ぷらら「葵～、知らないおじさんが青姦しようとしてるよ！！！」

シャル「・・・・・何処でそんな言葉覚えたのかな。ぷららちゃん、奥の部屋で『ＯＨＡＮＡＳＩ』しましょうか♪」

ぷらら「うにゃ、うにゃ～～～～～～～～～～～！！！！！！！！！」

ぷらら、合掌。

葵「よっ、久しぶりだね」

ライト「あんまり遭わないからな」

葵「確かにそうなんだけど・・・・・外で話すのもなんだから中にどうぞ。吼太さんも待ってるから」

ライト「そうする」

葵「ちょうどお昼時だし、昼ご飯が出来てるから食べないか？」

ライト「葵って料理できるのか！？」

何か、鏡が来た時も驚かれていたんだけど。

葵「まぁ、シャルティエが仕事とか宿直で居なかった時は僕が作るけどね」

吼太「よっ、ライト遅かったな」

ライト「吼太はもう来ていたのか？」

吼太「葵を鍛えてた」

葵「あはは・・・吼太さんの戦い方は勉強になりますから～」

何処まで、自分の物に出きるか些か疑問だけど。

ライト「それにしても、これを葵が作ったのか！？」

テーブルの上には、キンピラゴボウにほうれん草のお浸し、魚の煮付け等が並んであった。

吼太「しかも、葵のご飯は電気釜で作ってるんじゃないんだぜ。ガスで作ってるし」

葵「母さんが作ってるのを思い出しながら作ったからね」

ライト「確かに、ガスで炊く飯は上手いって言うのは聞いたことはあるが」

吼太「実践している奴は始めて見たよぞ」

そして、暫くご飯を食べながら話をしていた。

吼太「プラムとエリオはどうなんだ？」

ライト「物凄く仲いいぞ。結婚まで秒読みかもしれないぞ」

それは無いだろう。

結婚は最低でも男性１８歳の誕生日までは結婚は出来ないんだから。

葵「けど、結婚は・・・・・・」

そのとき葵の箸が止まった。

葵「・・・・・年齢が確立していない次元の場所ならありえるな」

吼太「有り得るな」

葵「若しくはデキ婚？」

葵の爆弾発言で全員の箸が止まったのは言うまでもなかった。

～葵Ｓｉｄｅ　ｏｎ～

さて、そろそろ効き始まる量だな。
そして、次の瞬間にライトはかくんって意識を失った。

吼太「さすが、葵が作った薬だな」

葵「確かにそうなんだけどね。作った僕も怖いんだけど」

吼太「この飴って凄いんだな」

そうやって、吼太が舌を出すと小さくなった飴が出てきた。

葵「魔力薬効果無効飴・・・・・・まぁ、これは作らないと色々大変になりそうだからね」

吼太「お、始まったな」

すると、ライトの体が光りだした。

葵「これからが大変なんだよな？」

～葵Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ライトｓｉｄｅ　ｏｎ～

ライト「いつつ、確か俺は、青いと吼太と一緒に飯を食っていたんだが・・・」

飯食ってる時に意識が無くなったんだな。

ライト「あの二人に盛られたか？」

けど、あの二人も普通に同じ物を食っていたし、それはないよな。
暗い部屋を出ようとして立ち上がった。
やけに、服が張ってるんだが。

ぷらら「葵～、何処に行ったの～」

ライト「あれ、ぷららか？」

ぷらら「・・・誰かいるんですか？？」

ぷららは、近くにあった電気を点けた。

ぷらら「・・・どちら様ですか？？」

ライト「いや、どちら様って『ライト・T・テスタロッサ』だ」

ぷらら「ふぇ？　『お姉さん』は女性ですよね。その人は男性ですから違いますよ？」

ライト「俺は女性じゃない！！　胸だって・・・」

自分の胸を覗いた時、唖然とした。

大きくなってると。
そして、着ている服は・・・・・・
『風見学園の制服』だった。

ライト「な、なんだこれはーーーーーーーーー！！！！！！！！」

ぷらら「・・・えっと、もしライトさんだったとして、そんな趣味があったんですか？」

ライト「そんな趣味はねぇ！！」

ぷらら「う～ん、現にライトさんの姿は間違いなく女性ですし」

ライト「・・・・・・うん、ついてなかったしな。今、確認した」

ぷらら「どうしましょう。魔力があるから多分薬かなんかの効果ですし」

ライト「魔法薬か何かか？」

ぷらら「うにゅ～、そこまで良くわからないです。葵なら解るかも知れないですが」

その当人の葵も居ないし、吼太も姿が見えないし。

ライト「しょうがない。この格好で行くか」

その姿で、葵の家を飛び出した。

～ライトｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

吼太「おいおい、飛び出して行ったぞ？」

葵「・・・・・・認識阻害魔法を使っておいて正解だったかも」

二人はタンスから出てきた。

ぷらら「葵、見つけたよ。今のってライトなの？」

吼太「そうだよ」

ぷらら「はいて無かったよ？」

葵＆amp；吼太「マジかよ！！？」

ぷらら「履かしてたの？」

葵「普通に履かしていた。認識阻害魔法の影響か？」

まぁ、このまま危険なので呼び戻してくるか。

そして、その後ライトを回収してからコスプレパーティー（ライトのみ）になったのは言うまでもなかったが。

番外編？：これが癖になったらどうしよう（後書き）

毬藻「俺、色々頑張った！！」

葵「誤字訂正あったら遠慮なく言って下さい♪」

毬藻「・・・・・・ｏｒｚ」

ぷらら「一瞬でしおれたよｗ」

葵「んで、このライトのコスプレ写真いくらで売れるかな？」

毬藻「原価がわからんから、オークション形式で売れば？」

輝羽『それは無理でしょう。レア（？）だから２０００円ぐらいが妥当？』

葵「それぐらいだな？」

毬藻「殴りに来るぞ？？」

葵「大丈夫。全身全霊で殴りに行きますから」

毬藻「火種を作るな・・・あと、コラボ記念として霊亀先生となっぺ先生には葵を貸し出し券（使用期限一回）をプレゼント♪」

葵「ちょっ、ま・・・」

毬藻「好きにしちゃっていいですよ～」

ぷらら「次回から通常に戻ります。次回もお楽しみにです♪」

第十六話：代価（前書き）

さて、本編に戻ります。
タイトルと中身が微妙にあってるか分からないのがｗｗｗ

では始まります。

第十六話：代価

無事に岡山の天地家に到着した。

「先に社務所の方に寄ってくるね」

鷲羽がそう伝えるとそそくさに消えた。

って、よくよく考えたんだけど。

僕の父母の命日は僕の誕生日だから、まだ先の話じゃないのか？

すっかり勘違いしてた。

「一杯食わされたかな？」

ここに居るのもなんだし、僕達は天地家に向かった。

かなり階段を上るのだが、普段運動しなれている三人（士郎・美由紀・恭介）はスイスイ上がっていくけど、桃子となのはは辛いだろうな。

無事に着くと、見知った姿があった。

見知ってるけど、ここで逢う事はないと思っていた。

黄色の髪のツインテールに赤い瞳の少女とオレンジ色の大型の犬・・・いや、狼フォームの使い魔が。

「・・・・・ちゃんと、挨拶するのは初めてだね。高町なのは」

「フェイトちゃん・・・」

鷲羽ちゃん、凄い事を考えたね。

「順序を思い切りぶった切った気がするよ」

僕は、小さく溜息を吐いた。

「俺たちは、席を外した方がいいみたいだね」

恭也は、二人の空気を感じ取り、そう呟いた。

「すいません」

フェイトは、申し訳なさそうにお辞儀した。

まぁ、プレシアが実母の時点でもう崩壊している状態だし。

けど、問題点として二つあるんだが。

最大の一つの疑問が『何でここにフェイトが来ているのかってこと』だ。

誰かプレシア・テスタロッサの接点持ってるマットサイエンティストが居るの・・・。

そう言えば居ましたね、全宇宙のマットサイエンティスト様が。

「フェイトの母さんがちょうど鷲羽『さん』に話しがあるから来ただけ」

そう、アルフが言った瞬間、すきまが開き・・・引き込まれた。

アルフ、強く生きるんだよ～。

「鷲羽ちゃんに相談か。アルハザードへ続く道の事で聞きに来たしか考えが浮かばないな」

その前に、自分の病気を考えて欲しいものだ。

「なんで、その事の相談だって解ったの!?」

フェイトが驚いた表情で聞いて来た。
あ～、そう言えば僕も二人に正体ばれてなかったんだった。

「時空管理局にばらさない様にお願いします」
「!!?　時空管理局のことを知ってるのか!?」

ユーノが驚いた表情で聞いて来た。

「関係あるという前に、2年前にある程度は関係は持ってる状況ではあるけどね」
「二年前の管理外世界の不明の次元震事件!!」

ユーノが驚いた声で答えた。
その前に、正体ばらして良いのかとも思ったが、この話しをしている時点で俺も魔法関係者って言ってるもんだしな。

「・・・その時空震の当事者だよ」
「「えっ!?」」
「なっ!!」

僕の言葉に三人は驚いていた。

「管理者権限」

そう言うと、手にはいつも着けているお面が持たれていた。

「そ、そのお面・・・」
「話は戻すとして、二年前にここで起こった事件で僕の両親は他界。ちょうど事件をかぎつけた天地さんに助けられたんだ」
「ちょっとまった、あの次元震は・・・」

「うん、僕の魔力制御で撃ち出したあの時の最大魔法『流星召喚【メテオフォール】』だよ」
「ぶ、物理召喚魔法・・・」
これは元々は『キャロ』とかが得意分野だね。
「さて、ココから本題だけど、僕はフェイトの方に着くよ」
「「えっ!?」」
その言葉になのはとユーノは驚いた表情をした。
「なのは達は時空管理局に協力して欲しい」
「どうしてなの?」
その言葉に、一瞬考えて。
「僕はこっちでフェイトで二つしないといけない事がある」
「しないといけない事?」
「一つはアリシア・テスタロッサの覚醒もう一つは・・・」
「あ、葵ちゃん!!!」
その時、血相を変えて砂沙美が走ってきた。
「どうしたんですか!?」
「ぷ、プレシアさんが!!」
その時、最後の言葉を聞かずに走り出した。
「母さん!!!」

それに続いて、フェイトも葵の後を追った。

部屋に入ると、大量の吐血をして倒れているプレシアがいた。

「は、早く救急車を!!」

「この量だと間に合わない」

鷲羽ちゃんが治療を開始しようとしていた。

「どいて!!」

僕は、皆を押し退けてプレシアが倒れている場所に近づいた。

「葵殿、いったいなに・・・」
「絶対に死なせない。まだ、向こうにはアリシアさんも居ないのに死ぬなんて駄目だよ」
プレシアに対して両手を翳した。
「僕が使える最大の治療魔法」
すると、光が徐々に集まっていく。
「これ、生命の光？」
そして、徐々にプレシアの顔に血色が戻っていった。
「う、あ・・・私は、一体？」
ゆっくりと体を起こして辺りを見渡していた。
「母さん！！」
次の瞬間、フェイトがプレシアに抱きついていた。
「体も軽い、一体どうして？」
驚いたように自分の体を見ていた。
「葵殿が治してくれたんだよ」
鷲羽がプレシアのパーソナルを見ながら、答えてくれた。

「目の前で、大事な家族を失う姿はもう懲り懲りですから」

僕は小さく笑った瞬間、体がまっすぐ出来なくなった。

「あ、葵くん！！」

天地が後ろから支えてくれた。

「これ使うと、少し眠くなるよ」

そのまま、僕は意識を失った。

数時間後、僕は眼を覚ましてから改めて僕達は居間の方に集まった。

高町家やテスタロッサ家の面々も一緒だ。

「葵殿、言いたい事が一つある」

鷲羽が怖い顔をしながら。

「あの魔法は今後は使う事を控えるように、それも絶対に！！！」

「えっと、何でですか？」

オレンジジュースを飲みながら鷲羽に聞きなおした。

「あれの代価は何か知ってるの？」

「う～ん、考えた事もなかったです」

「葵殿の命よ」

「「「

「今の葵殿は、普通の人生は送れないと思うけどね」
「樹雷の水ですね」

あれは、生命の水とも言われて、かなり寿命が延びるということだ。

「その副作用として、体の反動で倒れるんだけどね」
「ただし多用すると自分を絞める諸刃の魔法だって言う事は覚えておいて」
「わ、分かりました」

自分の寿命、目で見えるものじゃないから本当にあぶ・・・
その時、僕は背中から冷や汗をかいた。
由姫さんを治療した時は生命の水飲んでなかったはず。

「葵殿は離乳食の時から生命の水は飲んでいたから別に心配する事じゃないな」

お母さん、一体何を考えているか本当に分かりません。

「鷲羽ちゃん、この魔法は後一回だけ使わしてください」
「あ、葵殿!!」

その言葉に、鷲羽は驚いていた。

「アリシア・テスタロッサの意識覚醒をしたら、この力は、シャルティエによって厳重封印をしますから」
「え、シャルティエって?」

シャルティエは僕の後ろに立った。

「私は、槻月葵のデバイスです。マスターの意見に賛同します」

「ありがとう」

「その前に、何で私の子供の名前を知ってるの？」

「僕は、輪廻転生（りんねてんしょう）。前世の記憶を持って生まれてきた者です」

その言葉に、天地家以外は、驚いていた。

今日はホント驚いている事ばっかり言ってるな。

「プレシアさん、時の庭園のパスを後で教えて下さい」

「えぇ、ありがとうね」

そう言うと、深くお辞儀をした。

その後は、食事をして、両親の墓に手を合わせた後、一同（天地家・テスタロッサ家以外）は初音島に戻った。

第十六話：代価（後書き）

毬藻「後書きです」

由姫「あんな設定はあったの？」

毬藻「書いてる途中で付けました。流石に、無条件だとヤバいので」

由姫「それにしても、葵くんって人妻キラー？」

毬藻「そんな設定はありません！！」

音姫「次回は、フェイトのお姉さんが覚醒かな？」

毬藻「その次は・・・・・・あんまり評判が良くない黒いＧが出てきます」

黒Ｇ「僕はそんな名前じゃないぞ！！」

毬藻「はいはい、まだ先なんだから出てきたら駄目だよ～」

ぷらら「次回も読んでくれれば幸いです♪」

第十七話：家族（前書き）

物語の流れが安定してない（ー＿ー；）

葵「しかも前回の話から流れが変わってる気がするが・・・」

支離滅裂感が思いっきりありますが時間を見つけて何とかしたいと思います。

第十七話：家族

「葵様、準備はいいでしょうか？」
「僕の方はいつでも良いよ」

僕とシャルティエは魔法の桜の木の前に立っていた。
アルフとフェイトは先に時の庭園に行ってもらってる。
因みに、なのはとユーノはお留守番だ。

「時空転移可能領域の魔力を充填完了」
「さて、帰ったらさくらさん色々説明が待ってそうだね」
「そうですね。話す事はたくさんありますよ」

その前に、大きな仕事をしないといけないな。

「時空転移展開！！」
「空間跳躍！！」

次の瞬間、男の子が次元の裂け目に飲み込めれた。
音もなく静かに、静かに・・・。

《はい、到着しました》

ペンダントに戻ったシャルティエはそう答えた。
僕た着いた場所は時の庭園の玄関口だ。

「着いてんだね」

声掛けた方を見ると、そこにはバリアジャケットを着込んだフェイトがそこにいた。

「うん、座標設定はシャルティエがしてくれたから。案内、お願いして良いかな？」
「いいよ。こっちだから付いて来て♪」

そう言うと、葵の手を引いて案内してくれた。
葵もその手を解こうとはせずに引張られるままに案内された。
そして、奥の部屋に行くと。

「来たね。葵殿」
「いらっしゃい。葵さん」

そこに居たのは、プレシアと鷲羽だった。
まぁ、この人のことだから来れるとは思っていたけどね。

「早速で悪いけど、お願いしていいかしら？」

その答えに僕は、小さく、そして深く頷いた。

そして、生体ポットの中に彼女はいた。
僕には感じ取れた。
彼女の息使いと生きたいって言う【意思】が感じ取れた。

「もう一度、お母さんに逢おう。もう、寂しい夢から目を覚まそう」

僕は、小さく手を翳した。

「毒を浄化します！！」
《生命の息遣い》

白い光が葵の手から浮かび上がった瞬間、それに合わせてアリシアの体から黒い霧が出てきた。
それを、白い球体が無限に吸い取っていく。
最後の一つまで吸い取っていった。
生体ポットから体を取り出した。

「アリシア？」

その体にゆっくりと近づき、小さく体を揺する。
コホゴホを咳をし始めた。
そして、その瞳が開いた。

「・・・・・おかあさん？」
「アリシア！！」

その体を引き寄せた。
その姿を葵が離れた所から見ていた。

「お疲れ様、葵殿」
「うん、僕の出番はここまでだよ。次は鷲羽ちゃんの出番だよ」
「えぇ、だから葵殿は少し休んで」
「えへへ、分かってる」

僕はその言葉を聞いた時に意識が途切れた。
途切れた時に、女の子の声が聞こえた。

【ありがとう】

の言葉で僕の胸は一杯になった。

数時間後、僕はベッドの上で目を覚ましたのだが・・・
隣に金髪の女の子が静かな寝息をたてながら寝ていた。
確か、力を使った後倒れてしまったんだよね?

そこの記憶は存在してる。
しかし可愛いな・・・この子。
って、ちゃうちゃう！！

「う、う～ん・・・」

・・・・・やっぱり可愛いです。
すると、ポケポケとした表情で僕の顔を見つめて。

「・・・・・・んっ♪」

軽く唇を合わせてきた。

「・・・・・・・・・・・はっ！？」

その少女の行動で僕の思考回路は一旦停止。

「私を起こしてくれたお礼だよ♪」

そして、その言葉で誰だか理解が出来た。
――アリシア・テスタロッサ。

「そして、未来の旦那様～♪」

ドタドタドタ！！！

遠くからこちらに向かってるのか音がだんだんでかく・・・

「あ、アリシア姉さん！！！」

顔を真っ赤にしながら、部屋に入って来て、フェイトが大声で叫んだ。

「うふふ～、もう私の『初めて』を挙げちゃったんだから♪」

「な、な、な・・・」

アリシアがそう答えると、フェイトはへなへなとその場に座り込んだ。

初めてって『接吻（キス）』の事だよね？

「・・・・・う～ん、既に奪われた場合どうなるんだろう」

「「えっ！？」」

葵の、何気ない一言に二人は驚きの声をあげた。

そこまで驚く事なのだろうか？

「い、いつなの！？」

「う～んと、なのは・・・・・・」

次の瞬間、空気が凍った。

フェイトって変換は【雷】だよね？

物凄い【霊亀】を纏ってる気が。

違った【冷気】だ。

「「うふふ、この恨みハラザルベキカ・・・・・・」」

「・・・・・シャル、僕なんか拙い事言っちゃったかな？」

《葵様の自業自得と鈍感さから来るものだと思いますが？》

シャルティエに冷静につっこまれると何だろうなと思うんだが？

「って、鈍感ってどういう事だ!!」
《言ったまでの意味ですが?》
「僕は、鈍感じゃないと思うよ!?」

反射神経とか良い筈だし?

《葵様、身体能力のほうではないと思いますが・・・》
「じゃ、何?」
《・・・・・・・・・自分で考えて下さい》

キツイ口調で言った後、シャルティエは黙り込んでしまった。
僕は何も悪い事してないんだけど。

「話は戻すとして・・・」
「「キス?」」
「お願いそこから離れて・・・」

僕がこの部屋に休んでいたのは『アリシア』の『蘇生』が終わったからである。
そう、本当は『アリシア・テスタロッサ』はあの事故で死んでいたのだ。
あの時に感じた意思は、外からのもの。
けど、僕のは力を使って息を吹き返した。
僕が蘇生を行ったと言うので間違いないと感じた。
しかし、それはおかしな事である。

「神様との契約の時に僕は蘇生は出来ないようにするという盟約であの能力が付かない様にお願いしたのに」

《それは、私から説明します》

声が聞こえたと思った瞬間、葵の前の空間が揺らいだ。
そして、現れたのが羽の生えた白い神服を来た女性が立っていた。

「お願いして良いかな。天子さん？」
「えぇ、そのために私は今回貴方たちの前に現れたんですから」

そして、小さく咳き込んで改めて答えた。

「槻月葵さんが使ってる能力は【蘇生術】で間違いありません」
「けど、蘇生術は僕は付けなくて良いよと答えたはずです！！」

「・・・・・クロノス様の大ポカです」

クロノス様？
クロノスって確か、まっくろくろすけの親戚かなんかだったか？

※違います。時間の神様と崇められてます・・・

あぁ、思い出した。

「僕の後ろの神って・・・」
「二人いらっしゃいます。とは言ってももう一方は・・・・・・」

《そう言わないが華ではないかな？》

すると、もう一度時空が開いて一人の女性が出てきた。
女性は勿体無いかな、『幼女』だ。

「それは酷いではないですか！！」

「そうですよ。『ソル様』は幼女ではありません！！　幼子です！」
「そっちの方が酷いぞ！！」

ブロンズ髪の葵よりは少し背が高い女の子。
体は西洋鎧だが、結構露出度がある。
そして、物凄いデジャブかと思ったが僕の思い過ごしではなかった。
彼女は正真正銘のヴァルキリー。
正式名所が【ソル・ヴァルキリー】だ。
作者、何処まで戦闘特化した女子を連れてくるんだ。

※まぁ、ソルは元々出す予定だったよ～ｗ

笑い入れる余裕があるのか？
フェイトとアリシアはまじまじとソルを見ているし。

「僕の魂って、本当に神の気紛れが入ってるんだな」

そこは呆れるしかないんだけど。

「それじゃ、脱線した話を戻して。その蘇生術の代価は分かってますよね？」
「僕の生命力もとい寿命だよね？」
「いえ、違いますよ♪」
「えっ！？　前回のあれとかは一体なんだ？？」

鷲羽が断言した代価じゃないの？
それじゃ毎回毎回、この力を使うと毎回ぶっ倒れるのは一体なんなんだ？

「葵くんの魔力を生命力に転換して命を延ばしてるんです」
「ちょっと待った。もしかして、僕がぶっ倒れる理由って」
「そう。魔力を全部使って相手の生命力に転換してるからよ」

その魔力を調整して生命力に変換できるとしたら。
そして、死者蘇生としての能力ができる。
僕、補助型のチートですか？

「しかも、クロノス様がね。間違って封印不可の設定したから、葵くんが制御するしかないんだけど」
「むやみにわ蘇生しないよ。それじゃ、人の運命まで変えちゃう」

もう既に三名ほどしちゃってますがそれはこの事を知らない状態だったし。

「この魔術を貴方に渡して正解だったかもね」
「神様の封印では無理だけど、シャルティエの五星封印は能力を弱体化にできるわ」
「死者蘇生までの能力は封印。全ての異常回復までは消す事はできるわ」
「シャルティエ、あなたに今後の時間と未来を託します」

そして、二人は消えていった。
その後、シャルティエに五星封印をしてもらった。

「葵殿、この頃さびしくは無い？」
「大丈夫、シャルティエも居るし由姫さんやさくらさん達も居るから」
「無理はしてないよね？」
「今は無い物強請りをしている時間は無いからね。それに、母さん

や父さんは帰ってくるって訳も無いんだから」

血の繋がった家族はもう居ないんだから。
無いもの強請りしてしてはいけないんだし。

「・・・・・もしかして、葵くんの両親は」
「二年前に他界しました。魔法事件で、二人はその事件に巻き込まれて・・・その最後の瞬間は僕は見たんです。母さんと父さんがい息を引き取る瞬間を」

その答えに三人は驚いていた。

「その後、気配を感じた天地殿がその場所に向かう途中で・・・両親を担いで神社に向かってる葵殿を見つけた」

その言葉を付け加えるように鷲羽が言った。

「なるほどね。その冷静さはそこからきてるのね」
「その後、色々ありましたしね」

輝羽とであって皇家の船を手に入れたり、光鷹翼を１０枚展開できたり、宇宙では皇家の名前を受け継いだり、皇位継承権第四位になったり・・・二年で凄い事をしてるな。

「ノイケ殿や由姫殿やさくら殿が養子にしたいといってるがそれも蹴ってるしな」
「あはは、その話しはもう少し待ってください。自分の気持ちに整理を付けたいから」
「その話、私も乗っちゃおうかしら♪」
「・・・・・はい！？」

第四の勢力・・・テスタロッサ家が参戦ですか！？

「そうすれば、葵くんと一緒に居れるし、甘えられるわよ」

「「あっ！！」」

プレシアさん、あんた鬼ですか！？

僕は、この状況を見守るしかなかった。

―次元航行艦　アースラ【ブリッジ内】―

「ここね、最近次元震が観測された場所は」

画面表示では『第９７管理外世界』と表示されていた。

「二年前も次元震があったみたいですがその時は捜査不可という事で切り上げてるみたいです」

モニター越しに女性が報告をしていく。

「今は、内部事情とかが変わりましたからね」
「そうね。では、アースラは現状に留まり捜査を開始します！！」
「はい！！」

黒い服を着た男は返事をした。
この子が後に語られる『まっくろくろすけ』や『ＫＹ』と呼ばれる黒いＧだ。

「ちょっと待て！！　そんな扱いなのか！？」

※空気を読めてないのは事実だし、しかたないだじぇ

「何か本当に扱いが酷いな」

まぁ、そして物語は加速していくのだった。

第十七話：家族（後書き）

毬藻「葵の能力が大幅に変わってしまった」

葵「死者蘇生が入ってくるとは思わなかったが」

毬藻「俺も思う。けど、無理やり方向修正；；」

葵「作者としては頑張った方かな？」

毬藻「次回はリアでは何処の部分になるんだっけ？」

葵「う～んと、８か９ぐらいじゃないか？」

毬藻「黒Ｇが登場したし・・・ここから執筆度が上がれば良いんだけどね（ー＿ー；）」

葵「うん、不可能！！」

ぷらら「感想コーナー♪　悠久の時間さん、なっぺさん、霊亀さん、感想ありがとうございます♪」

毬藻「今回は何をあげようかな～」

葵「そんなものあるのか？」

毬藻「しょうがないからコクーン（聖霊機コア）をプレしちゃいます～」

輝羽「またコアな物を＾＾；」

毬藻「由夢の手料理？」

葵「それは、作者さんを殺す気か！！」

毬藻「姫路さんの手料理？」

ぷらら「それ本当の殺人料理です！！」

毬藻「今回はコクーンですｗｗｗ」

ぷらら「次回もお楽しみに～」

第十八話：管理局登場（前書き）

さてさて、やっと黒Ｇを召喚します～

そして、扱いが物凄く大変ｗｗｗ

第十八話：管理局登場

さて、今僕達は桜公園の高台に来ている。
今回のメンバーはなのは、ユーノ、フェイト、そして僕の四人だ。
アリシアとプレシアさんは今は柾木家の所に行って療養中である。
僕の回復魔法で体力があるといってもまだ油断は禁物だし、それに・・・・・・
時空管理局の人間に『生きてます』っていうのはまだ早いと思うからだ。
それともうひとつここを選んだ理由がある。

「ユーノ、ジュエルシードの気配が分かる？」
「うん、近くにあるよ。けど、覚醒はしてないみたい」

ジュエルシードの捜索でここにあるのは判ってはいるんだけど、覚醒は出来ていない状態。
なので・・・・・・

「なのは、フェイト、模擬戦しちゃっていいよ～」
「いやいや、それは危険だ！！」
「見つけて、覚醒が始まりそうだったら僕が止めるから」

その言葉にハッとした。
僕の持ってる希少能力『ドレイン』でジュエルシードの魔力を吸収するって事だ。

「やっぱりなのはとは・・・・・・」

フェイトがまだ少し愚図っていると。

《この勝負に勝った方は葵様と一日自由にできる券をプレゼントとします》

「「えっ！！」」

「ちょっとシャル！！」

《うふふっ、これは見ものですよ～》

その言葉に、二人を見ると気合充分だった。

シャルティエ、何であの二人はあんなに気合充分なんですか？

「なら、なのは・・・」

「うん、全力全開で勝負だよ！！」

既に和解して友達になった二人は、お互いの過去なども話している。

なのはは、士郎さんの事故の寂しさ。

フェイトは、アリシアの事故の事。

それでも、時期『エース』の二人・・・・・・凄いな。

そして、僕は決めかねていた。

このまま、時空管理局と和解して着くか。

それとも、自分の信念を貫き敢えて個人で今後も事件に向き合うか。

これはどちらもメリット・デメリットが存在するんだけど。

《葵様、管理局が動きましたよ》

そう言えば、俺って魔力変化能力って存在していた気がするんだけど。

一番最初に神様にお願いした能力。

「（なぁ、シャル、僕の魔力数値ってどれくらい？）」

《（現在はＡ－です）》

取り合えず、し最初の設定よりかは魔力が上がってるんだね。

《（その前に、ジュエルシードも覚醒しそうですので対処をお願いします）》

それもそうだ。

「ユーノ、覚醒確認したから止めに行くよ」

「分かった」

「空間跳躍（テレポート）」

次の瞬間、葵の姿は消えていた。

出てきた場所はちょうどジュエルシードの前。

「・・・・・ドレイン！！」

ジュエルシードに手を翳した瞬間、強く放たれていた光が消えた。

「シャル、取り合えず収納して」

《分かりました》

さて、黒Gを召喚しましょうかね～。
僕は元の場所に戻った。

「終わった？」
「上々～。では、時空管理局の局員を呼び出すよ」
《近距離モード展開します》

シャルティエを近距離に転換した。

※挿絵は描けないので想像でお願いします　by.毬藻

その周りにビットが3体浮遊していた。
そして、空気が揺れた。
次にぶつかりそうになった瞬間、黒尽くめの少年が出てきてなのはのデバイスは素手で、フェイトのデバイスはS2Uで止めた。

「時空管理局だ。ここで戦闘・・・・・ぐべあらあがあdぎ！！！」

僕は、懇親の一撃でまっくろくろすけ（黒G）を殴り飛ばした。
そして、水面を弾くように飛んでいった。

「おぉ～、水切りパンチが出来た♪」
《・・・おめでとうございます。葵様》
「「・・・・・・・・・・・・・」」

二人は、何が起こったのか理解が出来ていなかった。

「次は・・・・・・アースラです」

僕は、監視魔法陣を睨んだ。

「・・・・・何、この悪寒？」

「う、動けないよ」

フェイトとなのははその場から動けないで居た。

葵の気魄から動く事ができないからだ。

「き、君は何をしたか分かってるのか！！」

吹き飛ばされたクロノが戻ってきた。

「なにしに介入してきた。時空管理局の狗が・・・ここがお前らが来る世界ではないはずだが？」

―なのはｓｉｄｅ―

「ど、どういうこと？」

「ここは、第９７管理外世界と言われてるの・・・本来なら、管理局はここの介入は実質不可能なはず」

「けど、今は改正されて管理外世界の介入が許されている」

「それが、二年前のあの事件から一年が経過した後」

もしかして、介入が出来るようになった切欠が出来たのって。

「間違いなく二年前の打ち切りにされたここの世界で起こった時空震事件」

―なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

「出しゃばってくるなーーーーーーーー！！！！！！」

空間跳躍で一気に差を詰め寄り、顔面に思いっきりストレートを叩き込んだ。

そのまま、同じく後ろに吹き飛ばされたが、直ぐに耐えた。

「我が唱える１６の刃よ。我が敵を葬り去れ！！！」

《ダーク・ブレイド。発射態勢》

「撃ち放て！！」

葵の周りに展開していた黒い剣が一斉にクロノの方に目掛けて飛んでいった。

「ぐっ・・・」

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

Ｓ２Ｕの自動防御システムにより黒い刃の餌食にならないで済んだ。

「管理局が出しゃばるなーーーーーーー！！！」

防御になっていたクロノの盾を一気に粉砕した。

「なっ！？」

そしてもう一発顔面にパンチを入れようとしたその時。

「そこまでです！！」

モニターが現れ、一人の女性が出ていた。

「時空管理局　アースラ艦長『リンディ・ハラウオン』です。槻月葵さん、武装解除して下さい」

その言葉に僕は驚いた。

何で僕の名前を知ってるんだ？

「それに含めて貴方達にお話しをします。一度、話しをしましょう」

僕は、纏っていた嫌悪感を霧散させた。

なのは達は、小さく安堵の溜め息をはいた。

「解りましたけど、デバイスは預けません。それで構わないのなら貴女の船に招待されます」

しばし沈黙した後。

「分かりました。その条件で構いません」

そして、俺達はアースラに赴くことになった。

第十八話：管理局登場（後書き）

毬藻「あっとがきー♪」

クロノ「扱いが酷すぎないか？」

毬藻「世間一般のクロノの評価だと思うが？」

クロノ「何故、そうなる？」

毬藻「空気読まない人には言いたくないよ～」

輝羽「それを言われたら終わりだね（汗）」

クロノ「船のコンピューターに言われたくないな」

輝羽「……（プチッ）作者～、これ微塵切りにして良いかな？」（無言で光鷹翼を発動）

葵「血と肉と骨をばらまくなよ～。後が大変になるかな」

クロノ「ちょ…まっ……」

毬藻「クロノ……乙（汗）」

ぷらら「じかいもおたのしみに～♪」

第十九話：母の想い（前書き）

毬藻「何か執筆中に【Ｓｔａｒｄｕｓｔ　Ｄｒｅａｍｓ】を聞いてると涙が出てきた：；」

葵「重症か？」

毬藻「分かんない。それでは、始まります：；」

第十九話：母の想い

僕は、アースラに着いたがいまだに釈然としない部分があった。
何で、時空管理局が僕の名前を知ってるって事だ。
事前に繋がってそうなのは『樹雷の鬼姫』とか『マッドサイエンティスト』なんだどうが。
樹雷に居たときに少し時空管理局に繋がっていると聞いた事があるし。
そして、ブリッジに行くと・・・。

「来たね。葵くん」
「待っていたわよ」

そこに居たのは、予想外の人物たちだった。

「えっと・・・、さくらさん、由姫さん、何でここに居るんですか!?」
「なんでって、友達に会いに来たんだよ」
「私も、同じかな。職場の元同僚さんよ」

その言葉に、僕は頭を悩めた。
ここ、管理外じゃないのかよ、時空管理局の。

「本来はね。この世界は『管理局』じゃなく、個人で護られていたのよ」
「個人？」

その言葉に、俺は驚いていた。

「その人の名前は『柾木（まさき）　美津那（みつな）』さん、元管理局のストライカーの一人でデバイスを使わない戦い方で不気味にがられて居たけどね」

ちょっと待て、柾木ってまさか！？

「今は、槻月　美津那と名乗っていたはずよ」

「うん、そして私達の『先輩』になるのかな？」

「美津那先輩がご近所になった時、何で気がつかなかったんだろうね」

「・・・・・・多分、鷲羽ちゃんの催眠か何かだと思うよ。そこら辺は、宇宙最強ですから」

「かあ・・・・・・艦長、どういう事ですか！？」

「簡単に言うとね。葵くんは『ブリュンヒルデ』の子供さんって事かな？」

その言葉に、クロノは驚いていた。

「ヒルデって・・・確か、戦乙女の一人の名前でしたね？」

『ハガル』のルーンの所持者だった気がするんだけど。

「天災とかの言葉を思い出したんだけど」

災難とか嵐とか色々な言葉が出てくるよ。

「けど、先輩は定年まで仕事してましたからね」

「そう。定年まで・・・・・・！？！？」

そこまで言って三人が固まった。

「確か、美津那さんが管理局の仕事を辞めたのが７０歳の時」

「その後は、調理師免許を取って三ツ星レストランで料理長してる

って言ってて」
「時哉さんと出会って結婚して・・・・・・」
その答えと同時に僕の方を見た。
「子供を一人授かったって嬉しそうにしてたよね？」
管理局定年って本当に何歳なんですか！？
「あの人の武勇伝とかもあるしね」
「そうですね。デバイス展開しないで不思議な武器で殲滅してましたからね」
「そうね・・・・・・私達は【光剣】とか言っていたし」
母さん、何か凄いね。
そして、僕はある一フレーズが気になった。
「光剣？」
「えぇ、あの人は手から【光の剣】を出す事が出来たのよ」
その答えにピンと来た。
母さんが使っていた剣はこれだね。
確信した僕は手から剣を出した。
正確には【翼】を【剣】に作り変えたという事だ。
「こ、【光剣】！？」
作り出した剣を見て驚いていた。
「一体どうやって・・・・・・」

「特殊な皇族と一部の人が持ってる力【光鷹翼】を剣に変えて展開しただけです」
「なんと言う出鱈目な・・・」
クロノは驚きながら剣を見ていた。
魔法という言葉が定着してると他の所からは見えにくいからね。
「話を戻していいですか？」
僕は一回ため息を吐きながらリンディ提督に聞いた。
「ここに来て貰った理由は二つです。一つは、貴方の事についての事情を聞きたかったし、これ以上息子を痛め付けられるのも見たくなかったしね」
その言葉としては通りではあるな。
「もう一つは、謝罪です」
すると、リンディ提督は深く頭を下げた。
「二年前の事件の事、あの時は私達はこの世界の近くに居たの」
頭を下げながらそう答えた。
「・・・・・理由を聞いていいですか？」
僕は静かに聞いた。
「本当は命令違反になろうとしたけど、先輩に止められたの」

「えっ！？」

その言葉に、僕は驚きを隠せなかった。

「母さんが？」

「その時の言葉が『もう直ぐ、私の子供が助けに来てくれるの。それまでは踏ん張らないといけないからね。それに、時空管理局のここを管理外にした私の責任でも有るしね』と言われては流石に行けなかったわ」

僕は、その時に理解できた。

母さんは自分が死ぬのを理解で来ていたんだ。

「では、その時の一部始終は？」

「えぇ、しっかりと記録してあるけど、提出はしてない。そして、その一年後に改正して管理外世界にも特例で行ける様になったのよ」

そして、リンディ提督はポケットから琥珀色の宝石を取り出した。

「艦長、それは？」

「葵くんに渡すものだと思うわ」

思うわって・・・・・。

「これは、先輩が定年する時に【預かって】言われたものよ。そして【貴女の子供を殴り飛ばした子供に渡して欲しいの。多分、その時は時空管理局を毛嫌いをしてると思うから】ってね」

「「「なっ！？」」」

「い、言い当ててる」

さくらさん達もそして、フェイトやなのはも驚いていた。

「そして、あなたが私の子供を殴り飛ばしたからその権利はあるでしょ？」

そう言って、宝石を受け取った。

《プロテクト起動。認識遺伝子照合・・・・・・遺伝子データに【柾木　美津那】のＤＮＡパターンが一致する部分を発見。プロテクトを解除します》

すると、ホロプログラムの女性が出てきた。

それは、少し若い・・・・・・。

「母さん！？」

『うん、初めましてだね。未来の私の大切な宝石【葵】』

「「「「「「「「「えぇっ！？」」」」」」」」」

『多分、これが起動してるって事は私はもう死んでるって事は理解してね。他の世界からの通信とかじゃないからね♪』

「けど、何で名前が分かるの？」

確かにそうなんだけどね。

『由姫ちゃんが驚くのも分かると思うんだけど、樹雷の力が発動した時に自分の死ぬ場所は見えたのそこまでの未来もね。んでもって、由姫ちゃんが居るかもな～って言う事は【勘】だから悪しからずw』

って言うか変わってないな。

『取り合えず、まずは今知りたいと思う事をいうわね。一つ目は、記憶の事。これは、あなたが初期に考えたとおり私と鷲羽ちゃんが二重に封印したのよ。そのプロテクトが外れる要素は【私の死】にして貰ったの』

だから、急に【天地無用！魎皇鬼】の事が思い出されたのか。

『だから、葵ちゃんが着く時には私はもうこの世の住人ではないと思うの』

その時、美津那が暗い表情になった。

『ずっと、心配させてごめんね。私は、駄目な母親だったかもしれないけど』

そして、目から涙を流していた。

つぅーと、ほほに何かが通った。
そうか、僕も泣いてるんだ。

『私、【槻月　美津那】は未来の子供・・・・・・【槻月　葵】の事は世界のどん・・・な、どんな世界よりも大切・・・な・・・・・・宝石・・・・・・・・・・だよ。』

そう言って、ゆっくりと手を伸ばしてくる。

『この手で今触れてあげたい。ギュッて抱きしめてあげたい・・・・・私はまだ生きたかった!!』

最後の本音を叫んだ。
そして、涙を拭いて見えない息子に。

『だけど、変えられないかもしれないけど私は足掻くよ。私だって葵ちゃんとコスプレもっとしたいんだから!!!』
「って、本音はそこなの!?」
『そ、どんな子かって言うのは分かってるからね~。だから、最後に遺言!　母さんの事は忘れなくても良いけど、それを踏まえて一歩を踏み出しなさい!!』

その目は真剣にそう伝えた。

「はい!!」
『さて、次は多分ジュエルシード事件が起こってるけど、これはプレシア・テスタロッサ及び家族の逮捕は冤罪になるので逮捕はしないで!!』

その言葉にリンディさんは驚いていた。

『それと、ジュエルシードは葵ちゃんに渡して。これは、この過去での決定事項で纏まってるから渡しても問題ないはず。それに、娘さんの【蘇生】は葵ちゃんがしてると思うから』

そう言って、ウインクした。

「エ、エイミィ？」

「い、今のことを確認をした所、確認が取れました。しかも、最高重要指令としてです」

「流石、柾木総帥です」

母さん、本当に何してるんですか？

『この宝石にジュエルシードの微弱の魔力を感知できるプロセスを組み込んだからアースラと協力者の魔導師と葵ちゃんのデバイスに組み込んで！！』

母さんは見えないはずなのにそこに居るような感覚で指示をした。

『さて、お膳立ては済んだし、後もうひとつ』

そして小さく微笑んだ。

『最後に大変な事があるかもしれないけど、そこに居る皆を信じなさい。これが母親として最後の言葉よ』

「うん、分かった」

『さて、そろそろ時間みたい。頑張ってね』

そして、映像は消えた。

「葵様？」
「うん、大丈夫。僕は踏み出せると思うよ」
止まっていたら、母さんに怒られるからね。
「ジュエルシードの回収を優先させます。三人ともいいですね？」
「「「はい！」」」
そして、アースラは慌しく動き始めた。
―？？？ｓｉｄｅ　ｉｎ―
「ふぅ～」

「どうだった？　息子の成長見れて」

そこには天子と・・・・・・・

「えぇ、もう堪能できちゃった♪」

先ほどの女性・・・・・・【槻月　美津那】がいた。

そう、先ほどの映像は過去からの映像ではない。

天界からリアルタイムで話していたのだ。

「けど、良くあんな物が作れましたよね？」

「私の友達に全宇宙（多重次元も可）の天才科学者が居るからね」

「あの涙は本物？」

「愛する子供の前で嘘泣きする親は居ませんよ？」

その言葉に小さく笑い答えた。

「親になれば解るわよ♪」

「・・・・・・ハガル様、卑怯です」

天子は頬を膨らませながら抗議した。

「早くしないと【あの子】が取られちゃうわよ？」

「そ、それはもっと嫌です！！」

その言葉にクスクスと美津那は笑っていたが小さく溜息を吐いた。

「・・・・・もう少ししたら【もう一人】が意識が復活する。私は何も出来ないけど」

「・・・・・大丈夫です。葵ちゃんは乗り越えると思いますよ。

絶対に」

「今は信じましょう。あの子達を・・・・・・」

第十九話：母の想い（後書き）

毬藻「何か頑張ったら、変な事になった」

美津那「変な事って何なのさ？」

毬藻「いやぁ～、だって【マトモ】なキャラになったし？」

輝羽「元々は違ったの？」

毬藻「美津那さんのイメージキャラは【がぁーでぃあんＨｅａｒｔｓ】の主人公の母さんみたいなイメージだったんだけど？」

美津那「面白おかしくひっかきまわすさぁ～♪」

毬藻「そのイメージが今回の消えたんだけど？」

美津那「愛息子にそこまではしないわよ」

毬藻「だから今回は少しはマトモになったんだし？」

輝羽「しかも【ブリュンヒルデ】はびっくりしました～」

毬藻「この設定は製作中に存在していたし、【シゲル】が出たんだから【ハガル】を出さないといけないからね～」

輝羽「【シゲル】や【ハガル】って何？」

毬藻「ルーンの事だよ。ほら、タロット占いで使う記号の事だよ」

美津那「【ハガル】は・・・・・・」

☆ハガルのルーンについて☆

嵐のルーン

嵐や雹など、自然界の避けることの出来ない災害を表すルーン。そこから予知できない、避けることの出来ない不運、宿命を意味する。このルーンを引いた時は、それまで順調に進んでいる計画も急なアクシデント等で頓挫する可能性が高い。例え自分に非が無くともトラブルが勝手に進行し、いつのまにか巻き込まれていることもある。

タロットで言えば『塔』に近いが、塔よりも絶対的な力を持っている感じだ。

なにより『塔』は破壊の象徴だが、ハガラズは破壊だけではなく予期せぬ幸福も表す。

例えば、仕事で予想外の昇進をしたが昇進後のポストで激務が続き人間関係でも苦労する。

等の事象もハガラズの告げる範囲内である。

ハガラズを引いた後は、いずれやってくる嵐を怖がらずに受け流していくこと。

嵐の後には従来型の安定した世界が破壊され、新しい世界が現れる。そこに新しいチャンスが生まれる。嵐の影響力を利用出来れば、今まで以上の成長が期待出来る。

ハガラズには逆位置は無い

毬藻「ゲルマンルーンとエルダーイングリッシュルーンの二つの呼び方があってゲルマンの呼び方が【ハガラズ】でエルダーが【ハガル】だよ」

☆シゲルのルーン☆
太陽、勝利のルーン
このルーンは太陽を表す。太陽の光や尊厳を象徴し、このルーンを引く人に希望と勝利を与える。また太陽は生命力の象徴でもあるため、このルーンは健康の象徴でもある。
光のルーンはソウイルの他にカノがある。しかしカノがコントロール可能な人工の光なのに対して、ソウイルの光は人が扱うには強すぎるものである。そのため、ソウイルの力が強すぎる場合はオーバーワークする危険性がある。
ソウイルには逆位置は無い。そのためにソウイルの影響が良い方向で出るか、悪い方向で出るか単独では判断しづらい。そういう場合は複数のルーンを引いて総合的に判断する事。
フェイウーやラグズと一緒に出る場合は仕事は成功するが、その結果非常に忙しくなるかもしれない。逆にナウシズやイサと一緒の場合は将来活動するために、内部でエネルギーが溜まっていくだろう。その結果、ストレスが非常に溜まりやすくなる事などに注意が必要である。このように逆位置の無いルーンは、単独で判断が難しい場合は他のルーンとの関連で読んでいく必要がある。

毬藻「ゲルマンは【ソウイル】でエルダーは【シゲル】ですね」

輝羽「という事は？」

毬藻「葵についてるのは予期せぬ幸運の勝利か、災害をも打ち砕く希望とかかな？」

美津那「流石私の息子♪」

毬藻「今後どうなるかは気になるけどねｗ」

ぷらら「ではでは、じかいもおたのしみに～♪」

第二十話：回収、そして・・・（前書き）

葵「毎回毎回、展開が早いな＾＾；」

毬藻「そこは人生色々でｗｗ」

第二十話：回収、そして・・・

僕達は、アースラに搭乗してジュエルシードを回収していった。
それにしても、母さんはどうやってジュエルシードの波長を終える装置を作ったのかが物凄く疑問だけど。
その事を由姫さん達に聞いたら帰って来た言葉が一つ。

『美津那さん（先輩）だから仕方がないよ（ですわ）』

という事らしい。
母さんは、本当に何者なんだろうと思うよ。
それと、学校の方だがさくらさんの計らいで・・・

「みんな～、さくらの算数教室始まるよ～」
「せんせ～、そのネタ古いと思います！！」
「槻月君は特別問題、円周率を２０００数を黒板に書いてね♪」
「いやいや、出来るけど無理です！！」
「・・・・・出来るんだ」

さくらさんが特別授業をしてくれてる。
基本は、なのはとフェイトがジュエルシードを封印して僕に渡しようにしている。
こうすれば二人の魔力強化にもなるしね。
それに空いた時間は僕やシャル、さくらさんや由姫さんが二人に魔法を教えている。
僕も教えてといったんだけど。

「う～ん、葵くんに教える事ってある？」
「葵くんの戦闘スタイルは『オールマイティ』でそれ自体も完成系といっていいほどだし」

結論：教えることはない。

だそうです。
自分で技の鍛錬しておこう。

そして、数日が経ち残るジュエルシードは６個になった。
俺の記憶が確かであれば。

「エイミィさん、残りのジュエルシードは見つかりましたか？」

アースラの艦橋にカフェオレを持ってエイミィの所に来た。

持っていた、コップを渡した。

「うんん、検索にも引っかからないのよね～」

ちょっと、御冠れになっていた。

「・・・・・もしかしたら、地上じゃなく水中ってオチはないかな？」

「えっ！？　そっか！！」

その言葉にものスピードでコンソールを叩いていく。

「見つけた！！　ジュエルシード５つ」

その言葉に違和感が覚えた。

普通無印の原作では海中に【６個】のジュエルシード存在する。

けど、今回は考えない方が良い。

「僕も出ます。二人だと何か無茶しそうですから」

「分かりました」

「葵くん、気をつけてね」

さくらさんたちが、不安そうに僕を見ていた。

「大丈夫です。帰ってきますから」

「葵、行くよ！！」

僕達三人は、アースラの転送で高高度に・・・・・。

「落ちる！？」

僕達は、落ちていったけど不安はない。

「行くよ、レイジングハート」

「バルディッシュ」

「準備は良い、シャルティエ？」

《Ｙｅｓ，ｍｙ Ｍａｓｔｅｒ．（Ｙｅｓ，ｓｉｒ）（はい、我が主（マスター））》

それぞれのデバイスを握り締めた。

「「「ｓｅｔ ｕｐ」」」

三人は、バリアジャケットを展開しデバイスを展開した。

「本気作業。シャル、擬似リンカーコアアクセス！！」

《シリアル？・？を媒体にします》

僕の中に魔力が流れてくるのが分かる。

暴れそうになる魔力をゆっくりと調律していく。

「さて、今回の作戦は僕が５このジュエルシードを覚醒させるからその後は二人の魔法で一気に封印で行こうか♪」

「それだと、葵ちゃんが負担が！！」

「二人は封印に全力を注いで、僕がする今の【仕事】だから」

そう言って、二人に微笑みかけた。

そして、再度ジュエルシードが眠る海を見据えた。

「シャルティエ、どでかいの一回行くよ！！」

《えぇ、空間固定結界と時間凍結結界の二重魔法展開！！》

すると、僕たちの周りがモノクロになった。

この景色は、元々【神速】を使う時に見える景色なんだけどね。

「・・・夢幻書庫使用権限発動！！使用作品【Ｐｒｉｍａｒｙ～Ｍａｇｉｃａｌ★Ｔｒｏｕｂｌｅ★Ｓｃｒａｍｂｌｅ～】使用キャラ選択【ライム・ルナ・オクレイン】変換武器【リュカオン】」

すると、シャルティエの形が鎌みたいになった。

「封印した【魔法】を呼び起こします！！」

僕は、杖を海に向けた。

「復讐の女神、ネメシスよ我と我が祈りを聞き天蓋を揺らせ！」

２年前は、気と魔法の掛け合わせた力を使わないと撃てなかったけど、今回は。

次第に、リンクしているジュエルシードが踊りだす。

「・・・・・天に満ちる幾千の星よ。我が求めに応じて来たれ、天蓋の欠片っ！　流星召喚、メテオフォール！！」

上空から魔法陣が現れた。

空に描かれている魔法陣は５つ。

「い、移転空間魔法！？」

フェイトとなのははその魔法に驚いていた。

今はまた見たことない、大掛かりな召喚魔法なのだから。

「貫け！！」

その言葉と同時に、海面と衝突した。

『ジ、ジュエルシード・・・５つ起動を確認したよ』

エイミィの声で二人は我に返った。

「なのは！！」

「うん！」

二人は、得意の魔法。

フェイトは【サンダーレイシ】

なのはは【ディバイン・バスター】

それぞれ展開した。

「「シュート！！」」

黄色とピンク色の光が交差して。

光がゆっくりと晴れると５つのジュエルシードが現れた。

「シャル」

《はい、ジュエルシード全２１個回収しました》

ちょっと待った！！

「どう考えても今ので【２０】個しかないんだぞ」
《うふふ、まだ気がつかないんですか？》
シャルティエが怪しく笑ってきた。
《元々持っていたんですよ。貴方の中に♪》
「えっ！？」
《バカな主様♪　今まで気がつかないんだバカなんだから～》
パリンと空間が砕けた瞬間、体が動かなくなった。
「・・・・・・！！！！！」
嘘だろ、口が動かない！？
《貴方の人格は私が貰います。だからバイバイ、お人好しのバカな主様》
その言葉と同時に、僕の意識が遠のいた。
―なのはｓｉｄｅ　ｉｎ―

さっきから、葵ちゃんが動かないんだけど。

「あお――――「なのは、行ったら駄目!!」えっ？」

フェイトの声で止まる。
次の瞬間、光が頬を掠めた。
そして頬からは赤い雫が流れた。
それをしたのが葵ちゃんだった。

「え・・・」

私は理解が出来なかった。
葵ちゃんが私に攻撃をした？

「葵・・・ちゃん？」
「ふふっ、違いますよ。マスターはいなくなりました」

その異質な含み笑いで、二人は戦闘体勢の【形】を取る。
けど、出来ない。

「そんな心構えでは・・・死にますわよ!!」

【神速】

「えっ！？」

一瞬に間合いを詰め寄り。

「バイバイ、高町なのはさん♪」

【小太刀二刀御神流　薙旋】

「くっ！？」

【小太刀二刀御神流　射抜】

「がはっ！？」

その痛みは来なく、そして聞こえてきたのが。

「高町さんにフェイトさん、大丈夫だった？」

そこに居たのは。

「流くん？」

「桜内くん！！」

そこに居たのは、小太刀を持った桜内流くんだった。

『ふぅ～、間一髪でしたね』

「間一髪というよりか紙一重だった気もするよ」

モニター越しに女性が映った。

『流様』

「話は後にして、葵を正気に戻さないと」
『流様、あんまり時間魔法を使わないようにしてくださいね。代価が出ますから』
「その要求は却下する。シャルティエ＋葵の体だぞ。使わないと俺が死ぬって」
『・・・葵さんですし、何とか時間を稼いで下さい』
「まったくかったるい」

流くんが、悪態を吐いて溜息をついていた。

『時間がないので簡単な説明です。二人は流様のサポートを御願します、そうすれば、戦況は変わるはずなので』

フィーナは、用件だけを簡単に伝えた。

「葵ちゃんに攻撃は！！」
『牽制だけでいいです。それに、葵さんはまだ大丈夫ですので御願します』
「なのは」
「うん、まだ助かるってことだね。なら、私は諦めない！！」

―なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―流ｓｉｄｅ　ｉｎ―

啖呵はきったけど、正直何処まで持つかは分からない。
バグとチートの戦いだぞ。
違った、【一般人と異形】の戦いだな。

「うふふっ、貴方に私を倒せるんですか？」
「まっ、やって見ないと分からないけどな？」

俺は、小太刀を構え対峙した。

「フィーナ、魔力炉リンク！！」
『許可します。魔力供給開始します！！』
「身体能力開放１００％！！」
『全リミット解除確認！！』
「魔術師協会『ラクト』朱雀支部『紫月』艦長『桜内流』ジランス祭司・・・・・貴方を無力化する！！」

―流ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

【お願い、早く見つけてください】

第二十話：回収、そして・・・（後書き）

毬藻「うん、頑張った～」

ぷらら「凄く満足げなんですけど」

音姫「ルーン・バレット！！」（火炎広範囲型魔法）

毬藻「うぎゃ～～！！」

杏「音姫先輩、それじゃ甘いですよ・・・」
毬藻の目の前にくる。

杏「・・・麻酔無しで全ての歯をペンチで抜くわよ♪（黒笑）」

二人「・・・・・・・・・・（汗）」

杏「まぁ、嘘だけど」

三人「（あの目は本気だった（よ）！！）」

音姫「何でこうなったの？」

毬藻「二通りの話はあったんだけど、デバイス崩壊がどうしても出来なくなって、こっちになった」

ぷらら「壊すって事は？」

毬藻「シャルティエの強化案に繋がる。なっぺ様のトゥードにはな

らないけど（汗）」

音姫「あれは、異常だと思うけど・・・」

毬藻「行けるとしたら、単独で多重世界（平行世界）や上位世界（神々が居る世界）に行くぐらいだし」

輝羽「それでもおかしいと思うんだけど単独でいけるのは（汗）」

音姫「それに最後のは？」

毬藻「次回の伏線w。ちゃんと分かる様にしてるから」

音姫「まだまだ、コラボは募集しています」

輝羽「出したいキャラと出演内容を教えて下さい。最大限に書くように鞭打ちますw」

毬藻「ちょっ！！？w」

ぷらら「では、次回もお楽しみにです♪」

第二十一話：未来の【ＩＦ】の世界と真摯な願い（前書き）

毬藻「今回は最多です」

葵「ある意味、あれだったｗｗ」

毬藻「多分、今回初でこんな長いのを書いたよ」

ぷらら「それでは、始まります」

第二十一話：未来の【ＩＦ】の世界と真撃な願い

ユサユサ・・・・・・
誰かが僕の体を揺らしてる。

「・・・て・・・・・・・ちゃん！！」

駄目だ、この揺らし方だと夢心地だ。

「も・・・・・・しゅだ・・・・・・・・・・ね！！」

むぅ～、殺気が・・・・・・。

ザクッ！！

夢心地の中、無事に回避できた。
そして、僕が寝ていた場所には【槍】が刺さっていた。

「絆（きずな）～、僕のベットに方天画戟（ほうてんかげき）を突きつけるのは止めてくれないか？」

「それは、葵兄さんが起きればそんな事しないよ～」

風見学園に制服を着た妹【槻月（きつき）　絆（きずな）】である。
とは言っても、僕達は【双子】である。
二卵性双生児ではなく一卵性双生児である。
しかもかなり特殊な方である。
意味が分からない人はお母さんもしくはグーおじさんのサイトで

検索してみよう。

「双子なのに何で早く起きれないのかな？」

「あ～、分かった分かった。着替えるから早く部屋を出て行ってくれ」

「はーい」

そして、部屋を出て行く。

まったく、誰に似たのやら。

制服を着替え【シャルティエ】をポケットに入れて下に降りた。

「お、起きたな」

「おはよう、葵ちゃん・・・・・・も～、葵ちゃんの制服はそっちじゃなくってこっちでしょ♪」

そして、母さんが制服を取り出す。

男子制服ではなく女子制服（分校用）をだ。

「絶対に着ません！！」

「とは言っても、一回着てくれたんだもんね～」

「ねぇ～♪」

そこのお二人さん、ニコニコしながら会話していた。

少し前、とある事情（雪の策略）で着ざる得なくなったのだ。

下は、スースーするしもうあんな思いは嫌だ！！

「ご飯早く食べないと遅刻するわよ」

「うわっ、ホントだ！！」

「まだ余裕あるよ？」

僕は、席に座ってご飯を食べていた。
やっぱり朝はご飯と味噌汁と鮭の塩焼きだよね。

「って、音姫さんや由夢ちゃん達が待ってるんだから私達だけならまだ【余裕】の時間だけどね」

それもそっか。
急いで食べ終わり、玄関に置いてあった鞄を持った。

「母さん達は今日はいつも通り？」
「父さんは士郎さんの所だ。次の仕事の打ち合わせな」
「母さんは、岡山の方だけど輝羽ちゃんに送ってもらうから今日中に帰ってくるわ」

その言葉を聞いて、僕は一回頷いた。

「お父さん、お母さん、行ってきます～」

僕達は、外に出るとさくらさんの家から四人が出てきた。

「義之に流、おはよ～」
「おはようございます。由夢さん、会長さん」

会長さん・・・絆が指すのは音姫さんの事だ。

「おはようございます。絆お姉ちゃん」
「おはよ、絆ちゃん」
「時間もないことだし、そろそろ行こうか」

女性三人が前で男性三人は後ろを歩いていった。

「そう言えば、昨日の深夜番組見たか？」
「あ、見た見た。あのお笑い芸人は体を張り過ぎだよ」
「そこがまた面白いんだよな」

昨日の深夜番組のことを話していると。

「おっす、義之に流、葵！！」

ちょうどバス停にバスが着いたのか？
杏や茜、バカが降りて来た。

「ちょっ、バカは酷くねいか？」

訂正、お調子者が降りて来た。

「そこのチビ、勝負しようか？」
「・・・・・イキジゴクガイイミタイダナ？」

黒いオーラを個人にぶつけた。
そのぶつけた人物は言わずもながらだが。

「す、すいませんでした」
「渉くん、弱すぎだよ・・・」

茜は呆れながら答えていた。

「仕方ないわよ茜、葵に喧嘩を売るのが間違いなんだから」

冷やかな目で渉を見ていた。

「ま、学園では【氷狼（フェンリル）】とか【影の執行者】とか言われてるからね」
「私のお株を取られそうだよ・・・」
後ろから、声が聞こえて振返って見ると・・・。
「おっはよ」
それはそれは綺麗な笑みを浮かべて、仁王立ちしているまゆき先輩の姿があった。
「まゆき、おっはよ～」
そう言いながら、音姫さんや他の人たちに挨拶していった。
「葵兄さんのレジェンドの逸話は事欠きませんから」
絆は、さも当たり前のように答えた。
「一番凄かったのが、最近あったアレですね」
「あ～、【アレ】ね」
まゆきと絆の言葉で皆が納得した理由。
あ～、あれはもう記憶の底に封印して言いと思うが。
「風見学園の女子制服を着た葵ちゃんが不良の生徒１０人を倒して、風紀員に差し出したアレだね！！」
茜が思い出した様に言い放った。

「あれはホントびっくりしたわ。一瞬、何が起こったのか理解できなかったからね」

呆れながら、まゆきも話していた。

「体に打撲を残さないで、意識だけを飛ばすなんて・・・ね？」

呆れながら絆も言う。

とは言っても、この方法は【絆】も使える方法だし。

絆も多分だが同じ事するだろうしね。

「そういえば、何で女子の制服を来ていたの？」

「あ、私もそれ聞きたいです♪」

お願い、その事は・・・・・・。

って、絆は知ってるだろうが！！

「学園祭の出し物での調整で・・・・・・」

「そのまま、葵くんのコスプレ大会になったんだよね～」

何か、学園祭は【貸衣装】をするって事になってそれぞれの作る衣装の参考をするって事になった。

その参照になったのが僕と絆だ。

「義之と流が言わなければ、普通の学園生活が過ごせたのに」

【それはない】と全員が突っ込んだのは言うまでもない。

「その最後が葵くんの風見学園制服で丁度チャイムが鳴ったんです」

「その時に、本校の先輩が呼び出して・・・・・・」

「体育館倉庫に呼び出されたって事です」

あれは絶対に僕ではなく【絆】を呼び出そうとしていたんだろうな。

「二人とも普通に間違えるからな。制服が違わなければパッと見てどっちがどっちか分からないしな」

そして、話している内に風見学園の正門が見えてきた。

「それじゃ、皆また後でね～」

「頑張れよ♪」

そう言いながら、二人と別れ教室の方に向かった。

階段の所で由夢と別れた。

まぁ、義之たちと同じ教室。

というか、このメンバー全員は同じクラスだ。

まゆき先輩に言わせれば【取り締まるのが楽になった】と呟いていたのは内緒だ。

因みに、もう二人ほど問題Ｊ・・・一人だな。

「早いな、杉並」

「早くは無いが、いろいろ仕込があるのだよ」

その仕込みに着いて激しく聞きたいんだが。

「ふむ、企業秘密だ」

あらかたこの時期だと学園祭の仕込だろうな。

「まぁ、良いか。【学園人気投票】の結果はどうなってる？」
「こうなってる」

そう言って、小さな紙切れを僕にくれた。
そして、渡された紙を一瞬で見た後に木っ端微塵に切る。

「ま、予想道理だな・・・・・・」
「なぁ、流と葵の何処に投票したんだよ」
「それを教える権利は無いな」
「そうだな」

まぁ、何で教えないかは理解してくれ。

「葵と流の投票した場所は確実に鉄板だからな」

という事だ。
教えると、大変なことになるからだ。
僕と流の投票したクラスは教えられない。
確実に【優勝】する場所なのだから。

※葵と流は未来視とホロスコープツリーが見れるので答えられません。

「さて、そろそろ先生が来るみたいだしな」

すると、先生が入ってきた。

「まず、出席を取りますので返事をお願いします。間くん・・・」

そして、朝のＳＨＲ（ショートホームルーム）がスタートした。

「皆さん居ますね。連絡事項は特に有りませんが、学園祭の準備中に怪我が無い様にしてください」

それから、程なくしてＳＨＲが終わった。

午前中の授業が無事に終わり、昼休みになった。

杉並は・・・・・いつもの事だ。

「ねぇ、義之たちはお昼どうするの？」
教材を机の中にしまってる時に小恋が話しかけてきた。
「今日は弁当だけど、義之たちもか？」
「あぁ、流が挑戦したい弁当の料理があるからって事でな」
そう言って、鞄から弁当を出そうとするが。
・・・・・あれ、物が当らない？
鞄を持ち上げて再度鞄の中を覗き見るが。
「あれ？　入ってない・・・・・・」
いつも存在するものが存在していなかった。
「おいおい、忘れたのかよ？」
丁度、購買部から戻ってきた渉が聞いて来た。
「・・・・・そうみたい。今日は購買かな？」
しかし、スタートダッシュに遅れてるからまともな物は売ってないだろうな。
「はぁ～」
溜息を吐いたとき、コトッと音が鳴った。
「葵兄さん、忘れ物だよ」

頭に当てられた物を手に取ると、それは今日のお昼の弁当だった。
「テーブルに置いてあるの忘れてるんだから。ちゃんとしてよね？」
「うぅ～、ありがとう絆～」
涙目でそれでもって上目遣い。
「うっ・・・・・・／／／」
血の繋がった妹でも効果抜群でした。
「こ、今度からは気を付けて下さいね？」
「ありがとう～」
「ねぇ、絆」
不意に、杏が絆に聞いて来た。
「何、杏？」
「葵を持って帰って良いかしら？」
「へっ？」
その言葉の発言で手に持っていた弁当を落っことしそうになった。
「杏、何を考えてるんだ！！？」
「今の表情をされて、言わないと損かと思って」
「た、確かに・・・」
その言葉に、茜が合意した。
いやいや、合意したら駄目だろ。

「はいはい！！　なら、俺が持って帰る～」

元気よく手を上げて、渉がお持ち帰りしようといったが。

【絶対に駄目だ（よ）（です）！！】×６

葵以外からツッコミが入った。

って、何で流や義之が参加するんだ。

って、渉がマジ泣き始めそうになるし。

俺は小さく溜息を吐いて。

「・・・・・はぁ、今度の土日は渉の家に泊まりで遊びに行くから」

「ほ、ホントか！？」

「だから、マジで泣くのは見っとも無いぞ？」

そして、女子四名から熱い視線が来てるんだけど。

だから、僕はそんな変な趣味はないぞ！！

ほ、本当なんだからね！！（真赤）

「それじゃ、その次の週の土日はボクは家だからね♪」

ここに居るはずのない幻聴が後ろから聞こえ、全員が振返ると。

「はろはろ～♪」

学園長が居た。

「えっと、さくらさん？」

何でこんな所にいるんですか？

「あ、小恋～呼びに来ないから仲間はずれかと思ったよ」

後ろのドアから隣のクラスの【白河ななか】が入ってきた。

「え、あ・・・」

この表情はすっかり忘れていたな。

「ここで話しても埒明かないし、机をくっつけないと」

流の言葉でみんなは席を作った。

作ったのだが・・・・・・

僕の座る所は何処？

椅子は僕以外は行渡ってるのだが。

「えっと、何処に座ればいいのかな・・・」

取り合えず、聞いてみる。

【俺（私）（ななか）（ボク）の膝の上（下）！！】×7

流と義之以外は、元気良く答えてくれた。

あ～、何か目頭から熱いものが滴れてくるよ・・・。

取り合えず、その申し出に全て却下して椅子を持って行き、自分の場所を確保する。

次はその両隣を奪おうと争うのだが。

「・・・・・今度からは生徒会室でお昼食べよう」

その言葉で、争いが消えたのは言うまでも無かった。

〈生徒会室　同時刻〉

「うぅ～、弟くん～葵ちゃん～」

「はいはい、今度誘うから・・・・・・」

半泣きの音姫をまゆきがあやしていた。

「今日は、夜は一緒にご飯食べるんだから・・・今は我慢しよう」

「うぅ～」

過保護にもと思いたいが、そこは音姫姉さんだと思っておこう。

「三人の人気も凄いよね？」

「「弟くんと流くん（兄さん）と葵ちゃん（さん）だから」」

二人は声を合われて平然と答えた。

「そこ言っちゃうと、言い返す言葉が無いんだよね」

その言葉に吐いた後に小さく溜息を吐いた。

「兄さん達は、面倒臭がる事は有るけど、ちゃんとしますから」
「葵ちゃんの場合は、異名の方が強いから憧れとかの方が強いんじゃないかな？」
「【小型の鉄槌者】とも言われてるからね」
「それは、本人の前では禁句だよ～。結構、気にしてるんだから」
「どう考えても、体格と力のバランスがおかしいのよね」

三人は、弁当を突っつきながら話していた。

「葵さんは、小さい頃からお父さんの稽古をしていたみたいですから」
「稽古？」
「はい、詳しくはしらないんですけど・・・剣術とか色々みたいです」

由夢もあんまり知らない。
稽古は、深夜帯に行われているんだから。

「ま、今度聞いてみるかな」

〈教室　同時刻〉

「ごちそさま～」

弁当の中を綺麗に食べた。
ご飯粒一つ残ってない。

「葵って、本当に綺麗に食べるね」
「それに美味しそうに食べるし」

杏と小恋が関したように聞いてきた。

「だって、失礼だもん！！」

お百姓さんが丹精籠めて作ったものなんだから残すなんて勿体無い。

「それに母さんが作る料理だからね。残すと・・・」

こ、これ以上はいえない。
元々、母さんも【百姓（ひゃくしょう）】の出だからね。
残したら、晩御飯は抜きとかになりそうだし。
それか長い長い説教のどちらかだ。
いあ、両方だな。

「けど、母さんの味付けは好きだから残したくないし」

それに、洋風は苦手なんだよな。

「何でこの三人は料理が得意なんだ？」

この三人・・・・・つまり、葵、流、義之のことだ。

「得意といっても僕は【和食】をメインに作るし・・・あと、洋風は少し苦手だ」

「葵の場合、おでんだけは母さんから任されてるしね」

「得意料理がおでんって・・・」

渉が複雑な顔をしていた。

「そう思うのが普通なんだけど、おでんの出汁を他の料理に活用したら物凄く美味しいんだよ～」

そう、一回母さんがおでんの汁でカレーを作ったらかなり美味しくなったって喜んでいたし。

「おでん作る時に特別な事はしてないんだけど？」

「結構な時間、灰汁を取ったり色々してるからだと思うけど？」

う～ん、そうかなと思いたいけど。

「なら、俺んちに来たときにおでん頼む！！」

「あ、渉君ずるいよ！！」

「なら、渉のいないときに皆で葵が作ったおでんを食べようかしら

？」

「え、ちょ！？」

【さんせ～い♪】×7

なんと言うか、今月俺の財布大丈夫かな？

「大丈夫よ」

そこに杏が言ってきた。

「割勘で出すから」

なら、大丈夫なのかなって・・・・・・。

「杏、人の心を読まないで・・・・・・」

「ふふっ・・・」

嬉しそうな含み笑いをしていた。

もうどうとでもなれ。

その時、マナーモードになっていた携帯がふるえた。

「ちょい、ごめん」

携帯を開き、中身を確認。
メールが二件有った。
送信者が【父さん】と【母さん】だった。
その中身を確認すると

「絆、今日は晩御飯何がいい？」
「へ？　あ～、ごった煮が久々に食べたい♪」

僕の一言で何が言いたいのか理解したらしい。
今日は用件が長引きそうなので【遅くなる】と言う文章だった。
二人には【了解】と一言だけ書いて返信した。

「・・・・・って、今日は朝倉さんの家で食べる事になってるんじゃなかったっけ？」
「へっ？　あ～、そうだった。すっかり忘れてた」

記憶からすっかり無かったよ。

「由姫さんや音姫ちゃんや由夢ちゃんが泣くよ？」

苦笑いしながらさくらが答えた。
それはそれで嫌だな。

キーンコーンカーンコーン・・・・・・

授業の予鈴が響いた。

「葵くん、また放課後ね～」
「またね～」

そう言いながら、ななかとさくらは教室をでて行った。
ふむ、嵐のようなお昼だな。
さて、午後の授業も寝ないように頑張ろう。

午後の授業も無事にパスができ放課後になった。
すると、机の中には入っていた携帯がふるえだした。

「誰だ？」

確認すると、送信者が【絆】と書いていた。
教室を見渡すと絆の姿は見当たらなかった。

【学校の正門で待ってるから5分以内に来てよ？　遅れたら桜公園のクレープ奢ってね♪】

携帯の発信時間と時計を見合わせる。
・・・・・後2分しか猶予が無いのですが？
僕は猛スピードで鞄に教材を詰め込んで猛ダッシュで正門に向かった。
ちゃんと下履きに着替えてだ。
そして、正門には絆と由夢が居た。

「はい、１５秒遅刻～♪　葵の驕りね～♪」
「葵さん。だ、大丈夫ですか？」

完全に息があがった僕を心配してくれていた。
う～、天使の子だよ～。

・・・・・ん？　天使？？
まぁ～いっか。
取り合えず、遅刻したのは事実だし。

「いいよ。クレープ奢ったるわ」
「やった～♪」
「由夢ちゃんも奢ってあげるよ」
「えっ、ありがとうございます」

人が居るから、まだ裏モードは続いてるし。

「桜公園に移動しようか？」

僕達は、三人は桜公園に向かった。
桜公園に着くとクレープ屋の移動車販売が来ていた。
二人はそれぞれ注文した。

「あれ、葵さんは食べないんですか？」
「あはは～、ちょっとね」

明日がお小遣いが貰える前にこんな出費が来るとは思わなかった。
なので、ちょっと我慢。
家に帰れば、何か有ったはずだし。
無い場合は【手から作り出せば】良い事だし。
その分のカロリーが消費されるのであんまり意味無いけど。

「・・・・・少し食べませんか？」
「えっ、全部食べちゃってもいいよ。本当にあんまりお腹空いてないから」

小腹ぐらいは空いてるんだけど。

「むぅ～・・・・・・」

ってか、何で絆はムスッてしているのかが分からないんだけど？

「えっと、ありがとうございます」

「あ、ありがとう・・・」

ホント素直じゃないんだから。

「うっさい！！」

二人が食べ終わるのを待っていたが。

「なぁなぁ、そこの彼女達、一緒に俺達と遊びにいかないか♪」

日陰が出来たと思ったら柄の悪い男性トリオが居た。

「はぁ～、またこのパターンかい」

確かこいつらは【本島】の奴らじゃないか？

しかも極道の【島原組】で合ってる筈。

父さんの仕事で一回襲ってきた奴らの組の中に見たことある顔が居たから。

「すいませんが僕達は用事がありますので他所を当って下さい」

「良いじゃないか～。楽しいこと教えるからさ～」

そう言って、リーダー格の男が僕の手を掴んだ。

「放してください！！」
「あ、葵さん！！」
食べ終わった由夢と絆が割って入ろうとしたが。

ドンッ

次の瞬間、手を掴んでいた男は一回転して地面に倒れた。
「あ、がっ！！？」
「まったく言いましたよ？　【放してください】って」
「は、外れる！？！？」

因みに逆間接を極めていて、無理に動こうとするとポッキリと折れるほどだ。

「舐めるな！！」

がたいの良い男がいきなり殴りかかってきた。
葵は極めていた手を外ししゃがみと同時に心撃（ハッ）ちを行い、男は悶えた。

「やろ！！」

九頭・右竜翔扇

敵を空中に弾き飛ばして身動きできないようにし、技を叩き込む基本形。

３３０キロのワーウルフでも飛ばすことが可能。高さ5メートルほどまで跳ぶ。

もちろん飛ばしたまま放置しても落下するのでダメージがある。

それの１０分の１の威力で打ち込み３メートルほど吹き飛ばした。

「絆お姉ちゃん！！」

その声と同時に振り向くと絆がひょろっとした男に捕まり、首にナイフを突きつけていた。

あっちゃ～、まずった。

「絆・・・やっていいぞ」
「りょ～かい・・・っと！！」

リラックス状態の姿勢をとり。
絆はそう言うと肘内で男の溝内に思いっきり入れた。
男が持っていたナイフを叩き落して・・・・・・。
男のあごに掌抵を入れる。

「がはっ！！」

倒れるが直ぐに起き上がろうとするが。
脳が揺さぶられ、直ぐに起きる事ができない。

「よし、今の内に！！」

僕達は急いでその場を後にした。

「後は警察が何とかしてくれるだろう」

その後、男達は警察の事情聴取で【チビが！チビが！！】と意味不明なことを呟いたと言う。
やはり、始末しておけば良かったかなと思った。

「たくさん食べて下さいね」

由姫さんは料理を運んできてくれる。

「今日はお母さんと私と由夢ちゃんが作ったからね」

由夢の単語で四人の箸が止まった。

「大丈夫ですよ。私と一緒に作りましたから」

そう言って、絆は由夢が作った料理に手を出して食べていた。

「いや、そんな死者が出すな料理は作りませんから」

僕も同じ様に絆が食べている料理を食べた。

「うん、美味しいよ」

「味付けだけですからそんなに心配しなくても大丈夫でっすよーだ

！！」

不貞腐れた様に由夢が言う。
死者料理を作る前に由姫さんが止めるか。

「葵くんって、今好きな人入るの？」
「ふぇ？　今はいませんから～」

そう良いながら唐揚げを頬張る。
あつあつ、うまうま～。

「なら、うちの音姫なんてどうかしら？」

口から吐き出しそうな唐揚げを何とか維持した。

「ふぁふぁい（は、はい）！？」
「お、お母さん！？」

いきなりびっくり発言が来ましたよ。

「あ～、僕は似合いませんよ。もっと相応しい人が入ると思いますから」

本当に勿体無いと思うよ。
僕になんて。

「とか良いながら、葵の顔デレデレしてるけど？」
「確かにそんな事を言われたらにやけるって」
「ふ～ん、変態！！」

そう言って、ムスッと表情をしながらご飯を食べていた。

「本当は嬉しいんだよね？」

「うぐっ！！」

絆は驚いてご飯を引っ掛けた。

「はい」

冷たいお茶を葵が渡すと勢い良く飲み干した。

「ち、違います！！」

「真っ赤になりながら否定だなんて可愛い～」

「由姫小母さん！！」

あ～、こりゃ完全に遊ばれてるな。

「むぅ～、何が可笑しいの？」

「うんにゃ、何にも～♪」

こんな暖かい【家族】が僕にも作れるかな？

あれ？　家族？？

あぁ、そっか。

そう言う事か。

「ん、どうしたの？」

「どうして？」

「何か複雑な表情をしていたから」

あちゃ～、そんな顔になっていたのか。

「心配しすぎだ」

そう言って、デコピンをした。

「あにゃっ！？」

そう言って、絆はおでこを抑えた。

さて、そろそろ迎えるとしますか。

朝倉家の夕食後は自分たちの家に戻っていた。

僕は、自分の部屋。

絆は、リビングでテレビを見ている。

僕は机に座り、ポケットから蒼い宝石のペンダントを取り出した。

「そろそろ、君が悪役になった理由を教えてくれてもいいだろ・・・・・【シャルティエ】」

《・・・・・いつ記憶が戻ったんですか？》

そう言うと、アウトフレームになり僕が知ってるシャルティエになった。

「切欠は【天使】由夢ちゃんを見たときに思った感情。そして、決定打は【家族】僕の血が繋がった兄妹いないんだから」

『そうでしたか。けど、誤った認識が一つだけあります』

「誤った認識？」

一体何処が？

『母体に居る時の話です。本当は葵様は【一卵性双生児】として生まれる予定でした』

「え、マジで！？」

その言葉に、シャルティエが頷いた。

「もしかして・・・」

何で居なくなったかある程度予測はできた。

『考えているとおりです。葵様の産まれる波動が低く、もう一人の命を下さったんです』

「・・・・・そっか」

『けど、もう一人の生命は生きてます。ちゃんと葵様の中で』

その言葉に驚きを隠せなかった。

「もしかして裏人格として？」
『はい、ジュエルシードで魔力を生命に変換を行い意識レベルを浮上をさせました』
「意識が覚醒している状態、しかも二人とも起きてる状態」

どっかに有ったね、こんなゲーム。
人懐っこい『犬』が連想されたけど。
しかも、Ｄ．Ｃ．２　Ｐ．Ｃにも『忠犬』がいるし。
・・・・・あれ、しかも声優一緒じゃねぇ？

『だから、後の事はお願いします』
「まったく人使い荒いんだから」

だけど、ここまでのお膳立てをしてくれたんだからちゃんとしないとな。

『私はもう少し【表】で流様の御相手をしてきます』
「無茶はするなよ？」
『信頼する主が戻るまで耐えます』

そう言って、シャルティエが消えた。

「さて、終焉だね」

僕が下のリビングに行くと絆がまだテレビを見ていた。
時間がとっくに深夜2時を過ぎてる。

「まだ寝ないのか？」
「もうそろそろ寝るよ～」
「寝る前に少しだけ話しをしないか？」
「話し？」

その答えに頷いた。
絆はテレビを切った。

「絆はこれからどうしたい？」

遠回しの事は言いたくないので、直球で言った。

「何のこと？」
「まぁ、この世界の訂正・・・・・・まず、俺の両親はもうこの世界には居ないのと、僕には双子は居ない・・・・・・そういう訳で【リアリー？】」

すると、次の瞬間に空間が砕け大きな桜の前にいた。

現実の桜ではない。
夢と現実を繋ぐバイパスの場所。

「気が・・・・・付いてたの？」
「夕食の所でね。確かに、あんなのは理想なんだけどね、あそこは所詮は夢の世界だし。夢はいつかは覚める場所」
「そっか・・・・・ごめんね、葵」

顔を俯き、泣きそうな顔だった。

「けど、お前も生きてるんだよ。僕と意識は共有している」

その言葉に驚いていた。

「けど、私には帰る肉体が無いよ？」
「あぁ、その事？」
「な、なに！？　その小馬鹿にしている疑問は！！」

いや～、僕にとっちゃそんな事になるんだけど。
それも直ぐに解決しちゃうし。
問題としては、どうやって精神体を別の体に送るかって・・・・・ん？
贈る？

「あぁ、あの方法があったか」
「葵？」
「方法見つかった。しかも、かなり僕が頑張らないといけないのかな？」

僕は、改めて絆を見た。

「では改めて問います。【槻月（きつき）　絆（きずな）】は現実世界に行って何を望みますか？」

暫く沈黙。

そして・・・・・・

「私は、葵や皆と一緒に居たい！！　皆でお話ししたり、お買い物したり、ご飯作ったりしたい！！！　そして・・・・・・」

絆は思いっきり涙を流しながら。

「これ以上、お兄ちゃんの寂しそうな姿は見たくない！！！！！！」

うん、ちゃんと真摯な気持ち伝わった。

「最終判定者【槻月　葵】が【槻月　絆】の願いを叶える事をここに誓う」

桜が花弁が二人を包み込んだ。

第二十一話：未来の【ＩＦ】の世界と真撃な願い（後書き）

毬藻「お話大会～」

絆「えっと。よ、よろしくお願いします／／／」

毬藻「急遽生まれた双子の妹の絆ちゃんだ！！！」

絆「きゅ、急遽ですか！！？」

毬藻「発想がでてきたのが三日前だもん」

輝羽「物凄く急遽だったんですね（汗）」

毬藻「今だから言えるこだけど、本来の敵は【絆】だったんだから」

絆「えっ、葵と対峙するところだったの！？」

毬藻「そうだよ・・・・・・って、うわぁ～泣かないで泣かないで（汗）」

絆「うぐっ・・・ひっく・・・・・・だ、だって～・・・・・・」

輝羽「うわぁ～な～かした～」

毬藻「強化案がでてきたからシャルティエになったんだから」

絆「けど、葵と戦わなくって良かった♪／／／」

輝羽「・・・・・・（えっと、かなりお兄ちゃんラブ？）」

毬藻「・・・・・・（う～ん、そんな設定は入れていないんだけど？）」

絆「えっと、次回はどうなるんですか？」

毬藻「とりあえず、１０歳の流＋管理局ＶＳ葵のバトル（シャルティエ）と最終局面かな？　無印の・・・・・・」

輝羽「私の出番有るかな？」

毬藻「ノーコメントでお願いします」

絆「次回もまた見て下さいね♪」

ぷらら「あう～、ぷららの出番取られた！！」

毬藻「何だかな～」

第二十二話：悲しみの連鎖の終局（前書き）

シャイ「あれ？　管理局とのバトルは？」

毬藻「ご都合主義によりなんか消えてしまいました＾＾；」

シャイ「あれ、結局次回予告ではないような気がするです（汗）」

絆「えっと、始まります～」

第二十二話：悲しみの連鎖の終局

―流ｓｉｄｅ　ｉｎ―

「はぁ、はぁ・・・・・・くっ！！」

流は、ビクティムを握りなおし再度、剣を構える。

「まだ、やりますか？」

体は葵のだから思いっ切り出来ないし。
だからと言って気を抜くと一気に攻め込まれる。

「貴方にはこの私は倒せない・・・・・・それは充分に承知でしょ？　【時の覇者】さん？」
「だからと言って、俺は諦めるって事はしたくない！！」

って、言うがどう考えてもこっちが不利だし。
葵・・・まだなのかよ。
　ずっと、魔法での牽制をしているなのはとフェイトにも疲労の色は隠せない。

「・・・・・・フィーナ、なに・・・遅いぞ、葵！！」

そう呟いた瞬間、島全体の桜の花が輝きだした。

『特異点検出！！　空間がはじけます！？』

すると、葵のからだが光だし。

「ぎゃぁぁぁ！！！」

すると、一人の女性が出てきた。
アウトフレームのシャルティエだった。

「ふぅ～、やっと戻ってこれた」
「強制的にデバイスの呪縛からに逃れたというの！？」
「シャルティエ、歯を食いしばりなさい！！」
「えっ！！？」

九頭・右竜徹陣

〔敵陣を貫くと言われる突き。強力なパンチ。
殺す気で放てば口径１０センチのマグナム弾に等しい破壊力を出せる。
“通し”を極限まで推し進めた技で、喰らった相手は吹き飛ばされる上に気の爆発により肺腑を焼かれるようなダメージを負う。〕

これを海面の方にシャルティエに向けぶっ放した。
しかも全力で。
海面にぶつかり、水柱が２０メートル上がった。

「・・・・・・・・・・・・」

その行動に三人は声が出なかった。

おいおい、強化無しでその威力は反則だよ。

―流ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

『あ、葵・・・ちょっとやりすぎだよ～』

「あれぐらいしないと気がすまない。いきなり、体を乗っ取られたんだから」

まぁ、魔力籠めないであれなんだと言う確認もしたかったし。

「さて、絆の望みを叶える」

近くの陸地に立つと。

「クリエイト！！」

すると、その場に葵と瓜二つの体が出来上がった。

人体錬金というのは違うな、創造魔法に近いものかもしれない。

「絆、準備はいい？」

『うん、お願い』

僕は、一呼吸した。

そして・・・。

「我が内に居るもう一人の魂を他の者の器に定着しこの世に生きる事、生命の死するまでを【永遠に許可】をする！！」

トクン・・・トクン・・・

すると、次の瞬間に心臓の音が聞こえ、血液が体を巡り、【生きてる】サインが見えた。

「・・・・・・葵？」
「うん、おはよう【絆（きずな）】」

本来、リハビリで人体を馴染ませないといけないんだけど。
その行程は創り出す時に行っている。
間接やその他色々も馴染ませている。

「これ、現実なんだよね？」
「そうだよ。現実なんだよ」

僕は立ち上がった。

「待って！！　私も行く・・・・・・最後に見届けないと」
「・・・・・分かった。空は飛べｒ（ｒｙ」
「うん、夢と同じ・・・全部出来るみたい」

そう、絆は二枚の光鷹翼を背中に生やして、空を飛べていた。

初めて知りました。
絆も光鷹翼は展開できるんですね。
あ、ちょっと確認。
そう言って光鷹翼をフル展開。
うん、１０枚はちゃんと出せるね。
いや～、もしかしたら僕の光鷹翼を持っていったかと思ったから。

「流」

そう呟いた時、僕と絆とシャルティエをクリスタルゲージで包んでくれた。
理解はしているはずだし、なんせ【時の覇者】だしな。

僕は、シャルティエが着弾した水面のところにきた。
そこには、ぷかぷかと浮いていた。

「……帰ってきたんですね？」
「ちゃんと帰ってきたよ。とりあえず、言いたいことが一つだけ」

僕は、シャルティエと絆だけ聞こえるように呟いた。

「ただいま、シャルティエ」
「うん、ただいま。それと、私を導いてくれてありがとう」

―シャルティエｓｉｄｅ　ｉｎ―

「うん、ただいま。それと、私を導いてくれてありがとう」

その一言で、頬から暖かい物が伝わった。
私でも流す事が出来るんだ。
その言葉だけで、私は胸が一杯になった。
それだけでも、私は【悪役】になって良かったと思いました。
さて、物語の終焉に向かわせないと。

「葵様、この後の何をすれば良いか分かってますよね？」
「あぁ、本当に【時詠みの能力】が恨めしくなるよ」

そう、葵様は産まれて一度も使おうとしない能力。

【時詠みの力】

言葉の如く、全ての確定した時間を見る事ができる。
あ、ちょっと訂正。
【蘇生術】と同じで年齢で能力封印をしていたのだ。
その後は、葵様のお願いで私が【封印】していたんだった。

「では、私のお願いが解りますね？」
「僕が嫌って言っても信念を変えないんだよね？」

私はその言葉で頷いた。

「まだ悪役です。けど・・・」

首にかけていた蒼い色の宝石を取り、葵様に差し出した。

「二つのデバイスとジュエルシード２１個が入ってます。デバイス

はいつもの奴です」
「うん、解った」
「最後に私の願いを聞き入れて下さい」

私は、一回深呼吸をして目を瞑った。
そして、ゆっくりと目を開いた。

「私の願いを・・・最終審判者【槻月　葵】に対しての私の願いです」
「あぁ、聞いてあげる」

その顔は穏やかで、全てを理解していた。

「私の真撃な願い、それは――――――――」

―シャルティエside out―

「きゃーーーー!!!」
「うわっ!?」

クリスタルゲージが砕けたと同時に僕と絆は吹き飛ばされた。

「なんて馬鹿な子達、近づけばそうなる事は分かってる筈だよ?」

不気味な笑いを浮かべながらシャルティエがそう答えた。

「もう、手遅れ・・・・・なんだね?」
「馬鹿な子、私はジュエルシードを使いこの星の【皇】になるのよ。

そして、この世界を崩壊させるのよ！！！！」
「させない！！」
絆は、叫んだ。
「これから産まれてくる命を消すのと同じ事、そんな事させない」
「星の生死をシャルに託したくないな」
そう言って、蒼い宝石を取り出した。
「ストレージデバイス、展開」
すると、いつも使ってる【長距離】型のデバイスが展開していた。
「・・・流以外は何もしないで！！　多分、どんな攻撃も通らないと思うから」
「え、けど！！」
「なのは、お願い・・・僕に課せられた義務と責任・・・・・・だから」
なのはが何か言いたそうだったけど、それ以上は何も言わないでくれた。
ごめんね、なのは。
「それで、何をすればいいの？」
「一つのお願いと、あれはどれぐらい封じられそう？」
指の先で【アレ】を指す。
「あれは最低でも5分でお願いの方は多分大丈夫。こっちにはあん

まり影響は無いと思う」
「了解・・・・・行くぞ！　シャルティエ！！！」
そう言って、デバイスを持ち直した。
「そうは問屋が卸しません！！」
「そう言うと思ったけど、それは無理～」
そう言うと、十三の列なるクリスタルゲージと
「無限に絡みつけ！！　【時の鎖（タイム・オブ・バインド）！！】」
鎖が蛇の様にシャルティエの体に絡みついた。
「くっ！！　こんな物！！」
「無限管理者権限剥奪を命じる！！　及び、管理者権限発動。使用タイトル【D．C．？&なのは　～時を越えし者の物語～】使用キャラ【シャイン・フォース】使用デバイス【時詠の書】！！」
これを使う事になるとは思わなかったけど。
確か、四十七話ぐらいで止めていたな。
すると、白色の光が葵の隣に浮かび上がり、そして弾けた。
そこに、居たのは【リィン・フォーズ？（ツヴァイ）】の姿に似た融合騎。
だが、服装は【青】ではなく【赤】で何より違うのは。
特定の【能力】を所持していないと融合が出来なく、そして目を覚ますことは出来ない融合騎。
その、小さな融合騎はと言うと。
「あ、あれ？　シャイは三上様のお手伝いしていたはずですけど？」

そう言いながら、辺りをキョロキョロと見渡していた。

「あはは、ごめんね。多分、向こうの【流】はヴィヴィオ達のオフトレに参加してると思うけど、無理やり呼んじゃって」

「・・・はいです？」

その言葉に、シャイは気が付いて振り向いた。

「・・・・・どちら様ですか？」

「槻月　葵。お願いがあるんだけど、少しだけ力（能力）を貸してくれない？」

「って、いやいやなんでそうなるんですか？　それに、シャイは【誰でも】融合する事が出来ないですよ！？！？」

それが普通なんだけどね。

「・・・・・シャイ、この【時間】の【運命】を見なさい！！」

「・・・っ！！？」

「伊達に【時間の融合騎】と言われていないだろ？」

少し驚いていたが、次の瞬間にシャインの瞳が【深紅】に変化した。

「時間の確認しましたです。そして、状況も把握しました」

「そして、結論は？」

「貴方との融合を許可します」

時間を見る事ができるから、言葉より理解が早い。

「少しだけど、力を貸してね？」
「はい、【マイスター】槻月　葵」

ん？

何かへんなこと言ってるけど、今はそれどころじゃないか。

「いくよ、シャインちゃん」
「はいです！！　ユニゾン・・・」
「「イン！！」」

次の瞬間、光に包まれた。
そして、光がゆっくりと晴れると。
八神はやての反転色の甲冑と羽を身に纏った葵が居た。

『一発大きいの行きますです！！』
「流以外は、アースラに待機！！　急いで！！」
「私も残る！！」

その言葉に僕は頷いた。
そうだな、絆も見届けないとな。

『三人以外はアースラに退避しました』

エイミィさんの声が辺りに響いた。

「葵、もしかして撃つ魔法って？」
『アレですね♪』

物分りがいい融合騎ですよ、まったく。

「提示する魔法・・・『ｔｈｒｅｅ　ｂｒｅａｋｅｒ』」

すると、一個目のピンク色の魔法陣が出来上がった。

「一つ目の魔法!!　咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。貫け!閃光!」

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　ｂｒｅａｋｅｒ』

「発射固定展開!!」

そして、次は辺りに雷鳴が轟いた。

「二つ目の魔法!!　雷光一閃」

『Ｐｌａｓｍａ　Ｚａｍｂｅｒ　Ｂｒｅａｋｅｒ』

「発射固定展開!!」

最後に古代ベルガ式の魔法陣が作り上げた。

「最後の魔法!!　響け終焉の笛」

『Ｒａｇｎａｒｏｋ』

「発射固定展開!!」

三つの極大の魔法陣が展開していた。

たぶん、アースラの所でクロノが【出鱈目だろ】と呟いてそうだな。

「魔法統一能力」

そして、一つの魔法が出来上がる。

「また、逢おうね」

そして、大きく深呼吸。

「許容範囲型統一魔導砲【アルカンシェル】！！！」

『撃ち砕けです！！！』

直前状の魔導砲が一気にシャルティエに撃ち込んだ。

『私の真撃な望みそれは・・・・・・【私を消滅させて下さい】』

それは、僕が最後に聞いた彼女【デバイス】の言葉。

「うをおおおぉぉぉぉぉおおお！！！！！！！！！」

光の渦、辺り一面に広がった。

その時。

【ありがとう。私の大好きな主様（マスター）】

そんな言葉が聞こえた気がした。

そして、次第に魔力の余波は収まった。

「ユニゾン解除」

そう言葉にすると、シャインが横に居た。

「終わったんですね」

「うん、ありがとうね。シャイン」

「葵さん、悲しい顔しないでください。多分、シャルティエさんもそう思ってるはずです」

そういうと、シャインの体が透け始めた。

「そろそろ、時間みたいです」

「ありがとうね。シャインちゃん」

「はいです。こっちのシャインとも仲良くしてくださいですね。【マイスター】葵様♪」

そして、光の粒子になり消えた。

「ねぇ、あの子（融合騎）が【マイスター】って言っていたけど？」

「たぶん、僕の正体知ったんだろうな」

生みの親って言うことを。

そして、無事に終わったのだがもう少しだけ続きがある。

僕にとってはかなり重要な事になるのだが。

第二十二話：悲しみの連鎖の終局（後書き）

毬藻「結構、更新間隔が短くなってしまったw」

シャル「良いことではないのでしょうか？」

毬藻「中には定期の方が言いと言う人も居るからね～」

輝羽「感想コーナー。悠久なる時間さん、感想ありがとうございます」

毬藻「主思いだってよかったね～」

シャル「違います。【愛】の力です！！」

毬藻「あ～、そこは力説されてもどう反応すればいいのか分からないw」

絆「それでもって、次回予告（仮）です」

毬藻「（仮）って何？」

絆「次回予告と違うものになる可能性があるのでこっちが良いかなって♪」

毬藻以外「納得！！」

絆「そんな事で次回予告（仮）。仮保護者の【シャルティエ】がいなくなってしまい児童相談所の職員に保護されるかもしれない葵と

絆」

輝羽「そんな時に四家族が名乗りを上げ、バトルが勃発」

シャル「チート魔術師と桜の木、第二十三話：【コスプレを保護できるのは何処の家族？】です」

毬藻「・・・・・・そんなタイトルは絶対に無い気がする（汗）」

ぷらら「じかいもおたのしみください～」

第二十三話：新しい苗字（前書き）

少し空いて申し訳ないです。

では、始まります。

第二十三話：新しい苗字

あの日から数日は過ぎた。
仮保護者であるシャルティエが居なくなり、身元引受人が居ない。
このままでは何れにしても児童相談所の職員に連行されてバラバラになるのは確定事項に近いんだけど。
その時に、四家が名乗りをあげた。
その四家は【芳乃家】【朝倉家】【テスタロッサ家】【柾木家】だ。
一言だけ言おう。

「何が目的なの！？」
「「「「葵ちゃんのコスプレ独占権！！！」」」」

そこは、声をそれえて言うはすではない気がするが？

「冗談は置いといて、二人をこのままにしておくと児童相談所に職員が連れて行こうとするからね」
「それはそうなんだけど、この家自体は僕の名義だから今は大丈夫だし」

そこの土地に関しても、所得税とか色々あるが支払ってはいる。
あまり使いたくは無いが母さんの残したお金とか車の代金とかで。

「そう言えば、絆の戸籍とかは？」
「それは大丈夫。ちゃんと処理はしてきたから」

そう笑顔で、鷲羽ちゃんが呟く。
その方法が一番気になるんですが、そこは置いといて。

「けど、僕はここから動きたくないです」
「里親と言っても、名前も変わらないし住んでる所も変わらないわ」
あれ、それならあんまり考える事が無いんじゃないかな？
「まぁ、葵ちゃんの場合はそれ以上に知識があるからね」
「魔法にしても一般知識にしてもね」
プレシアさんとさくらさんがそう言ってくれた。
そこは褒めすぎでしょ？
そこまで僕は知識とかないですし。
「葵くんの魔法自体は【神話】とかの結びが強いけどね」
「キューフとかルーンを持ち合わせて使う事がありますね」
「ねぇ、ルーンってなんなの？」
フェイトが不思議そうに聞いて来た。
「ルーンとは古代文字のことだよ」
紙を持ち出して、【X】とかく。
「ただのX（ペケ）だよ」
「これは【X（キューフ）】と言って贈り物のルーンだよ。物や感情を贈ると言う意味があるんだよ」
その言葉に不思議そうに見ていた。
そして、もう一つ書いた。
今度は【H】と記入した

「次はH（エイチ）？」
「これは、【H（ハガル）】だね」

鷲羽ちゃんが答えてくれた。

「これは、【災い】や【雹】とか悪い事を言われるんだけど」

因みに母さんの別名がこれなんだよな。

「確か、【予期せぬ幸運】とかも入ってるんじゃなかったっけ？」
「そうだよ」
「因みに母さんの別の名でもあるんだよ」
「【ブリュンヒルデ】がなの！？」

その言葉に、さくらと由姫は驚いていた。
それは驚くだろうな。

「まっ、それで戦局を変えていた母さんだからね」

母さんの武勇伝は本当に驚くことばっかりだけど。

「さっきの話だけど、私は引き取る権限は無いわね」

そう言って、プレシアさんは答えた。

「ミッドの方に引っ越すんでしたね」
「えぇ、鷲羽ちゃんのお陰でね」
「それなら、私のほうも無理だね」

鷲羽ちゃんも同じように身を引いた。

「宇宙限定で柾木家を名乗っているしね」

「宇宙限定？」

そう言えばまだ話しをしていなかったね。

「地球に居る時は『槻月葵』と名乗るんだけど、宇宙に行くと『柾木　葵（あおい）　樹雷（じゅらい）』と名乗っています」

「えっ！？　樹雷って！？」

その言葉に、プレシアは驚いていた。

「皇家の樹の種族です」

「皇家の樹の！？」

「はい、そうですけど？」

その言葉に、驚いていたが・・・って。

「フェイトもどうしたの？」

「葵は物凄い人だったんだね！？」

「えっと、なんで？」

いや、そこまで凄くないでしょ？

取りあえず、王位継承権は持ってるけど。

「樹雷は時空管理局では簡単な技術と物資を提供してるのよ」

「は、はい？」

すいません、僕も今初めて知ったことなんですけど？

「葵殿、カミングアウトしてもいいと思うんだけど？」
「皇家の名前を使っているのですからその方がいいでしょう」
鷲羽と葵が不思議な事をいっている。
「な、何のことなの？」
さくらや他の人も興味信々に聞いて来た。
「葵殿は『皇位継承権第四位』なのよ」
その言葉に皆さん沈黙。
鳩が豆鉄砲食らってる感じなんだけど？
「えっと、みなさ～ん」
恐るおそる声をかけると・・・
「ねぇ、もしかして去年一年帰ってこなかったのは？」
「４ヶ月向こうで作法から剣技やらを教わってました。その後は、天地さんの家で厄介になってましたけど？」
最近ではアイリ理事長からの打診で【手伝って～】と泣き着かれた事もしょっちゅうだし。
何だかんだで手伝ったりしてるけど。
学園長には『ここの生徒にならない』とまで言われたし。
そこは丁重にお断りしましたけど。
「けど、まだ諦めていないんだよね」

何とか回避しようとしないとな。

「さて・・・と、本来の話を戻そうかな」

永遠に延ばしていたけど、実はもう決めているのだ。

「その前に葵殿はもう決断してるけどね」

「鷲羽ちゃんには分かっていたかみたいだね」

「葵？」

絆も不思議そうに見つめていた。

「大丈夫だよ。僕達を受け入れて欲しい家は――――――」

次の登校日、さくらさんが教卓に立った。

「今日は皆さんにお知らせがあります」

その言葉に皆がざわめきだした。

「皆静かに、槻月の家は家庭の事情により苗字が変わりました」

「えぇーーーー！！！」

その言葉になのはは驚いていた。

義之や流は驚いていなかったけど・・・。

「今日から『芳乃』となりますがこれからも宜しくお願いします」
「お、おねがいします」

二人は同時に頭を下げた。
そして、初音島限定で『芳乃』と名乗る事になったのだ。

第二十三話：新しい苗字（後書き）

今回は葵がその家に行くかってことだったんですが、シナリオを作ってる時にどうしてもさくらさんの養子にならないといけなくなってしまいました。
後、私が書いているのは『妄想小説』とか『二次小説』の小説になりますので耐性がある方は詠んで下さい。
無い方は私の小説からドロップアウトする事をお勧めします。

今回の後書きは愚痴になります。
まぁ、私もバッシングとか色々個通で言われたりしますが、書いていない人が散々に作者を貶すのはどうなんだろう？
もう少し柔らかく言うのも有りだとは思うんですけどと思う作者でした。

さてさて、次回はなのは編の最終です。
少し頑張って書きたいと思います。
多分、四日から五日位になると思います。
では今回はこのあたりで失礼します。

第二十四話：旅立ちと再会に祈りを（前書き）

駄目文ですが読んでください。

第二十四話：旅立ちと再会に祈りを

「さてと、着いたな」

僕は、とある事情で『海鳴市』に来ている。
とは言っても、用事としてなんだが。
その用事としては二つ有る。

一つは、来年の交換学生の下宿先の挨拶。

そしてもう一つは・・・・・・

「あ、来たみたいだな」

そこには、なのは、フェイト、アルフ、プレシア、そしてアリシアがいた。

「葵ちゃん、遅かったね」
「お見上を買っていたら時間の事忘れていてね」
「あれ、そう言えば絆さんは？」

プレシアは不思議そうに僕の後ろを見ていた。

「今日は留守番です。それと、自分のデバイスを作ってます」

「えっと、自分でデバイス作ってるんですか？」

聞きなれない声に気がついてプレシアの後ろを見ると。

「・・・・・・・・・はい？」

見間違いではないよね？

猫の耳に猫の尻尾がついた民族衣装っぽい服を着た女性。

山猫の化身じゃなかったっけ？

因みにプレシアさんの使い魔じゃなかったっけ？

「えっと、初めまして。使い魔のリニスといいます」

「山猫の子猫じゃなかったっけ？」

確か、原作ではフェイトの育成係じゃなかったか？

「はい、正解です。けど、よく分かりましたね？」

「あ、あはは・・・・・・」

原作を見ましたからとは言えないな。

「お母さん」

「うん、行っておいで」

なのはとフェイトは話しがあるということで違う場所に行った。

「少し質問していいかな？」

不意にプレシアは真剣な表情で葵に聞いて来た。

「君が知ってる『正史』とは違う世界なんだよね？」

「かも知れないですが違うかもしれないです」

「違う？」

アリシアは不思議そうに聞いて来た。

「同じ並行世界でも僕達から見たら『別の世界』かも知れないですがその世界の住人から見たら『別の世界』です」

そう、僕が知ってるこの世界は『外史』かも知れないが、この世界の人達は『正史』なのだから。

「自分の物語の始まりはいつでもここからなんだから」

「うん！！」

僕は、髪を結いてあったリボンを解(ほど)いた。

「これは僕からの贈り物。そして、再開の時まで預かってて」

「うん、なら私も」

そう言って、右の髪を結んでいたリボンを梳いて葵に差し出した。

「うん、大切にするね」

「母さん」

フェイトとなのはもリボンを渡したみたいだった。

「・・・・・誰？」

戻ってきたフェイトの一声だった。

『ほんと、葵様は髪を解くと別人になりますからね』

不意に声が聞こえた。
その声は聞き覚えがあった。
それは、あの戦いで聞いた声だった。

「な、何で？」
「うそ、あの時に葵ちゃんの『アルカンシェル』で消滅したはずなのに！？」
「シャルティエ・・・・・先生？」

そう、その声はまさしくあの時に打ち壊した『シャルティエ』の声だった。

『まぁ、皆さんの言いたい事はあると思いますけどね・・・』
「あの時壊したのは『人格プログラム』だから。その後に鷲羽ちゃんの残していたバックアップと少し能力弄りました」

まぁ、その時にかなりの量のプロテクトとダミーを取り除いたがそれはまた別のお話。

『あの時の【シャルティエさん】を責めないであげてね。アレは私を起こす為にした事だから』

そして、もう一つの声が聞こえてきた。

「き、絆さん!?」
「ね、テレパシーじゃないよね、これ?」
リニアも驚いていた。
『違うよ。シャルティエさんを介入して話しをしているんだから』
「しかも、直接通信だから傍受や障害は一切無効になります」
『ジャミング機能も一切無効と言う物だからね~』
まぁ、これは【DB(ドラゴンボール)】の応用が入ってるからね。
「す、凄い・・・・・・」
まぁ、驚く事ではないとは思うけど。
「正式名称は『シャルティエ・プレーヤー』だよ」
ほとんどの人は音楽とか考えそうだけど。
ここのプレーヤーは【祈り】と言う事。
『また、宜しくお願いします』
その声は、優しく慈愛の言葉だった。
「よろしくなの♪」
「こちらこそ、宜しくね」
そして、声が聞こえなくなった。

「さて、私達も行きましょうか？」

プレシアの言葉に四人は頷いた。

「また・・・また逢えるよね？」

「うん、また逢えるよ」

それは、再会の公約。

「またね、なのは」

次の瞬間、四人は粒子となり消えた。

「・・・ねぇ、葵くん」

「ん？　何？？」

「きっと逢えるよね？」

「信じていればきっと逢えるよ」

僕の言葉に、なのはは笑みを浮かべていた。

その後の予定だった冬休み前の交換学生の受け入れ下宿先は。

「宜しくね、葵ちゃん♪」

「おう、宜しくな」

どう考えてもこの二人、二十代で通せそうな気がするんだけど。

「にゃはは、宜しくね。葵くん」

その横でなのはが笑っていた。

「よろしゅうな～」

「これから宜しくな！！」

中国服着ていた女の子と青髪の活発そうな女の子・・・・・・だよな？

って、いやいや合ってる筈だし。

その前に、原作崩壊も良いとこだと思うんだけど。

鳳・蓮飛（フォン・レンフェイ）と城島晶だよな。

「桃子～、泊まりにくる男の子が来たの？」

その奥から金髪のポニーテールの女性。

確か、フィアッセ・クリステラさんだよな？

歌の学校してるクリステラさんのお孫さんじゃなかったか？

ここら辺を言えば、何となく予想は出来てるだろう。

どう考えても『とらハ３』のキャラが入り混じってる。

まぁ、忍さんと那美さんは確定で出てこないといけないからな。

あ、後は久遠もか。

『なのは』と『とらハ３』の世界観が綺麗に混ざり合ってるってことか。

・・・・・・・・・・・・・カオスです。

「あっと、『槻月　葵』です。来年の１０月から二ヶ月もう一人もお世話になりますが宜しくお願いします」

僕は、頭を下げた。

「はい、こちらこそ宜しくね」

それは、新しい出会いと物語の始まりだったかもしれない。

第二十四話：旅立ちと再会に祈りを（後書き）

次回は『木間話』と『コラボ』の話しになりそれが終わり最新章に突入します。
最後に書いている日にちを見れば何となく予想は出来そうですけどね。

それと、最後に出てきた人たちのフラグは流石に立てれませんｗｗｗ
流石にフラグ上位神とかフラグ最高神とかには出来ませんから。
まぁ、どうやって小学生が高校生をフラグ立てるとか知りたいぐらいだし↑

それに、最後に出てきた人たちの詳細プロはあまり知らないからな。
それにとらハシリーズ＝日向裕羅さんですからねｗ
俺の記憶にある鉄板声優ですからｗｗｗ

それでは『Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｔｉｍｅ.』

番外編：祝ＰＶ５万突破☆

琵藻「今回も始まりました。番外編企画」

葵「なぁ、作者・・・とことん中身が変更してないか？」

琵藻「ナ、ナンノコトカナ？」

葵「まぁ、それ以上の検索はしないけど・・・なのはととらハは混ぜちゃ駄目だろ！！？」

琵藻「あ～、なのはのデバイスが変更になりかけないなｗｗｗ」

なのは「ふぇ、どう言う事なの？」

琵藻「今のリリなののデバイスから違う形状になりますｗｗｗ」

葵「因みに声優が田村ゆかりさんからひと美（北都南）さんに変更されるというおぞましい結果が出ますが？」

琵藻「そんな事はしません！！」

絆「その話しは置いといて・・・今回は何をするんですか？」

琵藻「今回は絆の紹介ぐらいかな？」

シャル「と言いますか既に１０万アクセス突破しているんですけど？」

毬藻「・・・マジっすか！？」

葵「あぁ、マジだ」

毬藻「駄目だ。貧困な頭でいい企画が思いつかない・・・・・」

シャル「馬鹿な作者は置いといて、絆さんのプロフィールなのですが・・・・・・」

毬藻「今現在の容姿は葵と同じｗｗｗ」

葵「だよな～。第二次成長期が来ないと変わんないんだよな？」

毬藻「絆と特徴としましては『樹雷の水の影響はほとんど受けない』からね」

絆「影響受けないって？」

毬藻「延命効果はちゃんとあるんだけど、姿は成長すると言う事だ」

絆「ふ、ふぇ？」

葵「・・・・・・とはいっても１３８センチだけどなｗ」

毬藻「正解。二人ともミニマム確定事項は変わってないｗｗｗ」

絆「ある意味死刑宣告・・・・・」

毬藻「けど、音姫さんよりかは胸は勝ってるから」

ブゥン！！
隙間に引き込まれ、作者強制退場ｗｗｗ
※理由は聞かないでくださいｗｗｗ

葵「無茶しやがって・・・・・・」↑合掌をする。

絆「え、え～っと？」

シャイ「気にする事ではないですよ」

絆「え、ありがとう」

毬藻「はぅ～、酷い目にあったｗｗ」

葵「禁則事項を言ったあんたが悪いと思うが？」

毬藻「お茶目な事をいっただけなのに」

葵「その話しは置いといて、次は少し質問があるんだが」

毬藻「何だ？」

葵「次回の話はなんになるんだ？」

毬藻「次回は話を海鳴な変えて『A' s』にするよ？」

葵「この前の話で『とらハ３』のキャラが出てきてるから出てくるのは確定か？」

毬藻「那美さんは確定しないと久遠が出てこないｗｗｗ」

絆「久遠？」

毬藻「神に使える『狐』なんだけど『祟り』に憑かれたんだよね・・・・因みに属性が『雷』だｗ」

葵「旧リリなののユーノのポジションになるかな？」

毬藻「因みに一回だけ後書きで出てきたからねｗｗｗ」

葵「これの複線だったんだな？」

毬藻「そんなとこｗｗｗ」

葵「まぁ、良いとして・・・晶とレンはある意味ネタバレしすぎてなかったか？」

絆「どう言う事？」

毬藻「ゲーム内で年齢をばらしています（１８禁ゲーム）」

葵「それを言うならなのはのリリカル編も年齢ばらしてるし・・・おまけにクロノと・・・・・・」

次の瞬間、葵は隙間に飲み込まれた。

毬藻「無茶しやがてｗｗｗ」

シャル「大人の事情って事ですねｗ」

葵「いつつ・・・クロノ本気で殴るとは思わなかった」

毬藻「因みにどっちだ？」

葵「ハーヴェイｗｗｗ」

毬藻「現在の無印ならフェイトの位置だな・・・・・・最後までしｔ・・・」

毬藻退場ｗｗｗ

葵「だから無茶するなｗｗｗ」

毬藻入場ｗ

毬藻「中身知りたい方は『とらいあんぐるハート３リリカルおもちゃ箱』を買ってプレイしましょう♪」

葵「ちゃっかり宣伝してるし・・・・・ん？　思ったんだが『とらハ３』のメインキャラはフラグ立たないんだよな？」

毬藻「・・・・・・立たないよｗ」

葵「・・・・・・久遠は立つのか！？」

毬藻「・・・・・・今回の雑談はここまで次回はＰＶ１０万の時に会いましょう～」

シャル『既に１０万アクセスは過ぎてますが？』

毬藻「では～次回～」

葵「僕の質問に答えろ！！！」

番外編：ある日の日常（絆）（前書き）

駄目文ですがどうぞ。

番外編：ある日の日常（絆）

ん～～～
私は、ベッドから出ると大きく背伸びをした。
時刻は朝の６時２０分。
まだ、学校まで時間が有るんだけど。

「いつもは葵が朝ごはん作ってくれるけど、私も出来るって証明しないと！！」

葵の中に居たけど、料理は体が覚えてる。
あの仮想世界でも料理が作れて居たんだからこっちでも作れないとおかしいし。
私は、制服に着替え一階に降りた。

「おはようございます。絆様」

そこには、既に料理の準備が出来ているシャルティエが居た。

「葵は？」
「まだ大丈夫です。葵様は7時過ぎぐらいに起きてきますからいつもは」

あの戦いから三日しか経っていないって誰が思うだろうか。

「何を作りますか？」
「洋食と思ったけど、葵の場合はご飯がいいんだよね？」

以前聞いた時『パンだと腹持ちが悪い』と言っていたから和食を

作ろう。

「メニューはどうしましょうか？」
「ご飯と葱と油揚げの味噌汁と菜の花のおひたしと銀鮭の塩焼きがベストかな？」
「大丈夫です。それじゃ、頑張って作りましょうか？」

私は、手早く準備して言った。
味噌汁のだしは昨日の夜から昆布を入れて出汁は取ってある。
そして、時間内に朝食は出来た。

「うん、完成。味の方は大丈夫だし」

味見をしながら調理をしていったから問題は無いはず。
料理音痴の失敗する理由は『味見をしない』が多いって聞くからね。
それ以外の理由も時々と言うか希に聞かれるけど・・・

「時間は7時5分・・・起こしてくるね～」
「分かりました。料理は並べておきますね」
「うん、ありがとう」

ベッドを見るとまだ葵は寝ていた。
「うーん、何か武器は無いかな？」
私は葵が使ってる『宝石』を取った。
「えっと、『方天画戟』」
すると、一本の矛が出てきた。
多分シャルティエが召喚してくれたものだろ。
「せーの！！」
ザクッ！！
矛が刺さった先では誰も居らず、半分寝ぼけた葵が立っていた。
「絆～、方天画戟は危険だからやめろよ～」
「まだ寝ている葵が悪いんだから。ご飯の支度が出来たから降りてきてね」
「・・・・・了解」
半分、生欠伸を抑えながらクローゼットの方に行くのを確認して私は降りた。
私が降りて数分後、葵は下りてきた。
「っと、改めておはよ～」
「はい、おはようございます葵様」

そして、それぞれの席に着いた。

「それじゃ、いただきます」

「「いただきます♪」」

葵は、味噌汁に手を伸ばして飲んだ。

「うん、出汁の味も出てるし美味しいよ」

「よ、良かった～」

私はほっと胸を撫で下ろした。

「良かったですね。絆様」

「えへへ、ありがとうねシャル♪」

鞄を持ち外に出ると。

「二人ともおはよう」

そこには、音姫さんに由夢ちゃんに義之くんに流くんが居た。

「おはようございます」

「おはよ～」

私は、いつものポジションに着き、葵も男子の方に混ざった。

「絆さんは体の方は平気なの？」

「うん、最近まで父さんの親戚の方に預けられていたからまだここにはなれないかな？」

と言う事で統一しているらしい。
そしてここにいるみんなは納得してるのが凄いと思う。
桜の木と何やらしているのはなんとなくわかってるけど。
そこまで深くは考えないで置こう。
学校に着いて、音姫さんと由夢ちゃんと別れた。
学校始まって二日目だけど。

「小恋ちゃんおはよ～」
「あ、絆ちゃんおはよ～」

小恋ちゃんとお友達になりました。
小動物みたいでからかうと面白いし。
あんまりからかってはいないけど、お喋りして楽しいし。
しばらくは、お話をしながら過ごした。
朝のＨＲが始まりそうなので私は席の方に着いた。
それと同時に担任と副担任の先生が一緒に入ってきた。
朝の挨拶が終わり再度席に着いた。

「この頃、この辺りに変質者が出没しているみたいなので、帰るときは複数で帰るようにして下さい。まぁ、学校帰宅時は集団下校しますので、覚えていて下さいね♪」

さくらさんの声かけで全員は元気よく返事をした。
桜が一年中咲いてるから変質者も花満開なのかな？
一年中・・・。
ほかの連絡事項もあったが、あまり意味ないことだったので聞き流した。
葵は変質者の事では変な顔をしていたけど、気のせいだったかな？
無事にＨＲが終わり、席を立とうとしたとき。

「絆、今日の買い物は僕が行くから家で大人しくできないかな？」
葵が私の席に来て、私にしか聞こえないぐらいの音量で言ってきた。
「どういう事？」
「まぁ、勘なんだけどね。絆が出会いそうな気がする」
えっと、つまり私が被害に遭うと言うこと？
初期は有り得ないと返そうとしたけど、葵の表情は真剣そのもの。
こんな時の葵の言葉は１００％当たるのよね。
いい意味でも悪い意味でも。
「うん、分かった。後で食材のリスト上げておくから」
「了解～」

―葵ｓｉｄｅ　ｉｎ―

放課後、僕は体育館倉庫に入り、鞄からある物を取り出した。
僕は『それ』を見るなりげんなりとしていた。
正直使いたくない。
けど、まぁ～『時間視』を使ってしまったから仕方ないんだけどね。

『代わりに私が・・・・・・』

ペンダントからシャルの声が聞こえた。

「擬似化って言っても今から職員会議でしょうが」

『あ、あはは・・・・・すいません』

「どの道、しないといけないんだから」

さて、着替えますかな。

―葵ｓｉｔｅ　ｏｕｔ―

今日は義之くんと流くんも一緒に帰ってくれるみたいだ。

「今日も葵くんは忙しいのかな？」

「多分、忙しいと思うけど」

そう言いながら、流くんは明後日の方向を見ていた。

何をしてるかは知ってるってことかな？

「だから【小型の鉄槌者】と言われる異名になるんだから」

流くんはボソッと答えていた。
えっと、その異名はこの世界でも実現するのね。
取りあえず、覚えていて聞き流しておこう。

「けど、大丈夫かな？」
「心配ないんじゃないかな、葵なんだから」
「まぁ、見た目はアレだけどな」

それもそうなんだけどね。

そして、家に帰ると・・・

「あれ、早かったな？」
「あ、あれ？　葵、帰ってきてたの！？」

夕食の買い物をしてから帰るって言っていたような？

「夕食の『買い物』も終わって帰ってきたけど」

ちゃんと、買い物をして帰ってきたんだね。

「って、変質者は！？」
「あ～、きっちり駆除してきた」

げんなりした様にそう答えた。
まぁ、同類で見たくないものを見たんだから仕方ないか。

「・・・・・・晩御飯作るかなまっててな」

私は、靴を脱ぎ家に入った。

「期待してる」
「とびっきりの美味しいご飯作るんだから♪」

私は、ここで誓う。
あの世界で私を救ってくれた様に。
『兄さん』を助けると精神面と体力面の両方を。

番外編：ある日の日常（絆）（後書き）

閲覧ありがとうございました。

番外編：前世の日常（葵）（前書き）

D．C．２　P．C．以前の話になります。
多分、中を見て何の世界かは直ぐに分かると思います。

番外編：前世の日常（葵）

僕は暖かな日差しの中で一つの花を見つけた。
それは『瑠璃茉莉（ルリマツリ）』だった。

「どうしたの？」

足を止めた俺に先に進もうとしていた五人は引き戻ってきた。

「花？」
「プルンバーゴ？」

僕が見ていた花の名前の別名を音姫が言い当てた。

「葵、似あわないよ？」
「はいはい、悪かったな」

僕が立ち上がり、再度学校まで歩き始めた。
その時、僕は思い出していた。
前世の思い出と最後の日の事を。

それは、『僕』が『俺』と言っていた時の話。

「よ、稟。どうだった今回のテスト」
「何とかって所かな？」
それでも精根尽きたのか机で臥せっていた。
「稟、情けないぞ」
近づいてきたメガネの男子がそう言い放った。
「仕方ないだろ、紅薔薇先生の抜き打ちが来たんだから」
俺の近くに居る人間・・・・・人族は緑葉樹（みどりばつき）と土見稟（つちみりん）だ。
「そう言うお前はどうだったんだ。葵？」
「俺はいつもの通りだ」
「お前のいつも通りといわれても・・・アニメ・ゲームオタクのお前が言ってなａ（ｒｙ」
ゴズ！！

神速の拳が樹の腹に入った。
しかも鳩尾にジャストミート。
「俺が言うのもなんだけど、土見ラバーズの皆さんが心配してるぞ？」
俺は鞄の中から、紙パックの飲み物を取り出した。
「コーヒー牛乳だけどこれをやるから」
「え、あ～悪いな」
「さて、俺は行くから」
「そう言えば、葵は生徒会だったな？」
「書記だけどな。さて、行くな」
鞄を持ち、教室を後にした。

生徒会長室に着くと。
「あ、遅いですよ」
そこには、一人の女生徒がいた。

少しだけムスッて顔をしているけど。

「副会長とかは？」

「他の仕事に行きましたよ。葵殿が最後ですよ」

「ごめんごねん、稟たちと話しをしていたら少し遅くなったね」

じーっと俺の方を見ていた。

その目線は物凄く嫌なんだけど。

「あ、あははごめんね。生徒会長様」

その言葉にますます不貞腐れていた。

「・・・・・葵殿は意地悪です」

俺は椅子に鞄を置いて生徒会長を後ろから抱きしめた。

「遅くなってごめんね。瑠璃（るり）」

「そうされると、怒ってる事がバカバカしくなります」

そして、表情はいつもの穏やかな表情となっていた。

俺の恋人でこの学校の生徒会長の『瑠璃＝マツリ』先輩。

まぁ、実は恥ずかしがり屋の彼女をどうやって落としたかのは、

ここでは話さないでおこう。

「その前に仕事を片付けましょう。お喋りはその後で一杯しましょう」

「そうですね。それでは、そちらの書類をお願いします」

席に着き、書類の方を目を通し始めた。

まだ、学園祭が遠いのでそこまで忙しくはない。

「葵殿、どうですか？」

その声で顔を上げると、瑠璃が俺の席のところに来ていた。

「俺も終わったよ。お茶を入れようか？」

「いえ、もう閉まる時間なのでそろそろ出ましょうか？」

時計を見ると7時を回ろうとしていた。

確か門が閉まる時間は7時だったな。

「そうですね。学校を出ましょうか？」

「はい」

靴箱まで出た後、校門の前で待った。そして、直ぐに瑠璃も出てきた。

「では、行こうか？」

「はい」

俺たちは、学校を後にした。

「稟の護衛は大変？」

「大変だけど、それなりに充実してます」

優しい笑顔をしてると言う事はやりがいが有ると言う事だろう。

「そうでした。明日少し手伝って良いですか？」

「手伝いって、生徒会の事？」

「はい」

少しだけ考えるフリをした。

「明日は用事がありますか？」

心配そうに瑠璃が俺の顔をを覗き込んでいた。

「何もないですよ。では、校門で待ってるから」

そんな約束をしながら俺たちはいつも別れる道で離れた。

次の日、学校の正門の前の木陰で休んでいた。

瑠璃との約束の時間までもう少しあった。

「みゃ～、みゃ～」

「ん、猫の鳴き声？」

微かな声だったが丁度聞き取れた。
そして、辺りを見渡すと、木の上で子猫が怯えていた。

「あらま、大変な変な事になってるな」

鞄に本をしまい、学校の塀に乗り移った。
猫が乗っている木の幹はそれなりに太いので大丈夫だな。
その木に乗り移り、猫がいる枝まで体を伸ばした。

「ほら、ここは危ないぞ？」

俺は、枝の木を持ち猫を回収、子猫も暴れる事はなかったのだが。

ボキッ！！

手に持っていた木の枝が幹の方からポッキリと折れた。

「ここの高さって二階弱の高さ！？」

俺は、とっさに猫を庇う形になり背中から落ちた。

それからの記憶は無い、天子に会って『D．C．？　P．C．』の世界に降り立った。

「葵？　なにボーっとしてるの？」

その言葉にハッとした。

いつの間にか『記憶の中』に意識をトリップしていたのか。

「本当に大丈夫？」

他の人も心配していた。

「大丈夫、大丈夫。止まってると遅刻するぞ」

前世の事を心配しても仕方ない。

そして、僕は『今』を生きているんだから！！

番外編：前世の日常（葵）（後書き）

閲覧ありがとうございました。

番外編：お酒は丸め込ませる力がある（酒豪限定）（前書き）

今回は雨季さんとコラボです。
シナリオ形式なのでご了承下さい。

番外編：お酒は丸め込ませる力がある（酒豪限定）

※シナリオ形式です。

要「よ、久しぶりだな」

絆「・・・・・・どちら様ですか？」

※面識ありませんｗｗｗ

葵「・・・・・・何処のどちら様ですか？」

※こちらも面識ありませんｗｗｗ

要「おい、真面目に言ってるのか？」

葵「あの～、至って真面目なんですけど？」

要「おい、作者！！事前に説明したのか！？」

※しましたけど、そっちでも会ったこと無いので無謀だと思います。

葵「神（作者）と普通に会話してるのを始めてみた」

要「いや、一回だけどあった事は有るぞ？」

葵「えっと、ありましたっけ？」

要「霊亀の所のダイジェストの紹介で一度だけだけどな」

※確認中・・・・・・あぁ、ありましたねｗｗ

葵「ありましたね。それでは、初めましてになりませんね？」

要「んで、隣にいるのは彼女か？」

隣にいる子・・・僕は絆を見た。
何か頬を赤くしてるんですかど？

葵「違いますよ。妹ですよ～」

絆「葵の妹の『槻月（きつき）　絆（きずな）』です。改めて宜しくお願いします」

要「俺は一条要だ」

玄関前で話すのもなんだので、家の中には入り居間でお茶をしながら話に突入した。

要「そう言えば、あいつの小説に出のは・・・・・・流か」

葵「流ですね。とりあえず、バグ程度は強いですよ～」

要「葵は強いんだよな。補助型チートだし」

葵「僕はあくまで『補助』ですから攻撃特化ではないですよ？」

要「・・・・・戦闘したくないからって、逢って直ぐに『絶対命令』を使うものではないと思うが？」

やっぱり気がついていたか。

絆「凄い、気が付いていたんだ」

葵「悪かったと思ってますよ。だから、今回のお土産はこれです」

机の下から出したのは三本の焼酎瓶だった。

要「ってこれは！？」

葵「限定物の『森伊蔵（もりいぞう）』と『魔王』と『赤兎馬（せきとば）』をあげますから～」

※この三本の焼酎は全て鹿児島産です。魔王と森伊蔵はかなりの人気酒で森伊蔵は獲得倍率が１０００倍と言う一品物です。
飲んでみたい方は日本航空国際線で採用されている芋焼酎ですのでそちらでお願いしますｗｗｗ

葵「鹿児島産の芋焼酎です～。因みに入手困難な酒が『魔王』と『森伊蔵』です」

※作者も家にこの二つはありますｗｗｗ

要「サンキューな♪」

要さん、少し上機嫌になってるのは気のせいだろうか？

葵「そろそろ時間みたいですね～」

要「今度来た時は一戦お願いするな！！」

葵「分かりました」

そして、要さんは自分世界へと帰っていった。

番外編：お酒は丸め込ませる力がある（酒豪限定）（後書き）

次回はリオン様とのコラボです。
閲覧ありがとうございました。

番外編：平行世界のチート（前書き）

今回はリオン様とのコラボです。
駄目文ですが見てください。

番外編：平行世界のチート

この話は、シャルティエがまだ暴走を犯す前の話。

「葵～、お腹すいた～」

机にうつ伏せになってるぷららが居た。

「そろそろお昼だね。何か作ろうか？」

「御蕎麦が良い！！」

ぷららは元気良くリクエストをした。

「狐そばと月見そばを作ろうか？」

僕は、席を立ち上がろうとした時。

「多次元転移が来る！？」

ぷららの言葉に驚いた瞬間、一瞬時間の感覚が途切れた。

「輝羽！！」

『うん、場所を確認・・・・・・枯れない桜の前だよ』

その言葉に携帯を取り出した。

「輝羽ポイント転送をお願い」

『はーい。携帯端末物理転送起動・・・・・・空間転送！！』

次の瞬間、そこに葵の姿は無かった。

「って、着いた。調査が終わるまで空間隔離結界魔法と次元隔離結界魔法を展開」

次の瞬間、景色の色がモノクロになり、空間が凍結した。

「さて、問題は一体どうやってこの世界に同調したのやら」

トゥードさんの能力でもないんだけど。

『右舷４５度！！』

シャルティエの声で体を深く沈ませた瞬間、光が通った。

「っつ！！　セイ！！」

蹴りを襲ってきた者に食らわせ後ろに吹き飛ばした。

「ガードが間に合ったみたい・・・・・ダメージは全然無いみたい」

「はぁぁぁぁ！！」

二つの短剣を精製して、再度突撃してきた。

「あの剣の柄の形ってまさか」

干将と莫耶だよね。

この世界では、まだ無いはず。

同じように二つの剣を発頸で粉々に壊した。

「投影開始（トレース オン）」

今の言葉で理解した。

あの力は『フェイト』の世界の能力だ。

再度、干将と莫耶を相手が握り、攻撃を仕掛けてきた。

「こっちも使うしかないな・・・『投影開始（トレース オン）！！』」

同じように双剣を作り上げたが。

「・・・・・竜の一振り」

知ってるは知ってるんだ。

そういって、後ろに吹き飛ばした。

「竜が鍛えし紀剣、九頭龍双剣」

知ってる前にこんな物を投影する人は居ないだろうな、普通は。

約束されし聖剣（エクスカリバー）が結構有名じゃなかったか？

違った、宝具庫が一番近くなかったが？

「黒き剣を降らしても大丈夫だろうか？」
『それはそれで駄目でしょうが！？』

あ、あはは・・・やぱっりか。

「く、埒が明かないな」
「さて、本気で行くか！！」

「「シャルティエ、ｓｅｔ　ｕｐ！！」」

『『ｓｔａｎｄｂｙ．　ｒｅａｄｙ！！』』

って待て！！！

『同じ名前ですね～』
「のほほんとしてる場合じゃないだろ！？」
『王の財宝（ゲートオブバビロン）』

うげっ、あの金髪の王が使う技（ギルガメッシュ）じゃあないかよ！？

『シャル、第二形態移行【龍王の籠手】！！』

剣が一気の籠手に変化した。
「光鷹翼(こうおうよく)三枚展開！！」
一枚は防御用と他二枚は双剣に変化した。
『スピードブースターセットします！！』
「いけ！！」
その言葉に全ての剣が一斉に葵の方に飛んでいった。
「うがぁぁぁぁぁ！！！！！」
しかし、それを気合と根性で全て反らしていく。
「ば、化け物か！？」
化け物扱いは酷いな、あんたも同じものだけど。
そして、再度剣を持ち直した。
『今、輝羽ちゃんから連絡であの人は平行世界から来た【魔法使い】です』
「流石にあっちが【最後の切り札】を使『魔力増大！！』阿保だろ！！」
僕は、とっさに手を翳した。
「他の者の魔力・能力の使用を一切『拒否』する！！」
次の瞬間、急激に高まった魔力が消え去った。

「な、何がどうなって・・・・・・」
「これ以上の殺生は意味ないだろ。『水無月悠二』さん？」
「なっ！？」

そういって、近づいた。

『敵では・・・無いですね？』
『敵ではありませんよ。その前に、敵にされては困りますし』

シャルティエはシャルティエの言葉に対して答えた。
うん、同じデバイスの名前はややこしい。

「改めて自己紹介。僕は『槻月葵』だよ。ちなみのこの初音島の魔法使いと言ったほうが良いかな？」
「おい、待て。さっき使った力は・・・・・・」
「あれは、夢幻書庫の能力でそこからこちらに引き出して力を使ってるんだよ」

その答えに、少し驚いていた。

「僕も『フェイト』は劇場版なら良く知ってるしね」

ゲーム方はした事は無いけど。

「まぁ、士郎（アーチャー）の固定結界出されると厄介だったけどね」

それをする前の力を発動したけどね。

「それに力を消したのは一体何なんだ？」

「あぁ、あれは『絶対命令（ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｉｎｓｔｒｕｃｔｉｏｎ）』で、全ての効果能力を限定して消す事ができる優れた先天性の能力です」

その言葉に、悠二は唖然としていた。

その前に、僕は『補助型のチート』なんだけどね。

『水無月悠二さんの平行次元のゲートが開通可能になりました』

すると、枯れない桜の前に門が出現した。

「なぁ、また逢えるか？」

「今度は、襲ってこなければ・・・な」

そして、元の次元に返っていった。

それと同時に結界も解いた。

『葵様、早くしないとぷららさんがお腹すかせますよ？』

「おっと、忘れてた」

そう言って、葵は急いで家に帰った。

番外編：平行世界のチート（後書き）

次回から、通常に戻りたいと思います。
『A' s』は何処まで書けるか分かりませんがよろしくお願いします。

今回の閲覧ありがとうございました

二十五話：始まりは図書館から（前書き）

駄文ですがよろしくお願いします

二十五話：始まりは図書館から

「葵くんに絆ちゃん、あっちに行っても頑張ってね」
「何かあったら電話してね」

フェリーの船着場でさくらさんと由姫さんがそう言ってきた。
「大丈夫です。二人とも無理はしないでくださいね？」
「モーマンタイ！　無茶はしないよ。そこは心配しないで」

そう言って微笑んでくれた。

ボーーーーー！！

船の汽笛が鳴り響いた。

「それではいって来ます！！」

これが、昨日の話しで無事に高町家に着いた。
次の日である。

僕は、眼が覚め・・・・・・何故か横から石鹸の香りがするんですけど?
ゆっくりと布団を上げると。
「すぅ～、すぅ～・・・・・・」
「うにゅ～・・・・・・」
絆となのはが寝ていた。
何で僕の部屋に二人が寝ているんだ!?
確か、鍵は掛けたような気がするんだけど?
《多分、絆様の技能ですね》
ペンダントになっているシャルが少し呆れたように答えてくれた。
「・・・・・・誰だ、こんな技能を仕込んだ奴は?」
《・・・・・・夢幻管理にアクセスログが残ってますが》
「えっと、つまり?」
《管理権限が出来るって事ですね》
その言葉に呆れるしかなかった。
取りあえず着替えを二人が寝ている間に済ませて、一階の方に降りた。

そして、そこには・・・・・・

「おっす！　おはよう」
「おはようさん、昨日はよう眠れたか？」

そこには、なのはの『スバル』と『はやて』の前進となった二人がそこに居た。
フォン・レンフェイと城島（じょうじま）　晶（あきら）が朝食を作っていた。
レンは確か『風』の拳法の使い手で結構上位の力を使いこなせるけど病弱で激しい運動は5分が限界だ。
晶は、空手を習っていてこれの上位入賞者の実力はあるがレンには負けている。
この二人は犬猿の中だけど、割かし仲は良いと思っている。

「けど、朝が結構早いな・・・・・・三人ならもう少しで帰ってくると思うよ」
「あ、僕も行けばよかった」

この世界で生きた剣術家（同系統）がいるんだから参考にすればよかった。

「無理やで、あの人達は門外不出で教えてくれんで」
「あぁ、技を盗む事も難しいかもな」

まぁ、興味本心の人なら教えないだろうけど。

「ただいま～」

話していると、外に出ていた三人が帰ってきた。

「お、起きてたんだ」

台所に恭介、美由希・士郎が入ってきた。

「士郎さん、練習に行くなら誘って下さい」

「すまんすまん。なのはと絆ちゃんが寝ていたからな、起こすにも起こせなかったんだよ」

「・・・・・・それなら仕方ないですけど、今度からは誘って下さいね？」

「あぁ」

そんなやり取りをしてると。

「もしかして同じ使い手ですか！？」

レンが興味信信に聞いて来た。

「うん。けど、正統は継いで無いからね」

本来なら、正統者との一騎打ちで勝って初めて御神の剣士として認められる。

「さて、食事にしようか。葵くんは二人を起こしてきて」

「わかりました」

そのあと少し遅めの朝食を頂いた。

その後、桃子さんや士郎さんは翠屋の方へ。

美由紀さん達も同じくお店の方へお手伝いに行った。

絆はまだ荷物の荷解きが終わってないって事で部屋の方に戻った。

なのははその手伝いで一緒だ。

「フィアッセさん」

丁度、店に向かおうとしているフィアッセさんを呼び止めた。
僕は、とある場所を聞いた。

それは・・・・・・

【市立図書館】

開いていたので、僕は中には入った。
確か、こっちの方であっていた気がするんだけど？
そう考えながら歩いていくと遠目で目的の人を発見した。
その子は車椅子に乗りながら図書館内を動いていた。
休みの日は図書館に来ていたからもしかしてと思っていたけど・・・・・・ビンゴだね。
現・闇の書の主で機動六課設立の人物の一人。
八神はやて。

魔法の痕跡・・・・・『闇の魔道書』はちゃんと発動していた。
確か、魔道書の魔力のせいであぁなっていたんだったよな？
僕の力を使ったとしても意味は無い。
さて、本人確認したし帰ります・・・・・って！？
帰ろうとしていた時、はやての前を歩いていた司書さんが大量に持っていた本をばら撒いた。
はやてはそれを避けて急ターンをしたがそれがいけなかった。
車椅子のバランスが崩れたのだ。

「ってマジかよ！！」

僕は、無意識に走り出した。

「（くっそ、間に合え！！！！）」

ドクン・・・ドクン・・・・・・

僕は意識を集中した。
次の瞬間、周りの景色は色を無くしモノクロに見え始めた。
そして、世界は『コマ送り』みたいになった。
ギリギリに地面に当る前に抱きかかえたのだが。
左足を丁度車椅子と地面の間に挟まらした。
そして、それと同時に世界は色を取り戻した。

「ぐっ・・・・・・」

挟まった足は激痛に襲われた。

「えっと、あれ？」

丁度、お姫様抱っこされているはやては驚きながら自分がどうなっているか判断しているのだろう。

「はぅ、間一髪です」

「え？」

そして、次々と人が集まってきた。

司書さんも慌てて駆けつけてきた。

「えっと、立てる・・・わけないね」

僕ははやてを抱えたまま右軸で立ち上がった。

先ほど、少し左に体重を乗せた時激痛が走った。

「（足首が回せるから骨折ではないけど、挫いたか最悪は皹が入ってると思う）」

立て直してもらった車椅子にはやてを乗せた。

「怪我が無くって何より、それじゃ行くね」

挫いてる事を隠すようしてその場を後にした。

図書館から出てから人が居ないところに行った。

「えっと、誰も来ないよな？」

薄暗い路地に入ってから一呼吸置いた。

「夢幻書庫権限起動、使用タイトル『まもって守護月天！』召喚具『支天輪』」

すると、天輪が出てきた。

「サックってお願いするか【来々、長沙（ちょうさ）】」

小さな星神（薬品を持っている）が召喚された。

足の挫いた所を治療してもらい溜息をついた。

長沙は治療の星神である。

治療が終わり、支天輪を直してその場を後にしようとした時。

「は、離して！！」

「ちょっと！　離しなさいよ！！」

子供の声が聞こえ、その声の方を見ると。
少女が二人、黒塗りの車に強引に乗せられそうになっていた。

「・・・・・・って、あの二人って」

その二人は見覚えがある人物だった。
見覚えがあるって言うか、なのはの親友だよな。

「すずかさんとアリサさん・・・だよな」

僕は、頭を悩ました。
予想としてはこれは色んな意味でたたのかな?

「友達は助けないといけないな?」

確信した。
この運命は【逃げる】事が出来ないと。

二十五話：始まりは図書館から（後書き）

閲覧ありがとうございました

二十六話：誓い（前書き）

久々の更新になります。

葵「二十日ぐらい開いたな何していたんだ？」

ＷＳの方に情熱を注いでましたｗｗｗ

葵「しかも、ヴァンガードで巫女デッキ作ろうとしてるだろう？」

聞く耳持ちませ～ン

では、駄目文ですがどうぞ。

二十六話：誓い

輝羽の転送システムで敵のアジトの近くまで移動していた。

「一人は【一般人】ともう一人は【夜の一族】か」

リリなのととらハが混ざってる状態なら可能性的にはあるか。
すずかはそもそもまだ発動はしてないしな。
そう言えば、リリなのでは忍さんの血が繋がってるんだよね？
その考えで冷や汗が出た。
僕も搾り取られるのだろうか？

※多分この話を知ってる人は【とらハ3】をやってるって事でしょうｗ

力が近いと言えば【吸血鬼】と【猫】を足して2で割ったような感じかな？
取りあえず、二手に分かれた方が良いんだけど、僕一人しかいないんだけど。
まぁ、完全な【鏡】は出来るのは一つしかないな。

「夢幻書庫使用。使用タイトル【C．C．さくら】使用武装【『鏡（ミラー）』のカード】と【封印の杖】」

そう唱えると、葵の右手には『鏡（ミラー）のカード』と左手には『封印の杖』が握り締めてあった。

鍵の状態ではなく杖の状態であった。

「少しだけ力を貸してくれ・・・・・・『鏡（ミラー）』！！」

すると、葵の容姿と瓜二つの男の娘が居た。

「何となく、女装させくなる理由が分かる気もするけど」

今はこんな事してる場合じゃないな。

「僕はすずかを助けるから、君はアリサの方をお願い」

そう言うと、僕（ミラー）は小さく頷いた後、小さく跳躍した。

「救出作戦開始としますか！？」

「くっくっく、まさかあの血が手に入るとわな」

男は不気味な笑い声を上げていた。

「んー！　んんー！！」

口に猿轡（さるぐつわ）を付けられ喋る事ができない。

「あっちに少女は身代金を要求するだけは役に立ちそうだな」

そう言って、注射器を取り出した。

「お前みたいな『化物（ばけもの）』は実験道具がお似合いだよ」

「・・・・・・黙れよ。糞爺！！！」

次の瞬間、男は横に吹き飛んだ。

【絶招（ぜっしょう）・浮月双雲覇（うげつそううんは）】

ほぼ、風で打ち出す技なので相手にはあまりダメージは少ない。

壁に当るとダメージはかなり食らうけど。

「だ、誰だ！！」

「・・・・・お前みたいな悪党に名乗る名前は無いが、一言だけあれば」

僕は、すずかを見た。
すずかは驚いている表情をしていた。

「この子の友達ということかな？」
「そんなばｋ・・・・・・」

男が言いそうになった言葉を僕は頭を抑え言葉を言わせないようにした。

「黙れ！！　次言ったらお前が【生きてる事】を【否定】してやる！！」
「ほう、やれるものならやってみるが良い！！！」

男もやけくそだな。
なら、望み通りにしてやるよ。

「汝、生涯に人から認知される事・存在する事を【拒否】する」

次の瞬間、男は煙の様に消え去った。
ある意味で、死刑宣告だ。

「すずかさん、大丈夫？」
「わ、私は平気だけど・・・・・・今のは一体？」

ま～、目の前で力を使ったんだから聞いてくるのは道理か。

「その話はまた今度・・・・・・迎えが到着したみたいだね？」

途中で鏡（ミラー）とアリサと合流した。
鏡（ミラー）は人にばれぬ様に解除した。

「皆は大丈夫？」

そこには、ノエル・恭也・忍そして、さくらがいた。
さくらと入っても『綺堂さくら』の方である。
なんで、俺の知ってる作品に【さくら】って名前が多いんだ？
そこを言っても仕方ないんだけど。

「うん（平気です）」
「葵の方は無事か？」
「何とか。けど、一族の問題を他人に関わらせないで欲しいと思うよ」

それで存在を消したんだけど。
しかし、その言葉に反応した五人が居た。
迎えに来た三人とすずかだった。
ノエルさんは感情が分かりませんが。

「けど、もう大丈夫だと思いますよ」
「えっと、大丈夫って？」
「全員伸びてます。後は警察なり裁判所なり突きつければいいと思いますよ」

裁判所は違うか。

「流石は葵か」
「まだまだです」

その後、アリサは鮫島さんが来られ先に帰宅。
僕はというと・・・・・・

月村邸に拉致されていた。
理由は至極簡単な事だ。
夜の一族について知ってるからだ。
ここに恭也さんが居るって事は。忍エンド確定って事か。
まぁ、本来の忍エンドとは全然違うけど（とらハ３経験者談）

「まぁ、その理由は何となく理解した」

かなりの部分を端折ったけど（自分の能力とか）理解はしてくれた。
この次にくる行動が理解できるんだけど。
確か【誓い】だっけ？
この場合は秘密を共有する意味合いが強かった気もするんだけど。

「君が選択する項目は二つ。全ての事を受け入れ夜の一族と共に生きていくか全てを忘れてこの場を去るかの二択ね」

忍さんはそう言ってきた。

恭也さんが居るって事は前者を選んだって事だ。

「後者は考えは無いですね。友達を助ける事はあたり前の事ですから」

「なら、誓って・・・自分の言葉でいいから」

僕は暫く考えて。

「ずっとは無理だけど、そばにいる間だけは護る事を誓うよ・・・・・僕の魂と想いにかけて」

その言葉に恭也とノエル以外は驚いていた。

しかし、直ぐに表情を戻した。

「・・・・・誓ったわね」

静かにさくらは答えた。

「なら、すずかの護衛は葵で充分だな?」

「恭也さん!?」

その言葉にすずかは驚いていた。

「大丈夫だ。葵の場合は俺よりか強いし、それに・・・・・」

少しだけ言いよどんで。

「俺と同じ御神の剣士だ」
「そ、そうなんですか！！？」
「こんな小さな子が！？」

小さいは余計です。

「そう言えば父さんからの言う事があった」

そう言って、恭也は咳払いをした。

「永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術の皆伝だそうだ」

その言葉に俺は驚いていた。

「それって・・・・・・本気ですか！？」

その言葉に恭也は無言で頷いた。

「時間が時間だし・・・・・・晩御飯はうちで食べない？」
「そうだね。ノエルお願い」
「・・・・・・分かりました」

そう言うと、ノエルはその場を後にした。

「葵、その足はどうしたんだ？」

恭也の言葉で足元を見ると腫れ上がっていた。
図書館での治癒後にアレだったからすっかり忘れていた。

「わ、私、氷嚢を持ってくる！！」

すずかは一目散に部屋を後にした。

「恥ずかしがってるわね、すずか」

「いきなり共有する人が現れたんだからね」

後で、護衛用の式紙を用意しないといけないかな？

てか、そんな奴っていたっけか？

『（葵、私のことを忘れないでね～）』

念話で輝羽が話しかけていた。

『（監視なら私がするから緊急事態になれば呼べばいいでしょ？）』

流石に暗具とかはすずかに持たせられないし。

そして、騒がしい一日は過ぎていった。

その後の話で僕の通学路はなのはの家ではなく月村家からになったのは言うまでもなかった。

二十六話：誓い（後書き）

今回は『誓い』なのですずかと誓いをしてみました。

輝羽「けど、この誓いってなのはでは存在してないんじゃないんだっけ？」

存在はしてないよ。
この『誓い』は夜の一族サイドでしか話が出てこない話だし。
だからあえて、すずかの話になって『夜の一族』なのでこの『夜の一族との誓い』は外せなくなったのよね～
問題としては『なのは』でこの話がまだ有効かどうかになるんだけどね？

輝羽「『とらハ3』の話が融合してるのだから『有効』なのは確かではないかな？」

ある意味、ここで書いてなんだけど・・・・・夜の一族の『心髄』ってノエルだった気がするんだけど。
そこの部分は番外か何かで書いていこうと思うんだけど。
『ノクターン』でも有効かな？

輝羽「それはやめなさい。駄文がさらに酷くなるから」

・・・・・精進します。
では今回はここまでです。
感想お待ちしてます。

第二十七話：晴天の書（前書き）

復活の一発目がこれとは夢にも思いませんでしたｗｗ
拙い文ですが、最後までよろしくお願いします。

第二十七話：晴天の書

無事に編入がすんだのだが。
好奇心の目というか色々あるんですかど?
この一週間は色々の事があった。
一番の事は『なのはのリンカーコアが蒐集された事』だ。
僕がその場に居合わせなかった理由が『物語の矛盾に繋がる』という事だ。
なのはＳｔＳに入らなくなるからだ。
今回は極力（最後の方は介入するけど）関わらないようにすると決めている。
実は時空管理局のリンディ艦長やクロノからの打診もあったが今回は蹴った。
クロノは不服そうであったが。
そのときの理由としては。

「内部掃除（時空管理局・地上部）に一役買ってくれる子が居ますから♪」

この言葉に納得したリンディ艦長は驚いたけど。
暫く考えた後、理解してくれた。
まぁ、【三賢者】が問題なんだけど、そこはもう少し時間がたってから考えよう。

放課後、僕は先に家に帰った。
すずかに何かあった時は輝羽が連絡を入れる手はずになっている。
部屋で着替えている時、携帯が鳴った。
番号を見ると【朝倉家】と書いてあった。
まだ夕方前だし、定時連絡はまだのはずだけど。
通信ボタンを押した。

「はい、もしもし？」
『葵ちゃん、流くんを助けて！！！』

それは、少女の叫びだった。

「ちょ、ちょっと待って。一体何がどうしたの？」
『流くんが・・・・・・流くんが・・・・・・』
「・・・音姫さん、一体何があったの？」

『葵くん、さくらだけど・・・・・・』

そして、次に電話を変わったのがさくらさんだった。

「さくらさん、状況を説明をして」

『流くんが時間魔法を使ったら目を覚めなくなったの・・・・・・今日で一週間』

「そっか・・・・・・今から空間転送でそっちに戻るから。大丈夫、ちゃんと目を覚ますから心配しないでって皆に伝えて下さい」

僕は、心配させない様に優しく答えた。

『うん、待ってるから』

そして、通信ボタンをきった。

急いで着替えて、下に降りた。

「恭也さんはまだ帰ってないですか？」

下で夕ご飯の準備をしていたノエルとファリンがいた。

「まだ帰宅しておりませんが・・・どうかなされましたか？」

「恭也さんが戻ったら家を空かせますと伝えて下い・・・・・・あと、晩御飯はいらないので」

僕は一礼して外に出た。

「輝羽、超長距離転送！！」

『行くよ！！　転送！！！』

次の瞬間、空間が揺らぎそこに吸い込まれるように進入した。
そして、着いた場所は芳乃家の玄関の前だった。
流の部屋に入ると音姫や由姫さん、さくらさんの面々が居た。
流の状況を見て直ぐに理解した。

「時詠みの魔道書とのだけ契約してないからこんな事になったのか」
「葵くん、何とかならないの？」

不安そうにさくらが聞いて来た。

「方法はある」
「ほ、本当に！？」

音姫の言葉に僕は頷いた。

「流の深層にアクセスして強制的に魔道書と契約をする」
「ちょっと待って！！　そんなことしたら葵くんは！？」
「大丈夫です。サポートに輝羽が着いてますし・・・・・・緊急処置もしますから」

そう笑って、皆を安心させた。

「なぁ、流。そろそろ戻ろうか、大切な『友達』と『家族』が心配してるぞ？」

そう言って、流の心臓に手を当てた。

「・・・・・・嘘ついてごめんなさい」

その言葉にさくらと音姫が驚いた声で顔を上げた。

心臓に当てた手を引き上げた。

「強制リンク！！！」

次に瞬間、眩い光に包まれた

「「――――――ん！！！」」

最後に何か音が聞こえたが僕の耳のは届かなかった。

暗いって言うのが第一印象だ。

まぁ、意識の深層域なのだから仕方ない。

「・・・・・あれ、葵？」

そこには体が光ってる流が居た。

「やっと、見つけた・・・・・」

「やっと見つけたって・・・ここは何処なんだ？」

そう言いながらキョロキョロとしている。

「流の意思の中だ。まったく、さくらさんや音姫さんが心配してるぞ」

「けど、ここからどうやって？」

呼び出すしかないでしょうが・・・・・夜天の書の双子の魔道書。

はやての魔道書が『夜』なら流の魔道書は『晴』

「そろそろ、かくれんぼは終わりだと思いますよ。『晴天の書』さん？」

すると、流の中から光が生まれ、それが外に出てきて徐々に人の形を形成する。

「流石は、『見る側だった人間』という事だったでしょうか？」

流石に別名が『時詠みの書』と言われている魔道書だ、僕の事も知ってるって事か。

「知ってないと色々大変ですよ。『マイスター』葵様？」

あ～、お願いその名前で呼ばないで。

「まぁ、良いです。貴方の名前を問います」

「え、あ～『桜内(さくらい)　流(ながれ)』ですが？」

とっさに聞かれ、言い返した。

「良い名前です。お願いがあります、私に『名前』を下さい」

その言葉で暫し沈黙。

そして・・・・・・

『シャイン・フォース』

「君の名前だよ。聖なる光、ぴったりだと思うよ」

「ありがとうございます。我が主(マスター)」

そして、次の瞬間世界は光に包まれた。

『我が名は晴天の書・・・【シャイン・フォース】』

「我の名は【桜内　流】融合騎【晴天の書『シャイン・フォース』】と契約する者なり！！！」

光が一気に溢れた。

「・・・・・・終わった？」

すると、流の頭の横には魔道書が置いてあった。

「これで、万事解決かな？」

「「そんな訳あるか（ないよ）！！」」

両サイドからさくらと義之が怒鳴りあげた。

「あの一言は本当にびっくりしたんだから！！」
「へっ？　一言？？」
「いきなり『嘘ついてごめんなさい』とか言われたら驚くぞ！！」

あぁ、あれか。

『リンクでは行けなくって強制リンクなったんですよね？』

聞きなれない声が聞こえ、その場に振り向くと小さな精霊が浮いていた。
いや、精霊ではない『魔道書』だ。

「シャインちゃんのプロテクトが頑丈すぎるんだよ！！」
『葵様が他の方法で入ればよかったし・・・絶対とかで』

防御をなくしても良かったが皆が居る状態で使うのもどうかと思うんだが？

「ともかく、今後は安心か？」
『いえ、そうでもないです。夜天の書の状態が【闇】に染まりきってるですよ！！』

そっか、そう言えばまだ触れていない状態だったな。

「シャインちゃん、夜天の書の事はもう少し待て・・・・・元に戻すから」

そして、暫くして。

『判りましたです。宜しくお願いしますのですよ葵様♪』

そういって、魔道書の中に戻った。

「あ、葵・・・今のは？」

義之は恐る恐る聞いて来た。

「危害は無いよ。あれは流の融合騎・・・・・・『シャイン・フォース』仲良くしてくれよな」

その後僕は時間が無く直ぐに月村家の戻ったのだが・・・・・・三人に見つかり御仕置きのコスプレ大会になったのは言うまでもなかった。

第二十七話：晴天の書（後書き）

御閲覧して下さり誠にありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

第二十八話：これはフラグでしょうか？（前書き）

拙い文ですが見てください。

第二十八話：これはフラグでしょうか？

次の週に驚きの二人が転入してきた。

「アリシア・テスタロッサです」

「フェイト・テスタロッサと言います。宜しくお願いします」

あ、あれ・・・二人ともミッドの方でプレシアさんと暮らしていたんじゃないの？

その理由は念話で教えてくれた。

「（なのはちゃん達の護衛？）」

「（うん。今なのはちゃんとフェイトちゃんのデバイスは絶賛修理中で今は私が二人の護衛なの？）」

数学の時間、大体解答がわかるアリシアと僕は念話で話していた。

「（壊した相手って剣と鉄鎚？）」

「（うん、そうだよ。しかも、二人とも『ベルガの騎士』って言っていたみたい）」

ベルガの騎士でその武器を使うのはあの二人しかいない。

シグナムとヴィータの二人。

その横から『保管室の変態』と『変態の獣』がいたっけ？

正確には『盾の守護獣』と『湖の騎士』だったな。

何か変な電波が拾うから危ないな。

「（敵の潜伏先は分かったの？）」

「（それが全然、全力で探してるんだけどね～）」

まぁ、管理局の提督が隠蔽してるんだからそんな簡単に捕まったらお終いだし。

「（ね～ね～、お願い！！　手伝って欲しいの！！）」

手伝って欲しいと言われても、どう考えてもまだ介入する訳もいかないしな。

「（今は無理。まぁ、助言だけなら・・・・・・ギリアム提督は埃を叩くと色々出てくると思うよ）」

あ～、我ながら大胆なヒントを出したな。

「（う～ん、取りあえずはリンディさんに報告してみる）」

念話の会議は終わり、僕は授業に集中した。

昼休み、全員（絆や僕も含む）は屋上に集まった。

「まっさか二人が転入してくるなんて思わなかったわ」

「少し事情があってね」

流石に『魔法関係』とは言えない。

「葵の場合はすずかの家に居候先に変わるとは思わないし」

それはあれです、一族と個人の事情が強いです。

「すずかも良く了解したわね。男の子を居候させるなんて」

「そ、そうかな～」

苦笑いしながらお弁当を食べていた。

「ねえ、葵は何で惣菜パン？」

「あ～、恭也さんが気がつかないまま僕の弁当を持っていったみたいなんだ」

しょうがないので近くのコンビニにダッシュで駆け込んでなけなしのお金でパンを購入。

絆の手には桃子さんお手製のお弁当があった。

中身は美味しそうだけど、取るのも行儀が悪いしな。

今日みたいに同じ事が続くなら、さくらさんに入金をお願いするしかないかな。

「はい、これ」

声に反応して顔を上げると、絆が自分の弁当のおかずのいくつかを弁当のふたに乗せて渡してきた。

「どうせ午後の授業中にお腹鳴ると恥ずかしいので・・・無理ならいいですけど」
「あ～、大丈夫。丁度惣菜パンだけで足りるから」

丁度、パンを食べ終わり席を立った。

「ノエルさんの少し大目の夕食を言えばいいし」
「あれ、どっかに行くの？」
「ちょっとな。直ぐに戻ると思うけど・・・・・」

－すずかｓｉｄｅ　ｉｎ－

葵くんはそう言って走り出した。

「あ・・・・・・」

私は呼び止める事は出来ずそのまま走っていった。

「・・・・そう言えば、すずかちゃんのお弁当箱の中身結構量が多いよね。女性の量としては・・・・・・」

「え、えっと・・・・・・そ、そうかな？」

「何となく予測は出来るけどね♪」

流石、葵くんの妹さん、判ってるのかな？

「ねぇ、絆ちゃん、一体どういうことなのかな？」

不思議そうに聞いてくるなのはちゃん。

お願い、そこは深く聞かないで！！

「う～ん、そこは当人達の問題だから私がどうこう言えないからな」

苦い笑いしながら絆ちゃんは答えた。

お願い、それ以上は言わないで！！！

「言える事は、葵は『御神の剣士』として『護衛』しているって事かな？」

その言葉になのはとすずかは驚いていた。

『御神の剣士』の言葉が出てきたから。

「だからなんだ」

「後は当人達ってことかな？」

だから、当人たちって一体何のことなの！！

―すずかｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

用事の場所、そこはトイレだった。

「ふぅ～、何とか間に合った」

あんな女性の場所に『しょんべん』何て言える訳ないし。

《それより葵様、今日は行くんですか？》

「（図書館だろ。すずかは行く日だったはずだし、行くしかないだろ？）」

《（その時は、魔力非感知モードに入っておきます）》

確かにそうだな、まだ騎士たちにばれるのは得策ではないな。

「（お願いする）」

教室に戻る時に職員室でフェイトとアリシアの二人と鉢合わせした。

「二人ともどうしたんだ？」
「うん、先生に授業の進み具合について聞かれていたの」

そう言えば、ミッドとこっちの授業進行は違うはずだし。

「二人ともご飯は食べたの？」
「えへへ、実はまだだったりする～」
「葵くんはどうしてここに？」
「ご飯は食べたから、なのはちゃん達は屋上でまだ食べているはずだよ」
「判った。ありがと～」

そう言って、二人と離れようとした時。

「（さっき、リンディさんからさっきの人の事を聞いたら驚いていたよ）」

ま、そうだろうな。
僕の口から出てくる事は無い人の名前だしな。

「（調べてみるって言ってたよ）」
「（了解）」

すれ違いで念話で語り、僕は教室に戻った。

放課後、この前の図書館に向かった。

「何か借りるものがあるの？」

「うん、それに友達が来てると思うから」

その友達が八神はやてだと思うけど。

「あ、すずかちゃん！」

その入り口前に目的の人が居た。

「こんにちは、はやてちゃん」

まぁ、こんなに再会が早いと思わなかったけど。

「・・・・・あ、この間の！？」
「あ、あはは・・・こんにちは～」
僕は苦笑いするしかなかった。
「葵くん、知ってたの？」
少し驚きながら、すずかは二人を不思議そうに見てた。
「何か読みたくってフィアッセさんに図書館の場所聞いたら丁度あってね」
「私が倒れそうなったのを助けてくれたんや」
そして、かなり奥の席に座りそれぞれ自己紹介した。
「槻月君は初音島って言う所からきたんやな～」
「そんなに珍しくないと思うけどね。あんまり無い所だと思うし？」
「けど、一年中桜が咲いてる島なんて無いと思うけどな」
そんな島がもう一つあった僕が見てきたいですよ。
「交換学生としてこっちに着てるから１２月には向こうに戻らないといけないけどね」
そう、この交換学生は１２月までの期間で実施されている。
とは言っても、今回の【交換】の期間だけどね。
暫くして、勉強が進み、閉館時間が近くなってきた。
「主（あるじ）、はやて」
その言葉に振り返ると、赤い髪のポニーテールで凛とした女性が

立っていた。

「シグナムさん、こんにちは」

そう、迎えに来た人こそが『烈火の将』だ。
ここはシャマルが迎えに来るかと思ったが予想が外れたな。
しかし、感じてる物があった。

「（魔力の残り香・・・・・・さっきまで戦闘していたのか？）」
「私の顔に何かついてるものがありましたか？」

少し驚いた顔でシグナムが僕の顔を見ていた。

「あ～、不思議な『残り香』がしたので・・・忘れて下さい」
「うむ、そうか・・・・・・」

あ～、バレなければいいけど。
取り敢えずは、魔力変化で『F』まで落としてるから『蒐集』からは対象外のはずだし。

「それじゃ、失礼するな～」

そういって、二人は図書館を後にした。

「なぁ、すずか」
「うん、なに？」

不思議そうに聞いて来た。

「これからも八神さんと仲良くしてね？」

「・・・・・・うん」

これから、一番危険な気がする。

この物語が終盤となりかけているのだろう。

第二十八話：これはフラグでしょうか？（後書き）

ご閲覧ありがとうございました。

第二十九話：烈火の炎と約束と（前書き）

駄目文ですがお願いします。

第二十九話：烈火の炎と約束と

僕は、違う惑星に来ていた。
今回は違法施設の破壊で来たのだが。
そこの施設はもう既に放棄されていた。

《かなり前から放置されてますね》
「流石にこんな状況に生命反応があったら怖いよ～」

取りあえず、以前使っていた『仮面』と着けて来たのだが。

「やっぱり外れかな？」
《・・・いえ、どうやら先客が居たみたいですよ？》

その言葉に僕は戦闘態勢をとった。
奥は暗くて見えない。
かといって先制はしたくない。
その時。

『紫電一閃！！』

その言葉と同時に葵はアームドデバイスに変化させた。
双剣にして攻撃を受け流した。

「あ、あっぶな～」
「・・・・・受け流したか」

その声に顔を上げると見知った顔があった。
あの日会った赤い髪のポニーテールの女性。

今は騎士甲冑を着込んでる。

「夜天の書の騎士の一人。『烈火の将　シグナム』と出会うか」

僕は聞こえない様に呟いた。

「こんな所で会うとは思わなかったし」

さて、多少本気で戦わないとどうしようもないな。

あんまり使う事は無いけど一回使うか。

「夢幻書庫起動、使用作品『Ｈｙｐｅｒ→Ｈｉｇｈｓｐｅｅｄ→Ｇｅｎｉｕｓ』使用キャラ『明智久（あけち）　司郎（きゅうしろう）』＆『葉月（はづき）　翠名（すいな）』」

そして、右手を頬に当てて指の間から世界を見た瞬間、全てが止まった。

【高速思考（ハイパーハイスピード）】

このキャラの『能力（ギフト）』である。

この世界ではあまり意味が無いと思ったのだが。

「（【時間停止（ハイパーハイスピード）】の力はやはり役に立つか）」

その上もう一つ『能力（ギフト）』を使ってる。

【理論回路（ロジカルダッシュ）】

この二つを平行で使用しているのだ。
通常の脳なら焼き切れて廃人になってるだろう。
そこは、輝羽の演算能力が物を言わせている。
神に匹敵するの情報処理能力者だから。

『（葵、いつもの技法で倒せるよ）』

いつもの技法、そう解答が出てきたんだから従わないわけは無いな。
僕は、体勢低くした。

【瞬動術（クイック・ムーブ）】

その一瞬にして、相手の懐に入り込んだ。

「はぁぁ！！！」

シグナムが剣を振り下ろした瞬間、瞬動術を解除した。

【神速】

直線状しか移動できない光速移動術から神が移動する早さの移動法に変化させた。

「なっ！！？」

【心打ち（はつうち）】

背中に回り込み手をついた。

「ジ・エンド！！」

ズドンと言う音が聞こえた瞬間、シグナムを１０Ｍ先に吹き飛ばした。

そして倒れこんだ後は動かなかった。

《葵様、流石にやりすぎだと思いますが・・・・・》

流石に僕も思ったんだが、あの烈火なんだから手を抜いた瞬間に僕が倒れていると思うよ。

「さて、完全に逃げれなく前に撤収～」

次の瞬間、輝羽の転送で家に着いたのだった。

数日過ぎた夜、部屋で勉強していた時。

「葵くん、入っていいかな？」

ノックと同時にすずかの声が聞こえた。

「すずかちゃん？　良いよ入ってきて」

「うん、お邪魔します」

そこに居たのは、湯上りなのか頬が高揚したすずかが居た。

「遅くにごめんね」

「別に気にしないし。それにそんなに遅いって時間も無いよ」

時計を見ると8時が少し回ったぐらいだし。

「明日の事なんだけどね。明日、なのはちゃんたちが遊びに来るんだけど良いかな？」

あの大人数がここに遊びに来るのか。

まぁ、すずかの家だからそれでも収まりきるだろうな。

「構わないけど、その間はユーノの相手でもしてるか」

少女たちの中に男一人はきついからな。

「それともう一つ聞きたい事があったの」

すずかは意を決した表情で葵を見ていた。

「本当にあの時の『誓い』は本当に良かったの！！」

「・・・・・後悔はしていないよ」

その言葉にすずかは驚いていた。

「上手くは言えないんだけどね、こんな繋がりも良いだろうなって思ったんだよ」

一族の契約だけどこれも立派な絆だと思うから。

「僕は誓いを破らない・・・今の命が続くまでは」

僕は振り返り、小さく微笑んだ。

「けど、１２月になったら初音島にもどらないといけないんだけど」

交換留学は12月末までなのだ。

「・・・・・それまでの間は宜しくね」

「こちらこそ宜しくね」

―???side in―

「取りあえず一件落着か？」

月明かりの屋上で逢引している二人。

言わずともながら恭也と忍である。

「あ～なったら、すずかは何でもするわよ」

「そうなのか？」

「そうよ。私が本気で好きになったらどうなるかは恭也が一番知ってると思うけどな♪」

「・・・・・あぁ」

その言葉に恭也は冷や汗をかきながら答えた。

「それに私の妹なんだからね」

そう言えばそうだった。

この世界は『なのは』シリーズの流れを汲んでるんだが『とらハ

3』の世界の構成もしてるのだ。

『夜の一族』の本編以上に色々組み込んでいるという事だ。

『とらハ』ファーストで吸血鬼が出てきたぐらいだしな。

※知らない方は小説で調べてみよう。

「好きになった女の子は強いんだからね♪」

そういって、ウインクした。

「そうだな。もう少しだけ見守るか」

「あはっ、そうだね」

そういいながら二人は楽しんでいた。

第二十九話：烈火の炎と約束と（後書き）

閲覧有難うございました。

第三十話：二人の猫とその思いと（前書き）

駄目文ですがよろしくお願いします

第三十話：二人の猫とその思いと

僕は、夜道を独りで歩いてる。
すずかは、今日一日家にいるって事だ。
こんな時間に、襲撃者がいた場合、恭也さんとシャルティエの餌食になるのは間違いないな。
もしくは、エーアリヒカイト姉妹が何とかしそうだな。

「そんな事より、こんな夜間に呼ぶなんて無礼じゃないかな・・・『ネコさん達』」

広い空き地に着いたと思うと空間閉鎖をしてきた。
なんと言うか、用意周到だな。

「これ以上こちらに加担しないでくれるかな・・・・・・『小さな鉄槌者』」

右の仮面をつけた男が言ってきた。

「残念ですが、僕は加担をしてません。助言はしてきましたが」
「・・・・・あくまでシラを切るということか？」
「本当に知らないっていってるのに・・・・・・」

呆れてため息を吐いた。

「その減らず口をここで終わらせてやる！！」

次の瞬間、右の仮面の『男』が一気に突っ込んできた。

「少し、遊んでやるか」

男がパンチを放ったがそれをギリギリでかわした。

「・・・・・落葉！！」

そのままの力を落下させ地面に叩き付けた。

「がっ！？」

直ぐに飛び跳ね、体勢を整えた。

「行け！！」

もう一人の『男』がコントロールフィンを５つ作り出し、一斉に撃ち放つ。

「・・・・・我が手は剣である。その周りには魔力を帯びている」

すると、両手が薄く魔力を纏った。

敵と自分の距離は１０Ｍ・・・使えるな。

「移動術『縮地（しゅくち）』」

瞬動術とは同系統ではあるが、縮地は自分の魔力で相手に詰め寄る移動術。

「なっ！！？」

その鼓動に相手は動けないでいた。

『魔力型の移動術』なら察知できたかもしれないが、この移動術は魔力を『一切』使わない移動方法。
そこに一瞬の隙が生まれる。
腹部に手を翳した。

「撃て『風牙(ふうが)』」
零距離からの攻撃である為、ガードはほとんど無効化している。
そのまま、後ろに吹き飛ばした。

「それでもある程度は力を殺されたか」
「つ、強い・・・」
「ここで、管理局の助っ人を呼んでも良いんだけど・・・・・・特に『クロノ・ハラウオン』とか？」
「「！！？」」

その言葉に、二人は驚いた表情になった。
けど、今出るのは得策ではないな。

「くっ！！」

次の瞬間、左の男が地面に何かを投げつけた。
すると、あたり一面眩しくなった。

「くっ、閃光弾！！」

そして、辺りを見渡すと二人の姿はなくなっていた。

「グレアムの使い魔さんの警告かな、これは？」
『（取りあえず、探査には巻いたと思ったのかなあの二人は？）』

すると、輝羽がモニター越しで話してきた。

「帰還場所は？」

『予測道理、ギル・グレアムの場所に戻ったよ』

まぁ、戻るのは予想は出来ていたけど。

『それと、さっきエイミィさんから連絡あって近い内に少しだけアースラに来てほしんだって』

「何となくは予想は出来ていた。そっちに行くって伝えておいて」

『はい、了解だよ～』

そのまま、通信をきった。

僕は、そのまま屋敷の方に戻ると一人の女性・・・いや、機械人形（自動人形）が立っていた。

「お帰りなさい」

「・・・・・ばれてましたか？」

「はい、忍お嬢様と恭也様には分かっていたみたいです」

エーアリヒカイトは自動人形の中では主に忠実だったはず。

「槻月葵さんに一つお願いしたい事があります」

その瞳は、真摯であった。

「・・・・・なに？」

「これからも、すずかお嬢様の事を宜しくお願いします」

そういって、深く頭を下げた。

「それは僕からもだよ。これからも宜しくってね」

僕は、小さく微笑、屋敷の中には入っていった。

次の日何かがおかしい事になっていた。

それは、すずかの家を出るときからだった。

「生徒章とハンカチとか持った?」

いつもは何も言わないすずかは今日は特に口を出してきてる。
「エチケット類はちゃんと持ったよ。数学の宿題もちゃんと終わらしたし」
あの抜き打ちの宿題は無かったとは思いたかったよ。
「あっ・・・・・・」
その言葉に顔が真っ青になっていたのは言うまでもなかった。
「もしかして忘れた?」
その言葉に、うんうんと頷いていた。
「学校に行ったら、ノート貸してあげるから」
「う、うん。ありがとう」
どっかに居たな、こんなおっちょこちょいの幼なじみみたいな女の子。
すずかは幼なじみではないけど。
もしかして、何かの弾みで聞かれていたとか無いよな?
「私の顔に何かついてる?」
不思議そうに僕の顔を覗き込んでいた。
「あ~、何でもないよ。それより早くしないと学校に遅れるよ?」
そういって、携帯の時計を見ると結構な時間が差迫っていた。

「早くしないとバスに遅れちゃう！！」

そんな光景は、ほんと頬ましいと思う。

こんな時間がもう少し続けば良いなと切(せつ)に願った。

第三十話：二人の猫とその思いと（後書き）

閲覧有難うございました

第三十一話：雷と神に遣う狐（前書き）

と言う訳で、この子がやっと登場です。
次の話から出てくるのかが些か疑問ですがw

ぷらら「う～ん、ぷららの場合はお留守番だからね」

シャル「私の場合は擬似体が初音島にあるだけですかあらね」

葵「普通の人間がいないぞ（＾―＾；）」

・・・・・・で、では始まります。

第三十一話：雷と神に遣う狐

休みの日になのはに呼び出しを食らった。
その呼び出しをされた場所は。

【八束神社（やつかじんじゃ）】

－ＡＭ６：００　八束神社　鳥居前－

ちゃんと恭介さんにお願いしたはずなんだけど・・・・・・
ゆっくりと後ろを振り返ると。

「・・・・・・（ニコニコ）」

笑顔で居るすずかとその後ろにはノエルさんが立っていた。
無言の笑顔が物凄い怖いです・・・。

「よく分かったね？」
「葵くんのことだから♪」

すいません。何処の芙蓉さんなんでしょうか？
最後に人格変貌がないことを切に願います。

「けど、ここってあんまり来ないよね？」
「はい、巫女の神咲那美様が居られます」

因みに狐も居るんだけどね。

「神咲一刀流の使い手・・・・・・か」

僕は再度階段を見つめた。
それにしても気配がおかしい。もう少しどよんだ力が感じられるんだけど。
三人は、境内に入った。
上につくと、月村家に居るはずの三人や高町家（鴛夫婦は除く）そして。

「えっと、はじめまして」

巫女服に包んだ一人の女性が居た。

「神咲那美です。この神社の神主代行してます」

少しおどおどしていた。

「僕は槻月葵です。こちらこそ宜しくお願いします」
「朝早くに呼び出してごめんね。どうしても人手が欲しくって」

なのはは少し元気が無かった。
その理由が。

「三日ぐらいから久遠の姿が見えないのです」
「えっと、久遠って言うのはね、狐の事なんだよ」
「その子が三日前から見えないって事ですか？」

そう答えると神咲さんは沈んだ顔をしていた。

「とりあえず、森を重点的に探しましょう。なのはさんとすずかちゃん、レンさん、ノエルさんはここで連絡待機で残りは散策して探

しましょう」

僕は、サクって指示をして散らばった。

散らばった後。

『葵、もう直ぐ結界内に入るよ！！』

そう、もう久遠の所在地を掴んでいたのだ。

しかしそれは最悪のパターン。

ヴォルケンの二人『ザフィーラ』と『シグナム』だ。

取りあえず、ここに探索に長けている『シャマル』じゃなかった事を心より感謝した。

とは言っても、ザフィーラは鼻が利く。

三日三晩もイタチゴッコしてるのだから精神的にもヤバいはず。

『結界内に進入。う少しで目標と接触するよ！！』

輝羽の言葉で目の前には久遠が居た。

【移動術『縮地』】

そして、一瞬に間合いを詰めて久遠を掻っ攫った。
その横を見るとザフィーラが捕まえる手前だった。
とっさに神速に切り替えかわした。

「ぐっ！！？」

次の瞬間、右腕に激痛が走り目を向けると久遠が思いっきり噛んでいた。

「ぐっ・・・けど、好都合だ。ここを出るまでは噛み続けていろ！！　そしてら・・・・・・」

久遠を見て、驚いた。
体全体に無数の擦り傷や攻撃で出来た傷があり、そこから出血していたのだ。

「・・・・・・頑張ったね久遠。これ以上は傷つかなくってもいいから」

次の瞬間、森がざわめき出した。
そして、襲い掛かる二人に手を翳した。

【震音刃（じんおんは）】

音の刃が生まれ、防御ごと吹き飛ばし木々に叩き付けた。

「マルチビット二機展開」

すると、ビットが二機出てきた。

「打ち砕け、永遠を列なる光」

【ｅｔｅｒｎａｌ　ｂｒｅａｋｅｒ．】

「マルチブレーカー！！」

すると、ビット二機に光が集まった。

集束能力で周りの魔力を強制的に集めているのだ。

「ツインエターナルブレーカー！！」

その光は結界を完全破壊させたのは言うまでも無かった。
その威力は『ツインブレーカー』（なのは・フェイトのブレーカー技）同威力の高出力を持ってる。
それを見た久遠は噛み付いていたのを離していた。

「う～、疲れた～」

僕は地面に座り込んだ。
敵の方も前戦離脱はしているみたいだし。

「暫くは来ないと思うから安心しろ」

そう言って、久遠の頭を撫でた。

「くぅ～ん」

すると、チロチロとさっきまで噛んでいた腕を舐めはじめた。

「あはは、くすぐったい」

暫くして、境内に戻ると全員が揃っていた。
因みに久遠の傷は、ここに来る時に塞いでおいた。

「久遠！！！」
「！！！」

僕の手から離れて那美さんの所に走っていった。

「酷くやられたものだな・・・・・」

恭也さんが俺の腕を見ながら苦笑いで言っていた。
久遠に噛まれた痕は消す事を忘れていたのだ。

「・・・・・とりあえずはお疲れ様だな」
「はい」
「久遠？」

その声に振り向くと、久遠が那美の手から離れて僕の方を見ていた。

ーバチバチー

「えっ！？」

次の瞬間、久遠は獣から人獣に変化していた。

「く、久遠！？」

その行動に全員は唖然としていた。

「あおい・・・・・おねがい・・・」

それは、神の試練と一瞬思った。

「たおしてみて・・・！！」

その言葉と同時に、一気に加速してきた。

一瞬に間合いを詰められた。

「なのは、ユーノと絆は全員をガード！！！」

ズドーーーン！！！

多重雷撃が僕の体に襲い掛かる瞬間、光鷹翼の展開に間に合ったが思いっきり吹き飛ばされた。

「くっ！！」

追撃で久遠が空中に飛び立った。

「つぎ！！」

雷撃を両手に展開していた。

「こっちも同等だ！！！」

同じく両手に雷を展開した。

【雷撃掌（らいげきしょう）・両式武装】

久遠と攻撃が重なった瞬間、空間爆発が起こった。

「しゃ、洒落にならないってこれ・・・・・・」

地面に降り、印をきった。

『く』を作った。

「カノのルーンよ!!」

すると、葵の体が炎に包まれた。

『カノ』は『ソル』よりは力が弱いが開始や導きの光として表す。

弓が出現して鏃の方を久遠に合わせた。

「細く・・・鋭く!!」

その矢は細くなりそして・・・

「シュート！！！」

乾いた音が響いた瞬間、久遠を貫て黒い霧が出てきて消滅させた。
そして、落下してきた久遠を抱きかかえた。

「・・・・・もう祟りは消えたよ。けど、久遠の中に残った祟りの力は残ってる。その力は、もう久遠のものだから、同使うかは君しだいだよ？」

しかし、その言葉は聞こえないのか安らかに眠っていた。

「だ、大丈夫ですか！？」

なのはとユーノで護られていたみんながこっちにきた。

「本当に大丈夫？」

フィアッセさんも心配そうに聞いて来た。

「大丈夫ですよ。こんな事は日常茶飯事でしたから」

腕の中に眠ってる久遠を神咲さんに抱き渡した。

「あ、あの！！」

「この子の中にあった祟りの本体は消えましたが、力は残ってます・・・・・その力に向き合うかは貴女に任せます」

僕は、皆にお辞儀をするとその場を後にした。
その後ろをすずかとノイエが付いて来た

数日が立った日。

「あおい・・・だいすき♪」

何故か、家に居た僕の膝の上には『久遠』が占領していた。
しかも久遠は上機嫌だし。

「葵くん、ごめんね。久遠が・・・・・・」
「気にしないでください。何となく予想はしていたんですけど」

それにしても、あの一戦で久遠がこうなったのは本当に不思議だ。

「う～、久遠ばっかりずるいよ～」

その遠巻きですずかとファインが恨めしそうな表情をしていた。
貴方たちはなにがしたいのですか??
何故にこの二人（?）が居る理由は『メンテナンス』だ。
ノイエさんのメンテのために臨時で那美さんがメイドをしてくれているのだ。
まぁ、この状況は見ていて楽しいし。

「そう言えば、久遠は大丈夫なんですか？」
「えぇ、実家の方も納得してくださいました。それと・・・・・・」
何故か那美さんは苦笑いしていた。
「薫ちゃんが、今度こっちの来る時に手合わせしたいという事よ」
それって、一体何の苛めなんでしょうか？
「あおい」
そう言って、久遠が見上げてきた。
「がんばれ♪」
抵抗は無意味なんですね。
そんな項垂れているとみんなが笑っていた。
みせものじゃないんだけどなぁ。
そんな微笑ましい一日だった。

第三十一話：雷と神に遣う狐（後書き）

毬藻「復活！！　雑談会～」

鷲羽「ほっんと、久々に作ったわね」

毬藻「心境の変化に何とかついていけてこれまで書ける様に心のゆとりが出来たってことだね」

久遠「よかったね・・・毬藻♪」

毬藻「今回は、リリなので好きなキャラの一人（？）の久遠です」なのは「ちょっと待って！！　久遠ちゃんはリリなのにはでてないよ！？」

毬藻「あぁ～、『旧』リリなので出てるよ。因みに位置的にはユーノの場所かな」

絆「言ってましたね。『もしユーノが生まれていなかったらこの位置は久遠が来ていたのかｗｗ』って」

毬藻「んで、クロノは敵のままって事かｗｗｗ」

絆「シナリオ自体は変わってるから言えることだけどね。久遠ちゃんって元々は神の遣い？」

毬藻「うん、祟りに憑かれる前は神様の御使いだったはずだよ。その時にまぁ、色々あったから聞かないであげてね」

絆「次回は？」

久遠「葵の上で日向ごっこ♪」

絆「では、次回もお楽しみに～」

毬藻「って、その次回は間違ってるから！！！」

第三十二話：闇の降臨（前書き）

毬藻：色々吹っ飛ばしたなｗｗｗ

鷲羽：って、私の出番は！？

毬藻：暫く後書き要員ｗ

輝羽：え、えっと・・・・・・始まります～

第三十二話：闇の降臨

僕は、爆風に飛ばされ屋上から落下した。
地上スレスレで地面との接触を避けれた。

「僕に来る【力】を【拒否】する」

確かあの魔法は『デアボリックエデッション』
しかし、その力は葵の寸前で掻き消えた。
すると、三つの光が飛び立った。

「シャル、こっちも応戦するよ」

《分かりました。魔力能力以外を全て解除します》
「魔力変動。ランク『F』から『SSS』まで引きあげ開始」

次の瞬間、体に熱を持って魔力が巡回してるのが分かる。
次の瞬間、フェイトから通信が入った。

「葵、逃げて!!　今、闇の書がなのはの最大砲撃を撃とうとしてるの!」

なのはの最大砲撃というと『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　ｂｒｅａｋｅｒ』でしょうか。

「分かった。何とかするから出来るだけ距離を取って」
「気をつけてね」

通信を切った。

「シャル、あの力を掻き消すよ」
《夢幻書庫起動。使用タイトル【デュアル！はられルンルン物語】使用能力【神武】》
「光鷹翼二枚展開」
背中に光鷹翼を二枚展開した。
《固定バレル展開、範囲指定展開可能》
葵が手を翳した瞬間、黒い不安定な球体が出来上がった。
そして、それを掲げた。
《砲撃来ます！！》
そして次の瞬間、【Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　ｂｒｅａｋｅｒ】の光を飲み込んだ。
光の欠片も残さず吸い込んだ。

かなり距離から見ていた人々は。

「い、一体何があったの!!?」

アリシアは驚きながら光が消えたほうを見ていた。

「葵くんが何かしたなんだと思うよ」

したと言っても、あの威力を【無力化】するって。

「この状況自体が既に驚いてるんだけどね」

その後ろに居るアリサが呟いていた。

それはそうなんだけどね。

「えっと、使用能力の説明・・・・・・っている?」

小さく手を上げて、絆が手を上げた。

そう言えば、絆は葵とは精神リンクが出来たいたんだ。

「私もそんな多く分かってはいないんだけど・・・・・今使った

のが固定型の【ブラックホール】の超小型版」
「ちょ、ちょっと待ちなさい！！　ブラックホールって？」
「次元固定化と範囲固定と形成を数十秒間の開放・・・・・・流石に遣る事が非常識です」
絆も苦笑いしながら答えていた。
※貴女も残念ながらその非常識の事から出来た産物ですが。
次の瞬間、二つの光が一気に海岸沿いまで引っ張られていった。
「い、一体何が起こってるの！！」
アリサはほとんどパニック状態だった。
「なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、絆ちゃん、葵くんの事をお願いね」
「すずかちゃん・・・・・・」
その言葉にアリサ以外は驚いていた。
「うん、その前に二人を安全な場所に運んで貰うね」

その言葉に頷いていた。
すると、淡い光も魔法陣がアリサとすずかの足元に出来て、そして、消えた。

「ばれちゃったね」
「けど、今は立ち止まってる場合じゃないよ」

絆の言葉にみんなは頷き、海岸沿いまで急いで飛んだ。

その海沿いでは。

「コキュウトス！！」

無数の水球を作り、それを闇の書にぶつけていく。
それをシールドで守るが水球がシールドに触れると同時にシールドを崩壊させた。
水球にはもう一つのプログラム【防壁破壊】が組み込まれていたのだ。
しかし、崩壊と同時に直ぐに防御を作り変えるので本体には当る事は出来ない。
暫くして、なのはたちも合流したのだが。
そこが盲点だった。

「なら、飲み込めば良い！！」

そう言って、突っ込んできた。

「えっ！？」

それは、フェイトの方にだった。

「やばっ！！」

僕は、加速してフェイトの前に立ったが。
防御する前に飲み込まれた。

「あ、あおい！！！！！！」

絆の声が木霊した。

「・・・殿、葵殿ってば！」

僕の体を揺さぶってくるが、この強さではまだ夢の中に行くよ。

「・・・・・・抜刀！！」

次の瞬間、半意識的に覚醒してガードした。

「目が覚めましたか。葵殿？」

目の前には、優しい微笑を浮かべながら僕を見ていた。

「え、えーっと？？」

僕はさっきまで闇の書と戦闘していたんだけど何で？

「る、瑠璃！？」

目の前にいるのは俺の元恋人の『瑠璃』の姿があった。

第三十二話：闇の降臨（後書き）

毬藻：後書きコーナー

輝羽：今回執筆が遅かったですね？

毬藻：仕事の後にＳＨ○○ＡＸで歌ってました～

輝羽：凄く頑張ってるね～

絆：それにしてもあの機体の能力って出してよかったの？

毬藻：光鷹翼しないと暴走するネタだから・・・・・・大丈夫でしょ。原作者も同じ人だし。

絆：ぶっちゃけてる・・・

毬藻：さって次回は？

瑠璃：私の出番ですね♪

絆：ほぼ、Ａｉ　○ｐ@ｃｅ化しているような

毬藻：ってか伏せ字になっていないようなｗ

ぷらら：では、次回もお楽しみです～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0807r/

チート魔術師と桜の木

2011年10月26日11時06分発行